**導　く　力**

―救済の核エネルギー炉に向かってー

**長瀬　隆**

**梗概もしくは要約**

全三章Ａ４七〇枚からなるこの作品は語り手「私」瀬川修の「あなた」なる女性への呼びかけではじまる。彼女、大分市うまれの辛島和子なる女性には、「私」が会うことが無く、残された二百首の短歌と日記――それらは没後友人により遺稿集『花火』に収められた――によって知るだけの兄上がいた。後に角川版『昭和万葉集』に収められた五首があるのであるが、「私」が紹介するのはそれには収められなかったものである。最初は戦争末期の大分大空襲を歌ったもの　である。

　妹はこの時広島に滞在していて爆心地から１・３キロ地点で原爆に遭い、しばらく行方がしれなかった。そのさいの不安を歌った一句。やがて消息が知られ兄は家人と共に広島に彼女を戸坂村の収容所に訪ねる。その際の六首が、解説を交えて紹介される。兄正道氏は結核を病んでいてやがて一九五一年に亡くなる。広島から帰還した彼女は体が回復して大分県庁に勤めるが、生来の明るい性格は変わらず、兄によれば「わが家の太陽」だった。

　一九五四年一月、ビキニ環礁での米水爆実験による焼津のマグロ漁船の被ばくがあり、水爆禁止の署名運動が起こる。漁船員での焼津の葬儀に彼女は労働組合から出されてそれに参列する。一九五六年長崎での第二回の原水爆禁止世界大会に大分原水協の代表の一人として出席、日本被団協の結成と発足に参画、大分被団協の初代の事務局長になる。また一九五九年にウィーンで行われた第六回の世界青年学生平和友好祭というものの日本からの団（百四十名）に日本被団協の代表として送り出される、「私」はそのなかで彼女に出会い、翌年に結婚、つまりは良人となったのである。

　「私」は樺太に生まれ育ちソ連占領下で一年半暮らし引き揚げている。「樺太について書かねばならない」とは、まだ樺太に在ったときから思っており、それにもっとも相応しい学科と信じかつ願って、当時はそこだけにあった西北大の露文科に進んだ。しかしそこで遭遇することになったのは、ソ連作家のなかではドストエフスキーの影響がもっとも強いと評されていたレオーノフ（一八九九～一九九四）だった。

　そのような状態で一九五七年学部卒業の年、「私」は、発足から三円目にあたっていた日本原水協にロシア語要員として採用され、その訪ソ使節団に加わって訪ソする。一人の被爆者も加わった団であり、その二年後にあなたとの出会いの旅があったのだった。

　結婚後「私」は、これも国交回復後始まったソ連貿易の会社に就職するが、学生時代以来のレオーノフへの関心は持続していた。とくに問題だったのは、大戦中の四幕戯曲『襲来』（１９４４）という作品だった。

　ロシアの西部の町に、明日にも独軍がはいってくるという日に、フョードルという青年がどこかで刑期を終えて帰って来るが、医者である父の家にはすぐには寄り付かない。ようやく現れ、鉢合わせした共産党の町委員長コレースニコフにパルチザンへの参加を申し出るが、断られる。独軍幹部が次々と狙撃され、死体の傍に「よくいらっしゃいました。コレースニコフより」の書置きが残される。しかしやがてコレースニコフは負傷し、医者に頼る。包囲されて絶体絶命の状況でフョードルが現れて捉えられ、名を名乗るように言われて「コレースニコフだ」と答える。すなわち身代わりとなって連行される。

　フョードルの刑は情痴による殺人未遂のためとされているが、どうもそうした単純なものではなさそうである。スターリンガ絶対者として君臨する社会そのものにあるように見える。作中にはもう一人刑期を終えた元富裕な商人が登場するが、その老人がゲシュタポに語るところでは、「白軍で戦い戦死した息子と同じく…」ということであり、父親の医それを者は激しく否定する。

　半地下の牢屋にはフョードルの妹にしてコレースニコフの恋人であるオリガをふくむパルチザン隊員が捉えられている。尋問をうけて戻ってきた男の一人が、コレースニコフの人相を問われて困ったと告白する。そうしているうちにコレースニコフと誤認されたフョードルが連行されてき、兄を恥じていたオリガは仰天し、「変心」の理由を質すが、彼は「話せば長くなるよ」と答えない。「ぼくは君たちに命を捧げる。しかし受け取りは求めないよ」と微笑む。

　牢屋には一組の老人と孫がいて、老人はクレムリンでの農業関係者の集まりでスターリンを見ており、求められてその時の模様を語る。参集していた多数が石ころ同然なものと化し、広い部屋はスターリン一人によって満たされたのである。処刑を覚悟している孫に「スターリンはぼくを見ていてくれているだろうか」と問われ、「もちろんだよ」と答える。

　処刑が始まり、フョードルを含む三人が引き出される。ひとりずつ絞首刑にされるのであるが、「スターリン！」の叫びが二度聞こえる。叫ばなかった一人がいたようである。

　上空に爆音が聞こえ、高射砲が鳴り始めて味方機であることが判明する。窓辺によじ登った少年（孫）がパラシュート部隊の降下を見て、「スターリンが来た！」と叫ぶ。

　ドイツ軍の襲来を喜んでいた元商人の老人は、すでにモスクワ前面でのドイツの敗北を聞いて失望し、コレースニコフに対して、すり替わりに気づきつつ、ドイツ側に告げなかったことに免じて許せと頼んでいた。彼は故郷の町に帰還の途中で撤退してくるソ連軍に遭遇しており、ひとりの兵士から「爺さん、ロシア人はかならず戻って来るからね」と励まされていた。パラシュート部隊にはその兵士が混じっていて、老人を抱擁する。コレースニコフはフョードルの名を連呼しながら牢屋に入って来るが、姿がないので上の処刑場に向かう。入れ替わりに母親が入って来る。オリガは母に「（処刑された兄を）見ましたか？」と問い、母は頷く。「いけないわ、ママ。涙を流していないじゃない」。そして乾いた目の母親が最後に言う。「あの子は私たちを去っていった。しかし帰ってきた。あの子は永遠に私たちと共にいる」。

　「私」がこの戯曲を読んだのは、スターリンの死の翌年、一九五四年の秋のことだった。フルシチョフらによるスターリン批判の二年前であって、スターリンはまだ神格化されていた。しかし「私」はフョードルの像に強いスターリン批判を感じとった。

　事実この作品は雑誌編集部で物議を醸し、掲載が危ぶまれ、作者はクレムリンのスターリンにゲラを送り、直接電話し、その同意をへて掲載された。そしてその後にスターリン文学賞の一位になった。またわが国の蔵原惟人、戦前からのプロレタリア文化運動の指導者＝ロシア文学者はその講演「スターリンと文学」において、このことをもってスターリンガ文学を理解していることの証左とした。「私」はこれには納得しなかったのであって、秘められたスターリン批判の作品と把握し、それを論証すべくレオーノフの露文の読むことになったのである。

　ソ共二十回党大会があり、そこでのスターリン批判を歓迎。翌年全国紙にも報道されて初めてモスクワの土を踏み、クレムリンで首相と会見、しかしレオーノフに対する関心と疑問は残り、疑問そのものは作家その人に質す以外にないと思うことになった。「私」はモスクワに留学を目指すことになったのであり、一九五九年のウィーン友好祭は、帰路には段位いない予定で加わったのである。そのなかで、「あなた」＝辛島和子に出会い、留学を断念・放棄して帰国、結婚して会社員になった。しかしレオーノフは読み続け、考え続けた。

　一九六二年、日ソ文学交流で作家が来日し、機会が与えられて「私」は会い、積年お疑問を質した。「改作を執筆中なので、それを見てください」とのことで、程なく新しい戯曲集にそれを見ることにった。大きな改変がなされていた。それは積年の疑問が根拠のあるものだったことを明らかにした。しかし改作の結果には不満であり失望しただけではなく、裏切られたような気持ちを味わった。「私」はレオーノフ全集を読むのを止めた。

　「私」は初元のテーマである樺太に回帰することになる。しかしそれはソ連の行く末に見定めがつかず、難航して年数がかかった。ソ連反体制の歴史家の地下出版物の一つに刺激されて、ソ連派崩壊するのではなかろうかと疑ってきたのだったが、一九八三年に結論が出て『樺太よ遠く孤独な』を執筆、一九八四年に上梓した。

　ところがまだ本が出る前に、「あなた」に異変が生じた。原爆で両手足にやけどが残っており、最初の子は重症の心不全で生まれ、四歳十か月で逝っていた。しかしあなた自体は健康できていたのだったけれど、この年、二度目の乳がんで両乳房を失い、腎臓にも癌が発見されて年末には人工透析の生活に入った。そして翌一九八五年には転移したとの診断が出て、一時は余命がいくらかということ相成った。しかしこの衝撃によって、あなたとの出会いの外国の旅が書けるものに変化した。こうしてそれは一九八五年に『ヒロシマまでの長い道』の表題で書きあがった。

　この小説の出版が一九八九年と三年遅れたのは、ソ連初期の文芸学者ペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』という本に関連して調査と翻訳に取り組むことになったがためである。かくて一九八九年という年はこの二つが前後して出た年となった。

　「私」は「あなた」との出会いと結婚を樺太から引き上げて来た「私」の一個の到着と考えて来た。しかしあなたというヒロシマに、「私」はどのようにして到着したのだったろう。

　顧みるに「私」は樺太から無媒介に原水禁運動に出会ったのではなかった。西北大の学生生活が有ったからであって、それは一人の教授との出会いの結果なのである。戦前は付属の高等学院の英語の教授で、木寺黎二のペンネームでドストエフスキーとシェストフ関連で業績を残した。しかし戦後は本名の松尾隆に戻り、日本共産党に入党、マルクス主義の啓蒙活動に従事、平和運動、また学生運動の指導に従事した。一九五六年に持病の心筋梗塞のため四十九歳で没。大隈小講堂で平和葬の名による葬儀、古在由重、宮本顯治、出隆が弔辞を読んだ。越えて三十年、一九八六年に没後三十年の記念行事があり、文集『松尾隆――早稲田の疾風怒涛時代を駆け抜けた教授』が制作発行される。その準備の過程で以降のなかからドストエフスキーの関連の未完の原稿が発見され、その処理に「私」が当たることになった。半年におよぶ調査の結果、ペレヴェルゼフ（一八八二～一九六八）の一九一二年の処女論文『ドストエフスキーの創造』と特定され、「私」があらためて全訳することになったのである。

　それがつまらない論文であったならば問題は起こらなかった。それがドストエフスキーの本質を剔抉した唯一の論文であり、かつマルクス主義のものであることによって問題が生じた。革命後のソ連で大きな権威をもちながら、スターリン時代の到来とともに弾圧・葬られていたこと、そのために完訳を断念したことは理解できた。問題は晩年のただ一人のドストエフスキー関連の学生だった「私」にたいして、どうして一言も伝達せずに逝ったかということだった。

　もしも伝達されていたならば、「私」は六〇年代の初めにはそれを翻訳刊行していたし、次作の『ゴーゴリの創造』をも訳し、ロシア文学者になっていた。まったく沈黙して逝ったために現にあるような人生になっているのだった。学部と学科は異なるが、教授との関係では兄弟子にあたる人に、一九五〇年のレッドパージ反対闘争時の西北大全学自治会委員長の吉田嘉清氏がいる。日本原水協発足当時から事務局で要職にあり、一九八五年に共産党から追われ、平和事務所を立ち上げていた。「私」は望まれてこれに参加していて、一九九一年にはその団に従ってベルリン、バルト三国、チェルノブィリ（正しくはミンスクとキエフ）を訪ねた。吉田を団長とし、広島大原医研の所長らが加わったものだった。帰国後にソ連が崩壊。「私」はこの間ずっと次の仕事の選択に迷っていたのであって、胃がんの手術をうけたこともあり、やりかけていた『ゴーゴリの創造』の翻訳を止め、小説『微笑の沈黙』の執筆に入った。松尾隆教授のペレヴェルゼフについての沈黙、亡き長子の沈黙の意味を、重ね合わせ訊ねた物語だった。一九九六年刊。小田切秀雄さんから賞賛される。

　戦後初期学生運動の総括を目指して、一九九八年末から全六冊の季刊雑誌『早稲田・一九五〇年・史料と証言』の製作発行が始まり、私は編集に従事しつつ評伝「松尾隆」を連載。同時に並行して東大の旧国際派細胞の『一九会文集』の発行があり、相互に執筆者の交流があり、同一問題の追及があった。吉田嘉清が招かれて話すということがあり、私が随行し、以来毎年一月九日に案内が送られてくるようになり、二〇〇八年加齢により閉じられるまで出席、新しい交友を得た。

　ソ連の崩壊前後からサハリンの郷土史学界に変化があり、大学の教科書の記述に変化が現れた。海峡の発見者として間宮林蔵の名が出るようになり、チェーホフの『サハリン島』に依拠したこと明らかだったが、その名を伏せていることが奇怪だった。チェーホフは、サハリンの地名の由来となった清国の地図の製作者として皇帝の固有名詞は挙げていないのであるが、康熙帝の名が掲げられているのだから、異様なのである。その秘密をとく鍵は、世界に先駆けてなされたとされるシーボルトの大著『日本』の露訳のうちにあると私は睨んだ。調べてみると、シーボルトが力をこめて紹介している間宮林蔵以下の日本人の業績が、ロシア政府の検閲により完全かつ全面的に削除されて翻訳されているのである。したがって『サハリン島』における正しい記述は、これに気づいたチェーホフが、露訳は捨て、ドイツ語原書に依拠し、その翻訳者として執筆したことを意味した。またそのことが分ると、日露感K利子の全部が明瞭となるのだった。『日露領土紛争の根源』を執筆した。レオーノフの「祖国（ロシア）を愛しながらも、彼チェーホフは彼女に媚びなかった」が役立ち、これも紹介した。

　その刊行は二〇〇三年だったが、その翌二〇〇四年はチェーホフ没後（同時に日露戦争勃発）百年委あたり、メリホヴォで演劇祭と国際セミナーがあり、「私」は自著について報告し、それは縮小さて報告集に収録された。

　ドストエフスキーは『貧しき人々』によってロシア文学界に彗星のように現れたのであるが、≪ドヴォイニク（二重人と分身の両義を有す）≫と題された第二作は小市民（貴族￥地主に非ず）主人公ゴリャートキンの発狂で終わるだけではなく、日本の小林秀雄が評したように「作品そのものが発狂している」理解不能の作品だった。注目すべきは、若かった作者がこれによって「ゴーゴリを抜いた天才になった」と思いこみ舞い上がったことである。あまりの不評に消沈し、流行の（空想的）社会主義の不勉強に起因すると考え、ペトラシェフスキーの会に加入、帝政による弾圧により、逮捕、一度は死刑を宣誓されるもカザフスタンに流刑。七年の空白の後に文学界に復帰。当然のことながら、その後の文学は帝政に妥協忍従しつつ抵抗するものとなる。

　ドストエフスキーにとって第二作の失敗は骨身に堪えた。そのため以後このドヴォイニクをけして使用しなかったが、この言葉を意識しないで製作した作品はひとつもない。手を変え、品を変えてドヴォイニクは追求された。この性格はロシア帝政の身分制社会における中間の小市民の性格であり、上層のそれではない。しかしロシア社会を全体として描くためには、この階層の人物をも登場させねばならなかった。ロシアで文化を担っていたのはこの階層であったからである。

　こうして上辺の衣装は貴族であるが、中身の精神は小市民である、ペレヴェルゼフが命名した「仮装人物」が登場する。この離れ業的作業を、ドストエフスキーは作中に語り手を導入することによって解決・遂行した。こうした一連の人物には『白痴』のムイシキン、『悪霊』のスタヴローギンその他がいる。

　『悪霊』に引き続いて書かれた長編『未成年』で貴族とされているヴェルシーロフは、その私生児の語り手とともに「物が二つに割れて見える」人間である。スタヴローギンはキリストへの敬慕がもっとも高揚した瞬間に、手にしていたキリスト像を折り曲げ、自分がしたのではないと思う。同様にヴェルシーロフは聖像をたたき割りながら、自分ではなくドヴォイニクのせいだとする。ここで抑えに抑えて来たドヴォイニクの語がじつに12回にわたって氾濫するのである。

　そして「私たち」は一八七七年の『作家の日記』の中の一評論で作家が第二作について言及するのを見る。すなわち、明らかに失敗作であって、その後これを書き改めるべく努めたが、どうしてもうまくゆかなかった、との告白である。しかし公然と告白できたことは、ドヴォイニクがもはや公然化できることになったことを意味する。この一語はドストエフスキー解読のキーワードなのである。

　この観点から「私」は『ドストエフスキーとは何か』を執筆、二〇〇八年に上梓した。

このように世紀が変わって「私」にはロシアからみの特徴を有する研究・評論活動がかさなった。しかしそのいずれにはあなたはほんのちらりとではあるが登場してはいるのである。しかしあなたが重要な場所を占めていることでは比較にならず、それ自体が『ヒロシマまでの長い道』と『微笑の沈黙』の発展であり、あなた無しにはけして構想されなかった本を書くはめになった。

　あなたが生まれ育った大分市中島の斜め向かいに古川という家があった。日本鉱業という金属のメッキを専門とする軍需産業であって、その工場長の家であり、家同士の付き合いがあった。戦後数年して京都に転居、あなたもその後の消息は知らなかった。ところが一九八七年になって町田市つくし野のわが家にその末弟にあたる雅章氏が妻女を伴って訪ねて来た。その席に同席して、私たちは、あなたとは同級の兄、和男氏について聞きた。熊本の五高から京大化学科に進み、現行の使用する核物質がウラン、冷却が軽水（普通の水）で行われるために軽水炉と呼ばれる核エネルギー炉（原発）が、事故に際して放射線を出すので危険であること。これとは異なり、同様に原発でありながら、核物質にはトリウムを使い、媒体に熔融塩という液体を使用し、安全小型のために消費地近くに建設できるトリウム熔融塩原子炉を目指し、研究していることを語った。理論的にはすでにＦＵＪＩ（不二、富士）の名で完成しているとのことだった。初めて聞く話であって、半信半疑だったが、そういう研究が存在することは、記憶にのこった。

　それから十余年して今度は、あなたと同年生まれの当の科学技術者の兄、和男氏が弟に案藍されるようにして来客した。（「私」の『ヒロシマまでの長い道』が公刊され、女主人公があなたなので大分の新聞にも紹介されていたためでもあった）。私は都合により挨拶しただけで外出したのだったが、無関心ではなかったので、会見の模様をあなたに質している。トリウム熔融塩原子炉について熱烈にただそれだけについて語り、それ以外では尋ねたことに応えただけだったということだった。

　翌翌年の二〇〇一年に、それまでは内外の学会専門誌にだけに発表してきた和男氏が、初めて一般向けに『「原発」革命』を文春新書の一冊として公刊、あなたは贈呈されており、私に読むように勧めたが、私は手に取って見ようとはしなかった。私は平和事務所でエストニアのチェルノブィリ被ばく元兵士とその診断者である医学者を広島大に送っていた。その人は、「チェルノブイリはソ連だから起こったのであり、ソ連以外では起こらない」と言った言葉を信じていたひしがあった。

　二〇一一年３・11、すなわちフクシマの二か月後、文芸春秋社は先の新書を増補・改訂し『原発安全革命』と名を代えて再版した。新聞の一面の広告によると帯には「この原発であれば、チェルノブィリもフクシマも無かった」とあるようだった。あなたは再版を期待していて、歓声を上げ、書店に注文し、透析クリニックの帰路求めて帰宅した。私は取り上げて一読、多大な衝撃をうけた。私はこの年三度著者にお会いし、その謦咳に接した。すでにがんに冒されていて年末に八十四歳で死去。私は根をつめて勉強し、二〇一四年八月に『『トリウム原子炉革命――古川和男・ヒロシマからの出発』を上梓した。

　その葬儀にあたっては「わたしからも「よろしく」」と「私」を送り出したあなただった。しかし二〇一六年になって、脊椎の増血能力に衰えが目立ち、透析専門クリニックを離れ、近くの総合病院で治療とリハビリを受けることが重なった。入退院が繰り返され、八月末に死去。

　まことに稀な恵まれた条件下にありながら、遅れてようやくフクシマ後に古川書を読んだわけであるが、また専門外でありながら、一読してすぐに執筆しようと志し、かつ成就し終えたのは、ドストエフスキーをやってきたからである。古川は己の発明の完全性、完結性に書かう伸があり、会う人すべてにそれを訴えていた。そのため常にまたしばしば「受け入れられずに来た理由を」を問われ質されてきた。それに対して彼は「原理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きの中で、ときに不当な扱いをうけることがある」」と説明していた。これは「私」に『カラマーゾフの兄弟』冒頭の「著者より」と題された序文の「奇人」についての定義を想起させたのである。すなわちドストエフスキーはキリスト念頭に置きながら述べているのである。

　奇人が≪必ずしも≫特殊で孤立的でないばかりか、むしろ反対に、奇人こそが時によると全体の核心をみずからの内部に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風の吹きまわしによって、ひとり残らずなぜか一時この奇人に背を向けるという場合がよくみられる……」云々。

　もっともこれは古川に当てはまるだけではなく、彼にとっては学兄とも言うべき米国立オークリッジ研究所所長ワインバーグについて言えることだった。彼は立場上、原爆後の緊急な課題と成った原子力潜水艦の機関を軽水炉として設計した。すなわち核物質は固体として挿入したのである。彼は今日の軽水炉の発明者なのだ。しかし陸上の公用の原発はトリウム熔融塩炉が良いと考え、先ず芸術品と評される熔融塩炉を完成した。

　非常に早くからこの構想を雑誌で知り、広島に投下されたウラン、長崎に投下されたプルトニウムを断固として避けて原発を作ろうとしていた日本人古川和男は、一九六八年にオークリッジを訪ねることを許され、ワインバーグに会い、熔融塩炉の成功を確認した。しかし冷戦が核弾頭用のプルトニウムを必要としているということで、その立場の軍業政官の連合勢力によって陰謀をもって中止せしめられた。その結果せっかくの熔融塩炉を生かし、それをトリウムに特化する研究は古川に委ねられ、それは一九八〇年には基本的に完成した。

　日本ではこれを受けてトリウム・エネルギー学術委員会（会長：茅誠司）と自民党トリウム利用推進議員連盟（会長：二階堂進、会員一〇八名）が発足、これを喜んだワインバーグは中曽根康弘首相に書簡を送ったが握り潰されて挫折。

　ワインバーグは　　　　年の初期論文で二〇一一年の福島型の事故を正確に予測していた科学技術者だった。当然のことながら憂鬱症に陥り、これが昂じ、ウラン軽水炉をゲーテ『ファウスト』の主人公の悪魔メフィストテレスによる教唆の買物にたとえ、口走るようになった。このためにオークリッジ所長の自認をせまれてそれに従う。

　こうして疑いもなく古川のアドバイスで一九九一年に広島と長崎を訪れる。そしてそこで核兵器の不使用が、ともにユダヤ教に発する唯一絶対神の宗教であるキリスト教とイスラム教での禁忌を想起させ、かつそれらを超える禁忌と成らねばならぬと信ずる。広島の公園の梵鐘に魅せられ、その三倍の大きさのものを同一メーカーに発注、≪International Friendship Bell≫と命名、これは今日同市の公園に据えられている。これらの諸体験と関連してワインバーグが作った言葉にTrans-scienceがある。核エネルギーの問題が科学技術の問題を超えており、新たな人類的理念で解決されねばならないことを言ったのだった。

　古川関連書の執筆の体験は、「私」に科学技術と文学の関連を考えさせた。いわんや「私」は『ドストエフスキーとは何か』の結語の章で、「アインシュタインはドストエフスキーを愛好し、それから受けたものはガウス（非ユークリッド数学者）からうけたものよりも大きい」と述べました。これの解明こそは文学研究の課題でなければなりません」を紹介し、「私」がまだそれができていないことを告白していた。このため古川関連書の後はこれが課題となった。こうして私はあなたの没年にこの研究に入り、「ドストエフスキーとアインシュタイン」をまとめ、没後に執筆、所属する日本ドストエフスキーの会で報告した。

　「まだあまり齢をとらないうちに、もう一度ウィーンに連れて行ってね」とあなたは言っていた。つまりそれほどに思い出深い一九五九年夏のソ連経由の、その往復が船と列車による「旅だったのだが、「私」にとってはモスクワへの留学を目指して旅立ちつつ、実現せずに終わった、無念をなしとはしなかった旅でもある。当時存在し、翌六〇年安保闘争で一般に顕在化した、ブント（共産主義者同盟）と共産党青年学生対策部の対立を背景としていたものである。一九八六～八九年に『ヒロシマまでの長い道』に記した事件でもあり、物語であるものだ。あなたの没後一年して、まことに思いがけなくも、これについて問い合わせを受けることになった。

　静岡県焼津に住むＯという人物で、あの平和友好祭の団で私が属した全学連の班の一人、ウィーンで離団し、全学連が加盟していた国際学連（プラハ）のルートでプラハ大に留学した者がいた。あなたはとっくに忘れて覚えているはずもないが、会ってはいる。その兄にあたる人で、弟の留学の経緯について知りたく、「私」が知っているのではなかろうかと思ってお尋ねするのである、ということだった。

　その人は一九五九年当時名古屋で会社員になっていて、西北大露文科に進んだ弟の留学については母に「金のかからない留学です」とい言ったということ覚えているのみで、性格なことは知らなかったとのことである。二〇〇五年に当時国際学連に勤務していたＩ氏の『わが青春お国際学連』が出、ネットで検索すると「私」の長文の書評が出て来て、「この人は知っているに相違ない」と思ったとのことだった。本人は静岡市の女友だちへの手紙に「自分の人生は裏切りの連続で、とうてい自分史は書けない」と言い残して、今年プラハで死去したという。「裏切り」とは「団員は全員揃って帰国する」という規約を破って留学したことをいうに相違なかった。

「私」が「書いた」もしくは「書けた」のは「裏切らなかった」ためのようである。あなたへの到着が、まことの救済である古川学への到着であったことが明らかになった今日、「私」はそう思うのだ。

ワインバーグは一九九四年のその最後の箸『最初の核時代』において自らが生きたその時代を「悪魔の教唆」によって惑わされた邪な時代と定義した。プルトニウム産出しないトリウム熔融塩炉の「第二の時代」が来ることを信じ、「残念なのは、私が生きてそれを見ることがないことだ」と著書を結んで逝った。

古川和男はフクシマ以前に国際的研究啓蒙団体としてＩＴＨＭＳ（インターナショナル・トリウム・エナジー＆熔融塩テクノロジー）を、また事業化のための会社としてＴＴＳ（トリウム・テック・ソリューション）を立ち上げていた。「私」は双方に加入しており、その中心的な人々の教示と協力をえて本を執筆した。またその後もその人々と一体になって活動している。

フクシマは現行のウラン・プルトニウム原発路線が自滅する路線であることを明らかにした。したがって脱原発・原発ゼロの声が高まるのは当然であり、「私」はこれを支持する。しかしながら、たとえ原発がゼロになった場合でも、すでに蓄積され、核弾頭以外には用途のないプルトニウムとそれを含む廃棄物は残るのである。すなわち核兵器の廃絶については無力である。その消滅の技術を持っているのはＴＴＳが古川から継承している国際特許のみである。

既存の路線の抵抗のため日本では報道されないトリウム熔融塩路線であるが、国際社会は真逆である。中国は国をあげてトリウム熔融塩炉に踏み切っており、その型の原型は古川のＦＵＪＩである。その上海の実験炉は二年後の二〇二〇年には臨界に達し核分裂を始め、二〇三〇年には商業用の発電が確実されている。また米国。カナダなどで二〇におよぶベンチャー企業が輩出し、政府から公的資金の支援を受けている。そのなかにはビル・ゲーツの企業もあるといった具合である。ＩＡＥＡは二〇一七年にトリウム熔融塩炉に特化した国際セミナーを開き、ＩＴＨＭＳは参加、これは配信されて日本では一〇紙が報じた。ワインバーグと古川和男の願いは、日本以外では実現されつつある。

　一九五九年八月十日、十日間にわたる平和友好祭の閉会式、薄暮のウィーン市庁舎前の広場。黒人歌手のポール・ロブスンがベートーヴェンの「歓喜の歌を歌った。その傍らに、辛島和子よ、あなたの永遠に輝く和服の姿があった。

**目　 　次**

**前章　　被爆女性の良人　　　　　　　　　　　　　　11頁**

**中章　　アインシュタインとドストエフスキー 　43頁**

**後章　　トリウム熔融塩炉に向かって 58頁**

**あとがき　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　83頁**

**導　く　力**

**前章　被爆女性の良人**

あなたは九州の大分市の生まれで、四歳年長の兄上がいた。一九五一年に二十七才でなくなっており、一九五九年にあなたに会った私が見ることがなかった人である。

　大分中学在校中から短歌を作り始めており、西北大文学部を目指していたが、西北大には嫌いな軍事教練があるので、それが無いということで中央大法学部に進んだ。召集にあい宮崎市の部隊に配属されるも肺結核のために除隊となり、敗戦時には大分市中島の自宅にあったと聞く。一方あなたは大分県立第一高女を卒業、当時はそれが普通だったと聞くが、親同士の話し合いですでに婚約が成立していて、しかし相手の人が旧満州の部隊にあって、これが一九四五年に本土決戦のために広島に移動。大分県で結婚式がおこなわれ、広島に移った。十日か二週間後に原爆に遭遇。

　大分市はこの間に大空襲に遭い、一九五九年八月下旬初めて大分駅に降り立った私を迎え、住宅街の細い道に入り自宅の前まで来て、「ここよ」と言い、道路の向かい側まで火がきて全焼したこと、しかし生家は焼けずに残ったのであって、「（体の）弱い兄ちゃんが頑張って水をかけて」と笑いながら語ったものだった。原爆後自宅に戻って、当時の模様をそう聞いたのである。

　辛島正道は肺結核により除隊となり生家に戻っていたもので、敗戦となって結核療養所に入り、九州あららぎ会に属し、歌作に励み、四六〇首を残した。没後一九五三年に友人の鹿児島大教授渡辺外喜三郎氏によって、日記の一部を加えて歌集『花火』が制作発行された。そのうちの病床生活をうたった三首が角川版昭和短歌全集に収録されている。そのうちの見出しに選ばれた一首は――

　　貧しく病めばかたみに（互いに）狭く守るなり花あるベット花なきベット

しかし時期的にはこれらに先立ってつくられたものに、大分空襲を歌った数首がある。

ふるさとを焼き尽くしたる炎はやおとろへにつつ朝明けんとす

暁の雲は染みたり焼け残る吾が家の前に息つきて立つ

　病人である二十一歳の青年は、家の類焼を防ぐために、夜を徹して木造二階建ての家の道に面した場所にバケツで水をかけたもののようである。「息つきて」に疲れはてたことが語られている。日が代わって彼は空襲による死者を見ている。

戦いはかかるものなり焼け跡の戸板に二つ幼子のむくろ

　あなたの夫だった人の部隊は日本本土のどこかへの移動が決まっていて、あなたはそれまでの日を過ごすべく広島に赴いたもので、そのため下宿していた。高等商業出身の経理大尉だった夫は、三度の食事は部隊でとり、就寝に帰って来るだけで、部隊の移動日がきまり、あなたは一足先に翌日の七日にはひとり大分市に列車で帰ることになっていた。その日、すなわち八月六日の朝、夫を玄関に送り、二回の居間に戻り、持ってこられた朝食をとろうして被爆している。

爆心地から一・三キロの木造家屋であり、爆風に吹き飛ばされ、着ていた長袖のセーターの焼け焦げる臭いで、「イヤ、イヤ」と言いながら気絶から覚めた。袖に手をやると、セーターのその部分が崩れ落ちた、ということだった。真夏だったのにセーターを着ていたことの理由は先に行って述べるであろう。言っておかねばならないのは、初めて、爆心地からの距離について尋ねた私の問いに、あなたは答えづらい問だったので、非常に低く小さな声で答えていて、私は一・八キロと誤って聞き、そう記憶していたことである。それから二十四年たった最初の作品、私が生まれ育った樺太（サハリン）を主題とした作品のなかで、私は妻であるあなたを紹介しながらそのように誤記した。後に実は一・三キロだったことが判明し、その二年後に書き、都合で四年遅れて世に出した作品、あなたとの出会いとなった外国の旅を物語った作品、旅そのものから数えれば数えて三十年後の作品ということになる『ヒロシマまでの長い道』の中で正しく修正した。

広島が新型爆弾による大損害に遭ったことは報じられていて知っていたが、大分の辛島家の人々にはあなたの消息は不明で生死は知られていなかった。事実は、中国山地寄りに北六キロの戸坂村まで歩いてたどり着き、収容所に当てられた国民学校で夫だった人と出会い、被爆者同士の生活をともにする。翌日からは起立不能となったあなたとは異なり、その人は顔面にガラスの破片を浴びただけで、それらが摘出されると元気になり、自由に外出するようになった。「大分県の実家にも自分で電報を打った」のであって、すぐにその父親は収容所に訪ねてきた。まだ八月中のことと推定されるが、郵便局が機能していなかった大分市内の辛島家には知らせずにいたようで、歌集の「広島」の小見出しの七編の最初の二編ではそのことが歌われている。作者が広島・長崎両県外の人だったためであろうか、『昭和万葉集』の「原爆の傷痕」の項目には収められなかったものである。

　　こほろぎの鳴くべくなれど家る君が生死の便りあらずも

生きてあれば疾く帰り来よ秋風のにさやぐ聞くべくなりぬ

　夫の父君は息子が元気なのを見て安心して帰り、その後にその人には内部被ばくの症状が現れて、あなたに遺書を託し隔離されて死没する。これは大分に伝えられて、父親は再来、遺骨を引き取って帰る。ずっと後、結婚してからもかなりたってからあなたが話したのだが、一緒に来た弟があたの介護ために残った。その頃には大分市内の辛島家にも状況は知らされていて、先ずあなたの母と正道兄が訪ねてくる。

眼路はろぼろ亡び果てにし広島のをゆくも雨に濡れつつ

　　あわれあわれ亡びし街の夜がきて燐火ほうほう焼ゆるのみてふ

　人間の力極まれば人を殺し自らを殺すかくて果つるか

　収容所内に内部被爆者が出はじめたのは八月も末になってであって、症状により確実に死ぬことが知られていて、夫君も隔離されるに先立って、泣きながら親あての言葉をあなたに述べ、あなたは筆記したということだったそのことをあなたは母と兄に語っており、それが歌われている。

まがつびに耐え来し君がやせての最後を語らんとすも

あなたは広島市の下宿の食事が粗悪だったために下痢を起こし、近くの山田登美子女医の個人クリニックにかかり、はやく直すためには身体を温めるが良いといわれ、セーターを着た。この女医さんとは不思議な縁で後に大分で再会し、女医は会長、あなたは事務局長として一緒に大分被団協を立ち上げるのであるが、それは先の話である。早く治さねばならなかったのは、夫の移動の前に大分に帰らねばならなかったからであり、腹部にも熱くさらしを巻いた。そのおかげで自身が内部被ばくを免れたと信じていたようで、私が問いもしないのに、早々と進んでそのことを語ったものだった。加えて「（大分に）持ってゆくように」と分厚い札束を手渡されて、それをその朝腹部のさらしの中に収めたのであって、その直後に被爆している。

気絶から覚めて見るとすぐそばにスーツケースが落ちていて、中から浴衣を取り出し三尺で締めて立ち上がる。火を逃れて川辺に至り、そこで全裸に近い男に東京までの旅費を所望されて金を与える。夫の没後、まだその父親が遺骨を取りに来る前の時期、枕﨑台風で出水があり、全員避難したのだが、あなたはどうしても起立できず、ひとり泣き暮れていて、兵士に背負われて、近くの国鉄駅の助役の家に預けられた。夜半夫婦が迷惑至極と愚痴停るのを聴き、這って行って障子を開け、金を指し出して命乞いをする。「わたしがお金をもっていることに驚いていました」。

収容所には韓国人が調理したレバーや肉を売りにきていて、あなたは自身が買ってたべただけではない。気がふれて自分の名前も忘れてしまい、このため誰も探し訪ねて来てくれなかった女性がいて、あなたはそのひとにも与えて慕われていた。アメリカの医学調査チームが来たさいには殺されるのかと思ったようで、体を露出してみせ命乞いをし、顰蹙をかいついには隔離されて、その後二度と見ることはなかった。あなたはその女性について話し、それが正道によって詠まれている。

熱き涙あふれんとすも命怖ぢてひとり病み伏す女の話

少なからず分かりづらい歌であるが、「熱き涙」云々はあなたがそのような状態で話したということを言っていると思われる。ついでながら正道はこの後長期に入院し、そのまま逝くことになった。あなたはシベリアを西進する列車のなかで、「主人の死はそんなに悲しかったわけではあません。一緒に過ごした期間が短かかったですから。あの後の、兄の死のほうがずっと悲しかったです」と語った、遺稿集の「広島」の節は次の句で終わっている。

戦いをしと言ひし此の国の遂に敗るる時にぞ会ひし

収録されている日記は一九五〇年の元旦から始まっているが、その中には自身の「敗戦のころの古い手帳」からの抜き書きがある。「何となれば、平和とは、戦争の無きことならず、そは魂の力より生まれる美徳ならばなり」。**スピノザ**の今日では『国家論』と訳されているが、一九四〇年開戦直前に岩波文庫に訳出された時には『政治論』だったものからの書き抜きであり、かつ文語文だったらしい本の第五章「国家の目的について」からのものと読まれる。今日の訳では「臣民があたかも獣のように導かれただ隷属することしか知らない国家は、国家というよりは荒野と呼ばれてしかるべきである」と続いている。

宮本百合子『播州平野』への感銘が、またロマン・ロランの『魅せられた魂』からの抜き書きが記されている。東京の初期全学連傘下の諸大学のレッドパージ反対闘争への共感を述べたと思われる句もある。

　　みな貧しく病みつつ何を恃めるや今朝も弾圧の記事は伝わる

歌集の最後は「ヨーデル」の小見出しで纏められており、十一句が収められているが、それは最後の一句から取られたものである。日記の最後に記された一句であって、全四六〇首の掉尾を飾る句となった。それが記憶にあったためだろう、あなたはウィーンのレコード店でヨーデルを買い、最後にはその本場であるチロル行をも果たした。

　声遠く丘にヨーデルに呼ぶ聞ゆ吾がために幸を呼ばふ声とも

たいへんな美男であったことは『花火』の冒頭に掲げられている写真からも窺うことができる。「美しいのは兄であって、私は兄の前では、美しい、と言われたことはなかった。「「和子さんは明るい」と言われていた」と何度も私は聞かされた。「面白可笑しいことを言って、ひとを笑わすのが好きだった」そうで、それはだれもが認めたことだったようだ。そのような生まれついた性格のひとだったが、正道の日記には「和子は美しいから」といったような言葉が何度も出ている。

　和子は美しいので勤め先では目立つらしいが、自信と経験を得てゆくのは喜ばしい。

　生活を楽しむということでも、なかなか良い技術を持っている。頼もしい・

　和子はいつも明るい。和子は家の青空。不幸といえば、随分不幸なことが多かったが、和子はいつも明るい。「美しく、強く素直なれ」こんな言葉を召集されたとき、彼女のために残したのだったが、言葉とほり、彼女は美しく、強く素直だ

。

　明るき芝生を踏みて帰りゆく妹よサンダルの背高くして

あなたは炭鉱主かなにかの大金持に「妾になってくれ」と言い寄られ、勤め先にまで来られて怒ったことがある、と話したことがある。それを指すらしい文言も記されている。

編者の渡辺氏が「生命を大切にし、美しい心を持ちつづけて死んでいった人の言葉であり、生きている人々を励ます」と「あとがき」に記しているが、今日私はこれによって目を開かされ格別に励まされている、それというのも正道氏の死によるあなたの傷心がどんなに大きかったかがわかるからである。当時肺結核の特効薬のストレプトマイシンが非常に高価で辛島家の家計を圧迫し、あなたも勤め以外にも洋裁をして助けていたことが日記から知られる。その一方で、「原爆に遭っているんだから結婚はできやしない。しかしもったいない。大事するから、私のメカケになりなさい」と言い寄られて腹も立っただろう。「メカケっ！」と吐き捨てるように私に語っていた。

正道氏の没後、渡辺氏とのあいだで歌集の製作の協議にはいった頃、一九五四年一月ビキニ環礁での米水爆実験より、マグロ漁船第五福竜丸が被爆し、久保山愛吉氏が亡くなり、三月静岡県焼津で葬儀があった。あなたは大分県庁労組から男子の一人とともに代表としてこれに送られており、写真が残っている。

原水爆禁止の署名運動が起こり、日本原水協が発足し、この年の八月、第一回の原水爆禁止世界大会が東京（前半）と広島（後半）で行われ、「生きていて良かった」の声が壇上の被爆者から発せられる。第二回は長崎で行われたが、あなたは県知事を会長として結成され、秘書課長が事務局長になっていた大分原水協のひとりとしてこれに出席しており、被爆者代表のひとりとして演壇に立っている。この大会は出席した被爆者たちにより日本被団協の結成宣言がなされた大会でもあった。あなたはこの協議に参加しており、県庁秘書課に勤務しつつ、発足した大分被団協で初代の事務局長となった。会長は広島で会っていた山田女医で広島師団の軍医だった夫君に従って大分市に移り住んでいたのである。共に日本被団協史に名が出ている・

　翌一九五七年一月日本原水協は全国理事会で「米英ソ三国は原水爆の製造、保存、他国への持ち出しを止めよ」の決議を行い、その三国に使節団を派遣することにした。二月早大露文の卒業を控えていて、私、瀬川修はそのソ連班にロシア語スタッフとして加わることになり、七月、その団の諸氏とともにヨーロッパ経由でモスクワに飛んだ。クレムリンで首相のブルガーリンの接見をうけて会談、各地を回り、帰路にはモンゴルと中国に立ち寄った。北京では東京の第四回世界大会に参加した中国代表団の団長だった魯迅夫人許

　　、廖小志氏主催の晩さん会に招かれている。

　モスクワでは同時期に第五回の世界青年学生平和友好祭というものが開催されていて、日本からも七〇人からなる団が参加しており、私たちはレーニン・スタジアムでのその開会式を来賓席で見ており、八月六日のマネージナヤ広場でのヒロシマ記念集会に出席している。閉会式の同じスタジアムには「一九五九年にウィーンで会おう」の電光板の明滅があった。

あなたは大分県代表として、このとき東京で行われた原水禁の第三、翌五八年の第四世界大会に出席し、五九年にはこのウィーン平和友好祭の日本被団協の二人の代表の一人として選ばれた。いま一人は後に広島で数期にわたって原爆資料館の館長をつとめることになったＴ氏（当時市庁職員）であった。しかし彼は乗船地の富山県伏木で倒れ、医師により出国を差し止められ、あなたがただ一人の代表となった。

私は南樺太（現サハリン）に生まれ育っておりソ連占領下で一年半暮らし、将来樺太について書かねばならないと思って引き揚げている。そしてその目的にもっとも適した学科と信じかつ願って、当時はそこだけにあった西北大の露文科に進んだ。しかしロシア語の勉強に集中し、またある程度まで学生運動に係わったが、樺太については書かずまた書けず、そうこうするうちに、日ソ国交回復後の早い時期に原水禁運動からソ連に出される機会をもったのである。このことがなければその二年後にウィーン平和友好祭に行くこともなく、あなたと出会うということもなかった。翌六〇年二月に結婚、若干曲折があったが、貿易商社に入り、ソ連担当部門で、また数年だったが中国をも兼務して働くことになった。

　この間「樺太について書く」という私の初志にして課題だったものはどうなったのか。私がそれを達成したのはようやく一九八四年になってであり、五十歳を超えてであって、『樺太よ遠く孤独な』という四二〇枚の作品によってである。

このはなはだしい遅滞が私の才能不足によることは明らかだが、また同時にそれは樺太のテーマの難しさに起因したのであって、私があなたの良人を長くやってきたことが預かって力となり、どうにかそれを克服して書けることになったものなのである。

ソ連占領下の大泊（コルサコフ）で十月、再開された中学校の最初の授業で、二年生だった私は数物の教師から新型爆弾と報じられていたものの真の名称、および核爆発の初歩的原理を一時間にわたって教えられた。そしてそこから導かれる今後の戦争の不可能性の説に多大な感銘を受けた。私はそのことを記しながら、配偶者が原爆被爆者であることを明かし、その遠因がその授業にあったと注記した。

　長編の作品の前半で生まれ育ってから引き揚げるまでを詳述した私は、引揚後の人生については駆け足的に記述した。すなわち大学を終えてすぐ、日ソ国交回復宣言があってまだ一年とは経ってはいなかった一九五七年七月、発足して三年目の原水爆禁止運動の団体の代表団にロシア語スタッフとして起用されてソ連に行ったこと、またその延長として一九五九年にウィーンで行われた世界青年学生平和友好祭といったものに行き、日本被団協の代表として出されていたあなたと出会い翌年結婚したことを記す。

　「樺太」の表題からは予想されないあなた、つまりはヒロシマのテーマが加わることのなったのは、樺太以来の初心がこれによって変容を蒙ったからだ。あなたとの間に生まれた最初の子（男子、ツヨシという名だった）がファロー四兆症という重症の先天的心不全だった。この不幸はあなたの原爆被害と無関係とみることは出来なかったので、私は心秘かに「樺太のヒロシマの子」と呼んでこの試練に対した。四歳十か月で他界。以後私はその子の死を目標に、あなたとの出会いから結婚に至る過程を書こうと努めることになった。つまりはテーマの変更があったのだ。しかし、その物語は数年におよぶ努力にもかかわらず、どうしても書き上げることが出来なかった。

　そうこうしているうちに、引揚後に住んだ北海道十勝の帯広で出会った女子の一人を除くと、絶えて久しく会うことのなかった、樺太の故郷の遠淵村の小学校同級生との再会が実現し、一九七二年の北海道洞爺湖温泉での集まりで、長く忘却されていた記憶の回復があったのだ。私はこれに助けられて初源のテーマだった樺太に回帰することになったのである。私はわが家とかかわりのあった露日の夫婦の一家、その息子・娘である兄弟姉妹との係わりを中心とした物語を書くことになった。

　わが家に通ってきていた混血のお手伝いと、その縁で交わることになった二歳年長の男子から私は物語り始めた。その子に従って遊んでいるうちに、その子をめぐる悪童たちの騒動に巻き込まれることになった。災難が自分にまで及んだので幼かった私はその子から逃げ出している。私はその際に悪童たちがキヨミに浴びせていた「ロスケ、ヨッポイマツ、鼻高のっぽ」というはやし言葉を紹介しており、それがロシア語の卑猥な罵倒を著す命令形の三語の短縮形ヨッポイマーチの崩れた発音形態であることを注記した。「お前のおっかさんを犯しな」が原意のバカヤローである。

　類が及んで私までもが「タボ（ター坊）、たん瘤、十二瘤（こぶ）」と脅されたのであり、私としては逃げ出さざるをえなかった。このことがわが人生のトラウマとなった。私はキヨミをめぐるトラブルは忘れなかったが、意味不明のこの「ヨッポイマツ」の語については記憶を喪失するというよりは、強引に忘却にゆだねたフシがあった。

　大泊で、ソ連占領下で暮らすようになって、最初に覚えた十語には入る言葉に、バカヤローを意味すると正しく理解したヨッポイマーチという言葉があった。しかし発音が類似している遠淵のヨッポイマツについては、当時すでにまったく記憶を失っていて、それを思い出してはいない。

　敗戦から一年たった夏、ソ連による勤労動員で私は遠淵の南のＳ村に送られ、塩蔵魚つくりの労働に従事する。私は自分が将来樺太について書く、否、書かねばならないと思い始めていた。しかし書かれるべき樺太とは何だろうか。それは遠淵であり、キヨミだった。このため私はこの混血者の戦後の変化を見届けるべく、願い出て休みをもらい、ソ連軍のトラックに載せてもらって村に行く。

　キヨミを含む一家の人々に会い、二泊三日後に村を去ったのだが、往路とは異なって徒歩で帰ったのであり、最後に、そこからは下り道になる丘の上で、大きな鹹水湖のほとりのその村に別れを告げている。私は歴史と社会の大きな激変にもかかわらず、かつての人変わらぬ湖と山々に永遠と絶対、そのようなものとしての真実を認め、生涯記憶し続けることとした。それは私という人間が成立した瞬間であり、やはり、後にあなたにつながった体験だった。

　長い忘却の後、一九七二年になってこの記憶を回復してから知ったのだが、私が書こうとしていた樺太とは、ずばりこの失われたヨッポイマツという一語の記憶であった。それが失われていたために、私は「失われていたその記憶」を求めて生きることになった。その途上であなたにも出会うことになったのである。

　動員先のＳ村からは往路と同じく船で帰る。大泊の家ではその半年前からソ連の技術者のクロポトキンが入っていた。休みの日にはわが家の居間のストーブのそばでトルストイの『戦争と平和』全四巻を読んでいて、自室に帰る際には置いていったのでその露文に見入り、引揚を理不尽に思った。すると奇妙にヨッポイマーチがこみ上げてきて、私はついに彼にその言葉を浴びせるのであるが、これをヨッポイマツの失われていた記憶の仕業ではなかったとは言えまい。マルグリット・デュラスは「忘却もまた記憶の一種です」と述べ、「ただしそれを説明するのは難しい」とした。そのような形態で私のなかではこのヨッポイマツは生き続けていて、ある日、読書するクロポトキンにこの語を浴びせ、彼を驚愕させ、この出来事がまたもや私を強く支配することとなった。

　この思い出は強烈だった。引き揚げて数年して、私は一家の分裂とキヨミのサハリン残留を知ることになり、心痛する。反射的にクロポトキンの出来事を思い出す。私は書店に行きトルストイの『戦争と平和』を買って帰り、読み終え、医学部志望だったのに西北大露文を目指すことになる。ヨッポイマーチの方は大学二年の年に俗語辞典を引いていてフル・センテンスと原義を確かめ得た。しかしヨッポイマツの方は忘却していて、まことに一九七二年に至るまで回復することがなかったのである。

　八人の兄弟姉妹のうちでもっとも親しかったのはお手伝いだった女性であり、失われていた記憶の回復があって、ようやくその女性を富山県に訪ねた。またその姉にあたる人と東京で会い、北海道の両親が上京しわが家に泊まったときには、他の数人の旧村人とともにわが家に招いた。あなたは私たちの会話に入ってこられず、給仕をしているだけだった。（ずっと後，世紀の終わり近くに、あなたの大分市での幼馴染、トリウム熔融塩炉学者の古川和男氏が拙宅に見えたさい、私が挨拶しただけで外出したことの理由の一半は、このときの記憶にあった。私は同郷者同士で心ゆくまで話させようとしたのでもある）。

　私たち樺太人は学校の内外で「日本人の発見になる日本領であり、ロシアの東漸により一度は奪われたものを、日露戦争の勝利によって回復したのである」と教えられてきた。そこにソ連が「サハリンは発見においても領有においてもロシアが先行し、侵略的な日露戦争によって奪われたものを、回復するのである」と称して侵攻してき、翌年早々には領有宣言をおこなった。また「全世界は偉大な教導者スターリンが指し示す道に従って進む」ということだった。いったい全体これらは正しいのかということは、やはり樺太以来の疑問であって、書くために解決されねばならなかった。

　もっとも戦後一九五〇年代日本のスターリン全盛期の学生だった私は、この問題に深入りするのは、今は得策ではない、と判断するに至ったのであって、ロシア語の習得の方を優先した。とはいえクロポトキンが別れしなに言った「ソ連は良い国ではなく、スターリンは悪い」という言葉を私は忘れることはできなかったのであって、ソビエト文学に接しつつも、その問題は追求した。入学後、レーニンも読んだが、より多くマヤコーフスキーのレーニンとロシア革命をたたえる叙事詩によってロシア革命を肯定した後にも、スターリンへの疑問は持続された。

こうしてやがてレオニード・レオーノフ（一八九九～一九九四）に熱中することになる。ソビエト文学ではドストエフスキーの影響がもっとも色濃いといわれていた作家で、とくに問題となったのが、第二次大戦・独ソ戦下の四幕戯曲**『襲来』**（１９４３）という作品だった。それは次のような内容のものだった。

第一幕

独ソ開戦の直後、ドイツ軍が明日にも入ってくるロシア西部の町。そこにフョードルという青年がシベリアかどこかで三年の刑期を終えて町に帰ってくる。しかし医者の父の家には寄り付かず、町をうろついていて家人は噂として聞くのみである。やがて妹のオリガが兄を見かけ母に注進する。ようやく家に現れ、母親は喜び迎えるが父タラーソフは冷静である。フョードルの罪は片思いによる、未遂に終わった情痴事件のようである。唯一の擁護者は彼を育てた乳母であって、「いいんだよ、あんなやくざ女を殺そうとしたことなんか、あんたの良さが分からなかった女なんてね」と言う。そこにオリガの恋人である町の権力者、共産党委員長のコレースニコフが訪ねてき、フョードルは衝立の陰に隠れる。

コレースニコフは、車を用意してきたので独軍がくる前にそれで退去するようタラーノフに勧める。しかしタラーソフは「独軍下で私は必要となる」と固辞し、逆に「あなたは？」と問われ、オリガらを従えてパルチザン活動に入ろうとしていることを打ち明けようとしたところで、コレースニコフは人の気配を察知し黙する。フョードルは衝立を出て来ざるをえなくなる。二人は顔なじみであり、彼ら工業学校の生徒は、フョードルらの中学校生徒とは仲が悪かった。彼はコレースニコフの意図を察知して挑発的にパルチザンへの参加を申し出、共産党員は「私も退却するのです」と嘘をいう。彼は「危険な人間は入れない、ということですか」と悪態をつき、父親に注意されて家を出て行く。

刑期を終えて町に戻ってきたのはフョードルだけではなかった。老人が現れてそれが革命前には富裕な商人だったファユーニンであることが明らかになる。真っ先に気づいたのはタラーソフの使用人であるココールィシキンであって、「お帰りなさい」と歓迎する。元商人は独軍の到来を資本主義の復活と歓迎し、「新しい年が来ました。主よ、祝福を与えたまえ」と重々しく十字を切る。同時に窓からはドイツ兵らが顔を出す。

第二幕

　タラーソフが住む家は、かつてはファユーニンのものだったようで、当然の権利を主張するように、家に入り込んだ彼は主人顔に振る舞う。またすでに占領軍と通じており新しく町長となる約束も取り付けている。形勢を見るに敏なココールイシキンはファユーニンの手足となっている。

パルチザンは活動を開始し、独軍に死者が続出し、その一人ひとりに「よくいらっしゃいました　アンドレイより」の書置きが残される。これはイワンに次いで多い名ではあるが、ファユーニンは、医者の職業がら町の住民全部と面識があるはずのタラーソフはそのアンドレイがだれかを知っているに相違ないと睨み、彼に手紙をと書かせ、「犯人」を家に誘き寄せる相談をもちかける。もって占領軍の覚えをめでたくし、家の接収を免れようという算段である。というのも司令官ウイッペルが家に目をつけていて検分にくると聞いたからだった。

ウイッペル将軍が亡命ロシア人の息子である通訳モサーリスキーを伴って現れ、それに対しファユーニンは「ここは、私が半生を過ごし、コミニズムとの勇敢な闘いで倒れた息子をもうけました家であります」と述べる。またタラーノフを紹介して、「この方の息子さんもまたソビエト政権反対の闘士として、非常に有名なのであります」と付け加える。医師は「嘘だ、事実じゃない」を制するが、「（赤軍との戦闘で）名誉の戦死をとげたわが息子とともに…」と続け、モサーリスキーに「はやく部屋を見せなさい」と急き立てられる。この間別室でその副官クンッが乳母の孫娘アニースカを犯す。

「アンドレイ」とはコレースニコフの名であり、彼を長とするパルチザン隊の代名詞である。そのコレースニコフが肩に弾を受けて負傷し、手当が必要になってオリガがタラーソフのもとに連れてくる。彼女は兄の罪には両親をふくめて一家の全員に科があると考えていて、それを一身に背負って償おうとしている。しかし家はすでに包囲されていて絶体絶命であるだけではなく、タラーノフ一家の全員も類を免れえない状況である。

コレースニコフは手当を受けながら、「この八年間あなたとご一緒に働いてきました。私はあなたの病院の予算を削った、燃料も必要なだけさしあげなかった、会議の席ではおおいに争った。すぐそばで暮らしていながら……」と詫びる。タラーノフは手術に集中していて助手のオリガに指示を与えている。「そのあいだずっと、一度も心を割ってお話ししたことがありませんでした。いえ、もう痛くありません……」。そして急にこみ上げてくるものがあって、「実際、そんなふうに誤った眼で見られた友人たちがこの国にはどれほどいることでしょう」と飛躍する。

窓枠が激しく叩かれ、ざわめきが起こり、コレースニコフは衝立の陰に隠れる。フョードルが入ってくる。「（外は）検束さわぎだ！（オリガに目配せし）　私には誰を追い回してのか、ちゃんとわかっている……」。オリガはその中をどうして兄が通って来られたのかが不思議で、「夜間通行証でも貰っているの？」と尋ねる。フョードル武器をもっていると威張り、寒さで凍えているのでとアルコールを所望し、父に断られる。家族全員が怒り、母親までが罵倒する。タラーノフは「これ以上はない強い薬をやろう」と言って、カーテンをあける。そこには痛めつけられたアニースカを介護する乳母。タラーソフは「泊める場所がない」ことを理由に、息子に出て行くよう求める。フョードルは父に額にキスしてくれるよう求め、タラーソフは苦笑。オリガが戻ってきて、卓上の血に染まったガーゼに気づき、慌てて隠そうとし、それがフョードルの疑念をまねき、わきに回って衝立を払い、コレースニコフに「あなたには莫大な賞金がかけられていますよ」と言い、相手は「知っています」と応える。  
　フョードルは「出て行け」と自分に命じて出て行き、その背中に妹は「大金もうけができるわね！　女にこだわるだけの道化者！」と罵声を浴びせ、兄は振り返って一同を笑って見返して去る。こうした事態を知らぬままに、離れの自室からファユーニンが引っ越しの挨拶にやってき、一家の三人はコレースニコフをフョードルとして紹介せざるをえない羽目になり、その負傷を「前線を通過して来たさいの負傷」とごまかす。しかしココールイシキンの目にはこのすり替えは通用せず、乾杯の際にも手が震え、誤って「よくいらっしゃいました……」を口にしてしまう。「秘められた歓喜」とト書きに記される。これはファユーニンにも伝染する。

**第三幕**

同じタラーノフの部屋、ただし今や新町長ファユーニンの執務室となっていてココールィシキンが出す書類に目を通している。問題は、アンドレイがいまだ捕まらないのでロシア側の警察署長がゲシュタポのシップレーから譴責されていることである。ココールィシキンは手柄をたててその後釜にすわろうと願っている。モスクワが落ちれば廃止になるルーブルの賞金ではなく、地位が狙いである。しかしモスクワが落ちたからといって戦争は終わるのだろうか？「モスクワの向こうにはまだヴォルガがあり、さらに向こうにはウラル山脈が雪の外套にくるまって寝そべっている。さらにその先は――大河と森林のシベリアだ。その先は、いったいどうなっているのか、まったくもって分からない！　北極光がさまよっているだけだ……　ロシヤ――こいつは、なあ、齧れば齧るほど、残りの方がますますふくれてくる肉饅頭のようなものだぜ！」と新町長はぼやく。

ファユーニンの誕生日なのでロシア側の客は集まっており、占領軍指令官シプレーの到着を待っている。それに先立ってゲシタポ長のシプレーが到着し、ココールィシキンは誤って「よくいらっしゃいました」を二度続けて口にし、この言葉に苛立っているシプレーの逆鱗に触れ、「お前がコレースニコフなのか？」と首根っこをつかまれ部屋の入口で部下に引き渡される。ファユーニンに救いを求めて「ニコライ・セルゲイヴィチ！」と叫ぶが、一発で処刑される。司令官の到着が遅れたまま、開会となり、モサーリスキーがメッセージを代読する。「歴史的必然の最後の一行が書かれつつあります。スラブ民族によって古く窮屈なヨーロッパに缶詰めにされたようになっていたゲルマン民族は、いまやそのコルク栓を叩き破って新秩序と指導原理をもたらしつつ、奔流のように東にほとばしり出たのであります。いまこう申し上げている最中にも……」。電話が入り、シプレーが受話器を取るが、モサーリスキーは續ける。「モスクワは陥落するのであります！」

電話はウィッペル司令官ほか三人が殺害されたというものだった。犯人はひとりであって、十連発銃が使われて全員即死ということである。犯人はその場で捉えられ、連れてこられる。誕生祝いは訊問の場に変わる。こうしたことを知らずにタラーノフ夫妻が遅れて現れ、これに立ち会うこととなる。

引き立てられてきたのはフョードルであって、彼は人払いを求めるが、ファユーニンの「面通しの必要」の主張が認められて、夫妻は止めおかれる。一服を所望し、訊問にたいして彼は「名はアンドレイ，姓は――コレースニコフ」と応える。また地位と身分、職業は「ロシア人にして、祖国を守る者」と称する。また最後の職業を問われて答えずにいると、ファユーニンが発言して「ソビエト政権の郡長でした」と答え、タラーノフに同意を求める。夫人も同意する。求めて退席を許されて、彼女は床に落ちているフョードルの血痕のついたハンカチを拾いあげる。結核による血である。モスクワ近郊の戦況不利の報が伝えられて尋問は延期され、占領者たちは退場。ひとり残るファユーニンのそばにコレースニコフが現れる。

「悪党をつかまえたのに、どうして喜ばないのだ」と問われて、ファユーニンは町に向かって戻って来る途中、後退する部隊の若い兵士に励まされたことを物語る。「嘆きなさんな、おじいさん。ロシア人は必ず戻って来るんだからね」と言われたのだ。さらにまた彼は、かつては店の門番だったコレースニコフの父親と商品を亜麻畑で買い付け思い出を物語る。子供への土産として菓子を与えたことを言い、覚えていないかと問う。本物のコレースニコフであることを知りつつ見逃してやったのだから、その恩を忘れないでくれと頼む。

**第四幕**

地下倉庫が臨時の拘置所に使われている。半円形の窓が二つあって、そこから外が見える。

エゴーロフ、タタ―ロフ、オリガの三人のコレースニコフ配下のパルチザン隊員が捉えられて収容されている。他に毛皮外套の老人とその孫にあたる少年。狂人がひとり混じっているがドイツ側に内通していることが気づかれている。ドアの外には番兵。

パルチザンの三人がたがいに訊問の様子を語り合う。タタ―ロフは、コレースニコフの人相をしつこく聞かれ、教えてやれば、捕まえてこられるのかね、と皮肉ったことを話す。そうこうしているうちに、「連れてきたぞ」と声がしたのである。「見ると……」と言いかけ、狂人の存在に気づいて口をつぐむ。外部の様子が気がかりで箱を積み重ね、身軽な少年を登らせて外を観察させる。絞首刑用のブランコ状のものができていることが報告されるが、音により上空に飛行機が飛んでいることが知られるが敵機か味方機かは不明。高射砲が鳴りはじめ味方機であると分かる。階段をのぞき見したオリガが仲間に「コレースニコフは訊問から連れてこられたようよ」と告げる。フョードルが変わり果てたアンドレイとして連れてこられる。「一体何があったの？　話してちょうだい」のオリガの問いに、兄は「話せば長くなるよ」と答えるのみ。

処刑を覚悟して、老人は孫に「スターリンが見守ってくれているからな」と落ち着かせる。

オリガが兄に「まだあの女のひとを思っているの」と問い、彼は「うん」と答える。パルチザンの三人はフョードルを交えて会議を開く。身代わりの動機について尋ねられて、アニースカが原因だったと答える。「おれは諸君に命をさしあげた……しかし受け取りをくれとは言わないよ」。

シプーレが入ってきては皮肉たっぷりに「よっく、いらっしゃいまっした」と下手なロシア語で処刑を告げる。三人ずつ、とのことでその最初はフョードルを含む男の三人、別れぎわに、次の三人に入ることになる妹に向かって彼は「もしお母さんに会えたならば、こう言ってもらいたいんだがね……」と切り出す。「あの晩、ぼくは一滴も飲んでいなかったのだ、と。ただあのときは何日も眠っていなかったので、ほかに行くところはないし……」。

　少年は祖父に「スターリンは背の高い人だったかい」と聞き、それに促されてオリガが老人に「スターリンに会ったことがあるの？」と問い、相手はクレムリンでの或る農業関係者の集会の話をする。スターリンと農業、といえばこの時代スターリンに賞賛されて猖獗をきわめていたルイセンコ派が思い出されるが、もちろん作中では伏されている。ルイセンコが完全に失脚するのは、フルシチョフ時代の末期、この作品の改訂版が出された一九六四年になってのことである。以下の文もその中では完全に削除されているが、私は一九四一年版について述べている。

　老人「農作物のことでね、おれがちょっと珍しいものを育てたもんで……（ありありと目に浮かぶように）あれはとても広いホールで、千人からの人が集まっていたが、それでもがらんどうとしていて、みんな石ころ同然に見えたものさ。そこへひとりの人がはいってきたのだ。とたんに隙間というものが無くなってしまってな、急に窮屈になり、全体が熱くなった」。

　広場で処刑が始まり、背伸びして見ていた少年は顔をそむける。ト書きには「二度<スターリン、スターリン！>の叫び声が聞かれ、途中で消える」とあるが、「二度」と記されているところに意味がありそうである。フョードルは死にあたってスターリンの名は口にしなかったのである。この間、高射砲の斉射音が鳴っていて、老人は処刑の太鼓の代わりの「礼砲」かと疑っていた。やがて「空が見えなくなるほどの」パラシュート部隊の降下を少年が一同に伝える。「スターリン、スターリンガ来たんだ！」と叫ぶ。牢屋の人々は泣き出す。

板張りの窓が銃床でたたき壊され、数人が下りてくる、先頭に立つのはコレースニコフ。オリガを認め、「お母さんに会えるよ」と言い、「フョードル・タラーノフ、……フョードル！」と探し呼ぶ。パラシュート部隊には「ロシア人はかならず戻って来る」と言った兵士が混じっていて、オリガに傷の手当てをうけながら連れてこられたファユーニンと対面する。タラーノフ夫妻が登場。二人はすでに処刑されたフョードルを見てきている。

　オリガ　ママ、目が乾いているじゃないの、いけないわ。フェ―ジャのために泣きなさい、ママ。あの人は出て行った。そして今また戻ってきたのよ。兄さんはママと並んで立っているわ。

アンナ・ニコラェーヴナ　あの子は帰ってきた、あの子はわたしのものだ、あの子はわたしたちと共にいる……

私は樺太でソ連を見。スターリンを体験して引き揚げている。その主要なすべてについは

樺太の本の中で物語っており、その際、その地の最初の発見者が日露のいずれかという問題では、チェーホフの『サハリン島』に依拠した。すなわちチェーホフは「サハリンの処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」を始めとした一連の親日的、より正確には国際主義的な文言のすべて掲げ、それを正しいものとして記述した。すなわちソ連が第二次世界大戦後「サハリンは発見においても領有においてもロシアが優先し、日本が侵略的な日露戦争により略奪したものを、スターリンガ取り戻したのである」としていたことを誤りとした。ただしその際、ソ連時代の作家レオーノフがチェーホフについての講演で「祖国を愛しながらも、彼、チェーホフはそれに媚びなかった」と記していることに承知していたが、それについては特には触れなかった。

私がこれを掲げることになったのは、樺太の本から十九年を経た二〇〇三年の著書『日露領土紛争の根源』のなかにおいてだった。

　スターリンはソ連においてだけではなく、引揚てから見ることになった日本においても、左翼の世界では、猖獗を極めていた。スターリンは神のごとき存在であり、大学入学後に接することになった共産党細胞ではその『ソ連共産党（ボリシェヴィキ）史』は必読の「聖典」と見なされていた。一九五三年に死去したがまだその余波は残り、一九五六年のフルシチョフらによる、秘密報告という形でなされた批判が現れるまで、それは続いたのである。私が『襲来』に心ひかれたのはそこにスターリン批判の臭いを嗅いだからだった。そこにも確かにスターリン賛美の文言は存在するが、見られたように、子供がスターリンを偉いと思っているのであり、ありうることで不自然ではなかった。主人公が流刑されていたとする設定が尋常ではなく、その無実の意識は強烈に描出されていて、私には反スターリンの作品と読めたのである。

　実際この作品は雑誌掲載の段階で物議をかもし、作者がクレムリンのスターリンに電話し原稿を送って読んでもらい、「このまま発表されるよう希望する」というお墨付きをもらってようやく掲載され、すると今度はすぐにスターリン賞の一位をとるということに相成っている。私自身尊敬していた戦前のプロレタリア文学運動の指導者、ロシア文学者でもあった蔵原惟人氏（当時は党分裂で排除されていたが、後に文化部長）は、この事実をもって、スターリンが文学をよく理解していた証左であるとしていた。しかし私には情痴事件による刑というのは偽装であると思われたのである。蔵原氏にはそのことが見えてはいなかった。

　樺太に導かれるようにして進んだ西北大露文の生活だったが、入会したソビエト研究会のなかでは時代がもたらしていたスターリン的なものの重圧が存在し、一時私は樺太を忘れようと努めることになる。そのための方便として共産党（所感派）に入ってみた。しかし後になって、党統一への逆流だったと知られたのだが、五四年秋に総点検運動というものの締め付けが起こり、それに抗しきれず、細胞の活動を離れた。そのきっかけとなったのがレオーノフ、特にこの作品だったのである。私は党活動には背を向け、レオーノフ作品集（露文）に集中した。

翌年六月に党の統一にかんする決議が出て活動にもどり、以後、一貫して統一会派（すなわち国際派）に属していた松尾隆教授に私淑することになった。その人が日本平和委員会の常任理事だったので、その縁で日本原水協からソ連に出される機会をもった。またその延長もしくは継続として、その二年後、あのウィーン世界青年学生平和友好祭の日本代表団のなかで、日本被団協代表のあなたに出会い、翌一九六〇年早々に結婚することになった。

一九五九年の百五十人の団ではモスクワ留学を目指していた私だったが、諸般の事情で

それを実現せず、あなたと結婚して、始まって間もなかった日ソ貿易の会社員になったの

である。しかしレオーノフへのうち込みは續き、一九六二年にこの人が日ソ文学交流で来日した際には、会う機会がえられて、積年の疑問をぶっつけている。「その件では、現在改作

をおこなっており。近く公刊するので見てもらいたい」ということで、一九六四年刊行の

新しい戯曲集でそれを読むことになった。

　フョードルの女性問題は完全かつ全面的に削除されていた。またそれと連動するようにスターリンの名がほぼ全面的に削除されるか書き換えられていた。たとえばパラシュート部隊の降下を、少年は「スターリンが来た」と叫んだのだが、「友軍が来た」と変更されていた。私の読みが正しかったことが証明されたのである。

　それではこの主人公の「科」はいったい奈辺にあったのか？　明確を欠いてはいるが、何らかの形でのスターリン批判の言動が原因らしいのである。周囲のだれにもが分からない理由によって逮捕され、流刑地に送られたことにされている。確かなのは、ファユーニンが言ったような、革命後の赤軍と白軍によって戦われた国内戦で白軍に加担して戦ったという罪だったのではないことである。

　新戯曲集には、『襲来』とは異なってまったく発表が許されず、闇に葬られていたやはり四幕の戯曲『吹雪』（一九三九）が収録されていた。北国育ちなので私にはよくわかるのだが、激しい吹雪のときには視界がまったく効かなくなるのであり、これはまことにそのような、一九三〇年代後半の、密告と粛清により国全体が疑心暗鬼の闇に閉ざされた状況を写し出した作品なのである。当然のことながらフョードルにはこの時代のレオーノフその人が描きこまれていたと言える。私の読みの正しさは完全に立証されたわけであり、私は満足し誇ってよかったはずだった。しかし作品はこの改作によって緊迫の度合いが著しく薄れ、悪くなっているのだった。どうしてこのようなことになったのか？

　前作ではオリガを最右翼として家族の全員がフョードルの罪を痴情に見ていたのに対し、コレースニコフは必ずしもそうではなく、政治的鬱屈に見ていたフシがあった。すなわち己が信奉するスターリン（派）の落ち度に気づきつつ、生きている人物だった。そしてフョードルに身代わりの挙に出られたことによって責めを感じざるを得ず、パラシュート部隊による解放にさいしては、その名を連呼しつつ刑場に駆け付けた。そうすることによって作者はフョードルの「勝利」を描いた。私が前作に、感銘を受けたのはそれが読み取れたからだった。

　ところが改作では、疑いもなく一九五六年のフルシチョフのスターリン批判およびそれに触発され、一連の個人崇拝の批判に合わせて女性問題とスターリンを取り除いた結果、相対的にコレースニコフが愚鈍な人物に変わることになった。牢屋でオリガは「まだあの女のことを思っている？」と質したが、改作版では次のように変更されているのである。

　すなわちコレースニコフとして連行されてきた兄に彼女は当惑せざるをえなかったのであり、作者はト書きに「フェ―ジャの顔にかすか笑みが浮かぶが、それは妹の、茫然自失し、まことの絶望と交錯した喜びにたいする回答である」と記しているのだ。

　オリガ　フェ―ジャ、きっとあんた私たちを見下しているのでしょうね…　（急き込んで）でもね、こんな粗末なベッドの場所で一緒になれたなんて嬉しいじゃない。もうじき縛り首になるんだから、あんたが言いたいと思っていたことを聞かせてくれない…　あんたの罪とはいったい何だったの？

　（フョードルは身じろぎもせず、まるで自分の手指に対するように、妹の膝を擦っている）。

　　それじゃ、わたしが代わって言ってあげましょう…　要点だけを、ね。このところ、ずーっとあんたのことだけ考えていたの…　そしてあんたと二人きりになるのを怖れていたわ。でもね、信じて、フェージャ。私たちが沈黙してきたのは、羞恥と恐怖のせいだけだったのではないの。全力疾走中には、気づかないことってあるものだわ、怪我を避け、気が狂わずにすますためにね。余計なことを考えると、魂と目的は蝕まれ、鉄だって錆つくのよ。（小声で）今はだめ、だめ、どうしても駄目なの…　歴史とは火薬のようなもので――それをつくる人間たちよりも強大なのよ。

　最後の「歴史とは…」云々はあまりにも含みが多い表現で、意訳の必要のある個所である、短気は損気、時節の到来を待つ以外にない、ということを言っているように思われる表現である。言うなれば、フョードルには短気、もしくは性急に似た行動があったようなのである。

　コレースニコフにはオリガのこの認識が決定的に欠けていた。彼はスターリン体制そのものである。地下牢の最後の場面。人々はみんな地上に出、残るのは二人だけである。改作版でのコレースニコフはフョードルの死にこれっぽっちも心動かされていなかった。彼にはオリガの涙が不思議である。

　コレースニコフ　上にあがろう、ママが来ているよ。

　オリガ　母はもう（兄の遺体を）見たんですか？

　コレースニコフ　うん…　どうしてあんたは泣くのだ、オーリャ？　これもまたわれわれの偉大な勝利なのだよ！

　オリガ（木霊のように虚ろに）　偉大な勝利ね…

　私はレオーノフの読解に多大の時間と労力を費やした。これは卒業論文のテーマであり、私が目指したのは、『襲来』におけるフョードルの情痴殺人未遂は作者における偽装であり、スターリンの告発が真の意図であることの証明だった。しかし同時期の評論「ロシアの栄光」（一九四三）では対独開戦を告げるスターリンのラジオ演説に触れて「われらが偉大なる父スターリン」の、またアンリ・バルビュスの評論「スターリン」の表題の簡潔さ内容の大きさを賞賛する評論などを見ると、そのように論証するのは困難だった。しかし私は己の読解に固執しレオーフを読み続けたのである。そして最終的には作者その人に質す以外にはないと信ずることになったのであり、時期的にはまだ尚早だったのに性急に留学を目指すことになった。ソ連への留学がまだ狭くしか開かれていなかった時代のことである。

　私はその旅の途上であなたに出会ったのであり、ゆっくりと歩むこと、すなわち待つことの必要を知ったのであり、それを断念したのであった。それ故に、改作に接し、肩透かしを食ったような、馬鹿にされたような気持ちを味わった。作品は全体が弛緩しており、最初の版の緊張が失われていた。それは結びに明瞭に表れていた。私はレオーノフを読むのを止めたが、それはまたソヴェト文学全体との別れともなった。ソルジェニツィンが現れ、『収容所群島』がソ連の外で公刊されてソ連文学が様変わりするだいぶ前の選択また決断だった。私はソルジェニツィンの出現にはそれほど驚いてはいない。

　あなたとの結婚によって私は、言うなれば後退を余儀なくされ、会社員になったのだけれど、それが良かったかどうかということでは、私は良かったと思っている。例えば最初の会社に勤めて、ほどなくレオーノフが新聞「プラウダ」に、アメリカにおける核シェルター騒動を風刺した映画シナリオ『マッキンリー氏の逃亡』を発表したのを見て、「こんなこと（貿易）のためにロシア語を習得したのではない」と思い、会社を辞めてその翻訳に取り掛かかかったりした。あなたの妊娠が明らかになって、また再び商社に就職するという屈折を経なければならなかった。私は結局翻訳の専門家に成れずまた成らなかったのだけれども、そのような存在にならないでかえって良かったのだと思っている。それにより世界と社会を見る眼がずっと広がったからだ。

　配属された木材の輸入課で隣の席の年長者は札幌の中学校の出身で、召集により樺太軍に配属され、語学の才が認められて東京外語学校露語科の一年間の委託生になり、北緯五〇度線の諜報任務に就かされた。やはりそこに配属されていた横綱大鵬のウクライナ人の父親と親しかった、と語っていた。戦後抑留されて戦犯とされ苦難を強いられて帰国、貿易が始まるとともに就職してきた人だった。ソ連には懐疑的もしくは批判的であるにもかかわらず、ロシア語は愛している、といった私に似ていなくもない人だった。

　木材をやって良かったのは、積取船に便乗してアムール河口の内と外の積出港にやられたことである。アムールはあなたとともに一九五九年に列車でその鉄橋を通過した大河であるが、中国名の黒竜江にあるように褐色に黒ずんだ河であり、流出する水のため海峡の水も河口に近づくと黒さを増した。水深も浅くなり、ソ連側の水先案内人に頼ることになる。そこにおいてである、私がチェーホフはサハリンに向かった際、ここを通過したに違いないと思うことになったのは！　実はこの本の最初の邦訳は『サガレン島』の名で成されていて、それを私は大泊の図書館で見かけていた。それは、その複雑に屈折した思い出のゆえに、また大学入学後樺太については当分は忘れて生きようと努めることになったので、敬遠して読まずにきた本だった。最初のアムール行の後に購入して読み、多大な感銘をうけた。作家は北サハリンに到達後そこの流刑地を調査、その後南下してコルサコフ（大泊）に至り、そこで日本領事たちと親しく交わり、なんと、私の故郷の村、遠淵についてもロシア名ブッセ湖畔アレクサンドロフスクの名で記述しているのだった！

チェーホフは大陸とのあいだの海峡の発見者として間宮林蔵の名をあげ、「サハリンの処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」と正しく記していた。私はそれを含む日露関係史にかかわる一連の文言を作品の冒頭の章に掲げることになる。それはロシア語で書かれたすべての書物の中で、私にはもっとも重要な一冊となった

　私はソ連、それも主として極東と呼ばれている地域に行き来して暮らしながら、そうこうしているうちにコーカサス山脈を越えたグルジアでの機械プラント関係の三カ月の勤務の間に、同共和国生まれのスターリンの生地、ゴリ市の広壮な記念館を訪ねる機会をもった。また徐々に樺太＝サハリンを中心とする日露の関係史を調べるようになった。日ソ中立条約を一方的に廃棄しての対日戦の理由としてのその日露戦争への報復論は、レーニン主義からの逸脱であるだけではなく、それに従っていた青年時代の己の言説からも背反しているものだった。また大戦末期の日本俘虜・抑留者は、なんと遠くグルジャにまで連れて来られて労働についていた。己の威光を同郷人に見せたかったためである。

結局第二次世界大戦末期の対日戦は、領土拡張欲のなせる業だった。また貿易業務の実際を通して八〇年代に入るとソ連経済の行き詰まりは明白になった。アマルリクという歴史家がイギリスの雑誌に発表した論文に「ソ連は一九八四年まで生き延びるか」というものがあり、日本には七〇年代末に邦訳されていて、それを繰り返し読みながら、ソ連の行く末を占った。

　私の遠淵での幼馴染の露日の混血の八人の兄弟姉妹の再会のためには、ソ連の変化が欠かせず、それらの作業は、崩壊がいつどのような形で起こるかを占う仕事でもあった。そして私は、サハリン上空で領空侵犯した大韓民航機がソ連機に撃墜された一九八三年、ソ連の崩壊的激変は避けられず、それが望ましい、という結論に到達した。

　ベトナム生まれのフランスの女流マルグリット・デュラスの映画「ヒロシマわが愛」のフランス女性は、故郷の町ヌヴェールで大戦末期ドイツ兵と愛し合い、ドイツ人は射殺され、彼女は髪を丸刈りにされる。両親は恥じて娘を地下室に入れ、髪が生えそろった時点でパリに送り出す。やがて映画女優となり、映画撮影のために広島を訪ねて、明後日はフランスに帰るという日に広島で恋におち、日本青年と一夜を共にする。そして広島で被爆の実態、被爆者たちの苦難を目撃して、忘れえぬ傷痕のヌヴェールが癒されるのを感じ、ヒロシマに留まる決心をする。私があなたに決定づけられることになった映画だった。

　思うに若かった私は樺太が辛かったので忘れたかったのだ。そのためにあなたに結びついたのであり、被爆女性と結婚したからこそすることになった諸体験をした。あなたにもまただれにもけして口にしなかったが、ツヨシを「樺太のヒロシマの子」と呼んだ体験はその最大のものである。フランス女性にとってヌヴェールとヒロシマが同義語となったように、わたしにおいては樺太とヒロシマは同義語だった。以前からそう思っていたのだったが、七十年代に入って樺太の友人・知己たちとの再会が重なり、樺太の甦りがあって、それへのあなたの反応に接してそう確信した。人には期待しながら待つ以外にない場合がある。混血者たちは日本とサハリンに別れて生き、再開の機会を持っていなかった。彼らは待つ以外になかった。それで私は結びでわが遺児にデュラスの言葉を語らせた。「耐え忍ぶということ、そういうことを知ること、それが叡智につながるのだわ」。こうして樺太の本は外でもなく一九八四年に――世に出ることとなった。

　前後してあなたが二度目の乳がんで入院、手術をうけついには両乳房のない女性になり、腎臓の片方にもがんが発見され、残る片方がなぜか萎縮していて人工透析を受けるようになった。一級の原爆被爆者であるあなたはこれにより一級の身体障碍者でもあることになった。そして一時は転移と疑われる症状の発生があり、私もあなたの死を覚悟する。誤診であることが分って事なきをえたのだったが、この衝撃によって、書ききれずにきた一九五九年のあなたとの出会いの旅が書けるものになった。こうしてあなたとの出会いから求婚に至る過程を樺太からヒロシマへの到着として捉えた『ヒロシマまでの道』が八六年の末に書き終えられる。

それは、しかしながら、それは。平和運動家であり、戦前は木寺黎二の筆名に依るドストエフスキー学者であり、戦後は本名に戻り、マルクス主義の啓蒙家、平和運動家、学生運動への助言者として生きた早大教授、私が私淑した松尾隆の没後三十周年にあたる年だった。、記念行事として文集『松尾隆――戦後を駆け抜けた早大教授』が制作発行されることになった。その準備の過程でドストエフスキー関連の未完の原稿が発見され、文集にその最初の章が掲載され、その後に私はその全体に接することになった。未完かつ欠落の多い原稿であったが、傑出した内容のもので、私がその処理に当たることになる。ことと次第によっては書きあげた小説原稿を訂正しなければならなくなる発見であり、私はそのために作品の発表を先に延ばすことになる。当初は教授のオリジナルな論文と思い込んでいたのだが、翻訳である可能性があり、一年を要した調査の結果、ロシアの文芸学者ペレヴェルゼフの一九一二年の処女論文『ドストエフスキーの創造』と特定した。かくてテキストを入手、改めて翻訳し一九八九年初頭に出版社が決まり年内に出ることになって、ようやくその後に小説作品を上梓できる状態になった。まことに遅まきながら、樺太に続いて私はヒロシマをもまたクリアしたのだった。

ペレヴェルゼフの論文は今日までに書かれたドストエフスキー論のなかでもっとも包括的にしてかつその本質を剔抉したものであって、ロシアでは革命後の一九二〇年代絶大な権威を有したものである。その評判は日本のロシア文学界にも知られ、一九三五年に部分的には翻訳されていた。しかし全訳されることなく大戦争に入り、早大高等学院の英語教官であった松尾隆は戦時下その全訳に従事、かなりのところまで進みながら、戦後に放棄していた。すでに二十年代末にソ連で禁圧されていて、戦後のスターリン神格化の状況では全訳しても出版できないと思われたためである。一言でも私に伝達していてくれたならば、私は六〇年代早々には翻訳していたはずのものであった。しかし、皮肉なことに、その場合には私には原水禁運動とのかかわりは生ぜず、代わって私はロシア文学者になっていた。すなわち私はあなたには会わず結婚することもなかった。その結果として自ら作品は書かずまた書けなかったわけである。

会社員となると同時に、原水禁運動からも離れていた私だったが、一九八五年からは日本原水協の流れを汲む平和事務所に参加していた。一九九一年五月、私はその団に加わり、ベルリン、バルト三国を回り、ミンスクとキエフでチェルノブィリの被災者および医者と交流しした。モスクワでは、以前はかならず向こうから接触してきた国家保安委員会（ＫＧＢ）のスタッフが現れず、ソ連国内で異変が起こっていることが感受された。

チェルノブィリにはソ連各地、わけてもバルト三国から予備役兵たちが軽装備で除染に動

員され、そのなかからは放射線による健康障害者が現れて、平和事務所は彼らの依頼により、

当の青年と治療にあたった医学者を広島大の原爆医学研究所に送った。それに対するお返

し的招待によって私たちはエストニアを皮切りにバルト三国を回ったのであるが、ソ連か

らの独立運動はリトアニアがもっとも激しくて、直前に流血の弾圧があり、通訳としてロシ

ア語で話して良いかと伺いを立てねばならぬ空気だった。婦人国会議員の案内で同国のイ

グナリアにあるチェルノブィリと同型の原発に案内してもらったのだったが、乞われて隣

の席に座った帰路の車中、彼女はロシアの領土欲を宿阿と罵り、私がその地について何も語

らなかったにもかかわらず、「日本もサハリンを奪われておりますね。（日本人は）座視して

いていいのですか」と問うた。帰国して私は樺太連盟の機関紙にこのことを書いたが反響は

大きかった。

帰国して北海道帯広に両親を訪ね、帰路に花巻で下車。初めて宮沢賢治記念館を訪ねる。弟の清六氏が樺太の賢治の足跡を訪ねようとしているとのことで、その相談に応ずるためだった。そこでゴルバチョフのヤルタで拘束のニュースに接する。続いてモスクワでのドン・パチ騒動。年末ソ連の国名は消滅。想定していたことであり、歓迎しこそすれ、すこしも驚かなかった。

あなたは電車で透析専門のクリニックに通院していたのだったが、透析後の血圧の降下が甚だしくなり、一人では通院できなくなって、また回数も二回から三回に増え、一九八八年私は一戸建ての家（土地）を売り、クリニックに近い場所の集合住宅に移り住んだ。また同時に会社を退社し、執筆に専念することになった。松尾隆教授のペレヴェルゼフについての沈黙と亡き長子の沈黙を重ね合わせて『微笑の沈黙』（一九八六）を書く。またその中でペレヴェルゼフの次作『ゴーゴリの創造』の翻訳をやりかけたのだが、中止したことを記した。私は自身のドストエフスキー論を構想していて、そのなかにその論文を生かそうと考えたのである。そのことも『沈黙の微笑』には記しておいた。

戦後学生運動の総括を目指し、東京大学国際派細胞の『一九会文集』と同時並行するように一九九八年末から、年に二回の間隔で『西北大・一九五〇年・史料と証言』全六冊の、制作発行が始まった。一九五〇の数字は、その年が大分市のあなたの正道「兄ちゃん」も注目し共感していた全学連のレッドパージに反対する闘争があった年だからである。私はそれに「松尾隆」を連載執筆したが、それは教授がそれを鼓舞する有名な「所感」を発表していたからだけではない。それに触れた関連する文章は文集『松尾隆』にすでに何編も収録されていた。私は木寺黎二とのペンネームでドストエフスキー関連の業績を残した教授と戦後本名にもどり、共産党に入りマルクス主義の啓蒙宣伝家と成った教授のあいだには魅力とともに断絶もしくは亀裂が感受していたのであって、そのことは『文集』に寄せた拙文「松尾隆における分裂と統一」に記していた。私はそれを敷衍することになった。

もっともそれが何に起因したかについては、発見された遺構の処理の過程で明らかになり、ペレヴェルゼフに係わる教授の「沈黙」とその意味を、『微笑の沈黙』では記していた。しかし書き足りてはいなかった。多面的だったこの人は昭和十年代を通じて、『早稲田文学』に依り同時代の日本文学、とくに転向問題について多く執筆しており、その紹介と評価を私はまだしていなかったのだ。私はそれを『史料と証言』全六回で連載によってすることになった。全部で二二〇枚。木寺黎二を賞賛していた埴谷雄高さんは亡くなっていたが、やはり面識があり、ペレヴェルゼフに関心のあった小田切秀雄さんが毎号賞賛と鼓舞の葉書おくってくださった作品だった。

まさにその仕事の最中である。先に一九八八年に大分市の幼馴染の古川家の弟の雅章氏が町田市つくし野の一戸建てだった家に訪ねてきていた。そして兄の和男氏が、現行の危険なウラン原発とは異なった、安全なトリウム原発なるものの研究に従事していることを語った。それは私も同席して聴いていた。ところがその後にあなたの状態の悪化が原因での転居があり、移り住むことになった現在の川崎市市宮前区の集合住宅の家に、今度はその弟氏に案内されるようにして当の和男氏が訪ねてみえた。述べたように挨拶だけにして私は外出したのだったけれど、敗戦時には熊本の五高にあり、京大に進み、原子力発電の研究者になったその人は、自身の研究について語り、ただそれだけについて長く語り、他のことは一切語らなかったとのことだった。フクシマ後に気づくことになったのだが、それは幼馴染で原爆被爆者となったあなたへの唯一可能な挨拶と信じていたためだったと考えられる。その翌々年の二〇〇一年氏の、一般向けとしては最初の啓蒙書『「原発」革命』が上梓され、あなたは贈呈されていたが、私は手に取ってみようとはしなかった。当時の私の関心は別なことにあった。

　樺太の本で紹介した、チェーホフの、親日的でありながら厳密には国際主義的な記述。それは、その名がまったく挙げられていないにもかかわらず、シーボルトの大著『日本』に基づいていることは明白だった。ソ連側が忌避黙殺しているにすぎなかっただけのことだったのだが、崩壊後のサハリンに現れた大学の新しい郷土史教科書に接し、時代の変化が知られた。サハリンの地名が清代のポルトガル宣教師製作の地図によることを記し、チェーホフが記さなかった依頼者の清国皇帝康熙の名まで挙げながら、当のチェーホフの名は伏せられているのである。異常であり、その秘密は世界に先駆けて一九八三年にサンクトペテルブルクで刊行された『日本』の露訳にあると思われ、探し回って日本でただ一冊神奈川大にあることが分り、稀観本室で閲読がかなった。立派に製本された本だったが、扉に国家による検閲のために見本として翻訳制作されたものであることが銘打たれていた。通読すると、サハリン発見にかかわる日本人の貢献が完全に削除されていた。つまり検閲はそのための処置だったのである。

　このことから疑いの余地なく明瞭となったことがあった。すなわちチェーホフは、サハリン行以前か以後かは定かではないが、いずれにせよ『サハリン島』執筆以前には、露訳の歪曲の事実を知り、日本関連の記述は全部シーボルトのドイツ語原書に依拠し、その翻訳者として執筆しているのである、しかしシーボルトとその『日本』の名は伏せられているのだが、その理由もまた明らかだった。それを明かすならば、『サハリン島』が出版できなくなるからだった。そしてそのことから、日露の最初の外交的接触から第二次世界大戦までの、領土問題を中心とした全関係史が明らかになった。こうして私は『日露領土紛争の根源』の執筆に入り、二〇〇三年にそれを上梓した。

　原稿が完成し、校正も終わった段階で、私は実際に出版された本と、私が依拠した検閲用の本との異同を確認する必要を感じ、サンクトペテルブルクに飛び、帝政時代の図書の所蔵ではロシアで最大のシチェドリン図書館で調査した。『日本』の翻訳は検閲本だけで取りやめになり、一般には市販されていなかった。拙書はこのことを後書きに記して出版されている。

　久しくロシアに行き来して暮らして来ながら、ヤルタは私が行きたいとは思わないできた土地だった。理由はそこがヤルタ会談の地だったからである。そこにも今や晴れてサンクトペテルブルクの帰路に訪れた。会談の場所である　　　宮殿前で物売りの女性から手編みの帽子を、私はあなたへのみやげとして買った。

　翌二〇〇四年は日露戦争勃発から百年の年であるが、その年に日本の広瀬武夫が旅順港閉塞作戦で戦死。これはヨーロッパで報道されており、南ドイツの温泉地にあったチェーホフはその氏について譫言をいいながら死去した、と妻クニッペルの弟によって証言されている。すなわちそれはチェーホフ没後百年でもあった。モスクワの南メリホヴォ、作家の領地跡の記念館で演劇祭があり、これに出席、三週間後の同国際学会での報告者にエントリーし、主催者であるモスクワ大教授に原稿を手渡した。この際、長く外国人には閉ざされていた生地、黒海沿岸のタガンロークを訪ねたが、まことに有益だった。古くはスキタイ文明の中心地、近代になって交易で栄えたこの市にはイタリア商人が住みその文化が伝わり、七つの異なる宗教宗派が共存していた。また商店だった生家には漢字の入った中国の茶箱があり、アジア人の血が入っていた作家の東方への関心、その国際主義の原点が確認できたのである。

　一旦帰国して今度は国際学会に行く。私の報告は長すぎるということで短縮され、シーボルト関連の記述は削除され、すでに報告集に収録されていた。それで実際の報告は元の原稿に即して行わざるをえなかった。ともあれ一石は投じたのであり、初めてのことであり、とりあえずは満足しなければならなかった。それらの経緯の一切を記し両稿を掲げて、私はこの年初めて自身のホームページを立ち上げた。新聞社の目にとまり、一文を書き、少し遅れてテレビで話す機会もえた。思いがけず、また嬉しかったのはシーボルト学会からの高い評価だった。研究者たちは『日本』の初めての外国誤訳がロシアで成されたことは知っていた。しかしそれがどんな翻訳になっていたのかは誰も調べてはおらず、国際的にも私が初めて成したのである。

　日本にドストエフスキーの会という学会がある。一九七〇年に早大露文科関係者よってつくられ、私も一九八八年にペレヴェルゼフの原書を西北大図書館から借りだすさいに会長の新谷敬三郎教授に世話になり、入会をすすめられたので入会していた。また訳本が出てからは、新谷氏は亡くなっていて、会長は大学では後輩の木下豊房千葉大教授に代わっていたが、その定例の研究会で訳書について報告した。以来ずっと会に所属し、二〇〇〇年に千葉大と西北大を会場として国際ドストエフスキー学会が行われた際にも、聴講者として出席していた。しかしその後『日露領土紛争の根源』に集中した二年ほどはその集まりには欠席した。

　それを世に出すことができ、またメリホヴォ学会の後に札幌で国際学会があり、さらにまた東京でのチェーホフ記念展に係わって一段落し、私はふたたびドストエフスキー関係の集まりに顔を出すことになった。ドストエフスキーの会の姉妹関係にある「ドストエフスキ＝全集を読む会」という会があり、そこに『ドストエフスキー　父殺しの文学』という本を出した鶴亀という外語大教授が講演者として招かれていて、私はそれを聞いた。フロイドに心酔する人物であってそれに依拠してドストエフスキーを解読しようと努め、やたらにサデイズム（嗜虐嗜好）とマゾヒズム（被虐趣味）の二語を連発する軽薄な感じの講演であった。

　集まりの後、ビールを飲む席が有り、私がペレヴェルゼフの訳者であることを告げると、相手は「あの本には世話になりました」と答えた。さっそくその『父殺しの文学』を求めて読んだ。たしかに論の展開でペレヴェルゼフを引用している箇所があったが、正しくしている箇所と歪曲している箇所があった。またその人は『カラマーゾフの兄弟』の新訳を出し始めていたが、国際ドストエフスキー学会の副会長の一人でもある木下氏によると誤訳・奇訳・原文お改ざん訳が多いとのことで、会のＨＰに発表された批判文を読むとなるほどと納得された。強調されねばならないのは、先行諸訳で正しく訳されている箇所でそうした現象が生じていることであり、かつ原文を恣意的に改変して面白可笑しく立論している著書が出て、厳しく批判されねばならなかった。

　ペレヴェルゼフは南ロシアのハリコフ市の生まれ、同地の大学の物理数学部に学び、ロシア社会民主党（後に共産党）の革命運動に従事、捕らえられて西シベリアに流刑。『ドストエフスキーの創造』で文芸学者として登場、一九一七年の革命後にモスクワ大教授に就任、ドストエフスキー文庫を開き、夫人宛ての手紙を編集出版、未公開だった『悪霊』のなかの「スタヴローギンの告白」の章を公開。それについての評価である「ドストエフスキーと革命」を執筆、一九二一年の「ドストエフスキー生誕百年祭」で報告、同年刊行された『創造』の新版に「序文に代えて」と括弧で記し、冒頭に据えた。しばしば社会主義に反対する小説と非難されてきたこの小説をマルクス主義の立場から擁護したものだった。また後にソ連作家同盟の発足、社会主義リアリズムの強調に対する流れに反対し、「マルクス主義文芸学の必要な前提」で「文学が政治を代行できないように、政治もまた文学を代行できない。両者に必要なのは相互理解と相互援助である」と主張した、しかし二十年代末この両論文は激しい非難攻撃をうけ、ペレヴェルゼフは「失脚」、文学界から消された。

著者は出身のハリコフに隠棲、ロシア古代文学の研究に従事、一九六七年に没していた。一九八二年に一巻選集が出て復活したが、弾圧の対象となった二つの論文、および非難・攻撃者に対する反論である「ロシア文芸批評におけるドストエフスキー」は収録されなかった。これは結びに「ただマルクス主義文芸批評のみが、ドストエフスキーの本質を解明しえたのである」とあるように、自作の擁護に貫かれたものだった。ソ連崩壊後血縁者によりさら一に新たに一巻選集が編まれたが、事情は変わらなかった。二〇〇〇年日本で国際ドストエフスキー学会のシンポジュームが行われたが、ロシア側の団長格のサラースキナ女史がその報告のなかで「ドストエフスキーと革命」からの引用をおこなったので、「あれは未だ復権していませんね」と質すと、彼女が最近『悪霊』関係の論文集に収めて出版したとのことだった。

　それを含め、ペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』は今日に至るまでの、おびただしいドストエフスキー論の中でもっとも包括的かつその本質を剔抉した優れたものである。ソ連崩壊後にもそれを予見していたマルクス主義者として評価されている値打ちのものである。　しかしながらペレヴェルゼフが本国ロシアで長く闇に葬られ、その余波として日本でも全訳が一九八九年の私、瀬川修を待たねばならなかった損失は大きく、二十一世紀に入って突如ドストエフスキーの「第一人者」として現れた鶴亀教授に見られるように、拙訳書を読んでも、その価値を把握しきれずに、利用できる箇所のみの引用に留まっていた。その『ドストエフスキー』は「父殺しの文学」の副題を有し、『カラマーゾフの兄弟』が表面上では「父親殺し」をテーマとしているからなのだが、ペレヴェルゼフには反すること甚だしいのである。しかしそれが歓迎されているという風潮の発生が見られ、それを正すべく、私はペレヴェルゼフを宣伝し、足りていない箇所を補足すべく『ドストエフスキーとは何か』（七百枚）を執筆、二〇〇八年に刊行した。

　これを執筆しながら、私はしばらくぶりでレオーノフにも回帰している。もっともそれは『日露領土紛争の根源』の場合にも起こっていたことであり、私はチェーホフの先に掲げた文言ここでも記し、その際それらを賞賛するかのような、レオーノフのチェーホフ論のうちの「祖国を愛しつつ、彼、チェーホフは彼女（ロシア）に媚びなかった」を、補強補足するものとして掲げたのである。-またレオーノフは一九六二年の評論「作家の仕事」のうちで、アインシュタインが、ドストエフスキーについて「この作家から受けたものはガウス（ドイツの大数学者）から受けたものよりも大きい」と述べていることを挙げ、「ここに文学研究の今日の課題がある」と記していた。私はこの評論は全文翻訳していたのであるが、発表のあてがなく放置し、自身その探求に積極的に向かうことはなかった。それが思いがけなくもドストエフスキー論を書くことになって、少なからず勉強し、結びでそのことを記すことになった。アインシュタインの世界観が日本の空海のそれと非常に近い事とともにであった。

　サハリンには会社の業務の関係で、日本領ではなかった北サハリンにも行っており、南も私が行ったことのなかった敷香、ロシア名ポロナイスクにもやはり仕事の関係で行き、案内されて北に向かう道に立ったこともある。早大露文の戦前の卒業生である杉本良吉と女優岡田嘉子が一九三　年に北緯五十度線の国境を越えてソ連領に入ったときに宿泊した町であり、馬車を走らせた道である。樺太で生まれ育った日本人である私にとってこれは悩ましい事件であり、あるいは西北大露文に進んだ遠因の一つといえた。

　その結果私は一九五七年の最初の訪ソで岡田さんそのひとを見ることになる。クレムリンでの首相の会談が終わって帰ったホテルで、エレべーターを出ると近くの長椅子に日本人女性の顔があった。待ちくたびれて放心状態で、わが団の年配者が「岡田嘉子じゃないか！？」と言って近づき声をかけた。「（通訳として）お役にたちたい」という申し出だったが、その筋から差し止めたられたのであろう、その後は現れなかった。しかし二年後のウィーンの帰路には許されていたようで、あなたは会っており二人でとった写真が残っている。その後来日し、演劇活動にも従事したようだ。帰国し、ソ連の崩壊後に、杉本良吉が入ソ後早い時期に銃殺されていたことが明かされ、集合墓地に花を捧げる日本のテレビの映像に接した。

その樺太であるが、住んだ南の大泊を中心とする亜庭湾沿岸地方に人が入れるようになったのは、本を書いて五年たった一九八九年になってである。中学校の同窓会で再訪者の報告を聞いた。第五回の卒業生、句集『凍港』の俳人山口誓子氏の再訪記が朝日新聞に出た。遠淵村にも人が入り、サハリン残留邦人一時帰国促進会の招きで、わが幼馴染の混血者たちも来日し、わが原点であった露日混血のキヨミとも戦後六十四年目にして再会を果たした。やがてソ連が崩壊してそこも容易に行けるようになり、多くの人たちが再訪するのだが、私は行きたいと思ったことがない。そこで過ごしたソ連占領下の最後の時期、引き揚げてからは二度とは見ないものとして見て暮らしていて、その思い出が妨げになって、行く気が起きないのだと思う。

そしてふと振り返って、大分市生まれ育ちのあなたにとっての原点を考えた。そしてそれはあなたがまさにあなたになったという意味では、大分市ではなく、また先祖の墓地がある宇佐市でもなくて、広島市の被爆した地点、白島町ではなかろうかと考えた。もちろんあなたはかつてそこにもう一度立ってみたいなどと言ったことはなく、事実行ってはいないのであるが……。

最初はあなたとの縁で、後には会社業務の関連でソ連人を案内して何度か行っていた広島である。しかし或る年からそこに樺太以来の親類縁者が住むようになって意味合いが変わった。母方のすぐ下の妹である叔母が、引き揚げて後、函館で結婚、夫が広島高等工業（現広島大）の出身で広島の缶詰会社に勤めることになり安佐南区に住んだのである。そのご主人が亡くなって葬儀に行き、小型バスで火葬場に向かう途中、思いがけなくも窓外に「戸坂小学校入口」の表示を見かけ、私は思わず内心「ここかぁ！」と声をあげた。あなたは火を逃れ、河を歩いて渡り、指示にしたがって当時は戸坂村と呼ばれていた村の国民学校まで歩き、収容されている。そこが後に広島市に吸収合併され区になっていたのだった。

　それから数年して今度は叔母が亡くなってやはり葬儀に行き、同じ葬儀会社の宿泊施設に泊まって翌朝、カーテンをあけて眼前に小さな川が流れるのが見、私はまたもや「この川なのか！」と思ったであろう。疑いもなく太田川の支流のひとつであるその小川が、原爆の都市の九月台風で増水し、あなたは兵士に背負われて駅の助役の家に連れて行かれたのである、そのことはシベリアの車中で聞き、本にも記していた。私の内に、あなたの被爆地点から戸坂の小学校までを歩いてみたいという思いが生じた。

問題はそのルートだったが、それを教えてもらうには恰好な人がいた。生まれ育ちは福島県の社会心理学者なのだが、志をもって広島に住み、広島大原爆医学研究所の心理学の専任講師の傍ら、在韓国の被爆者の支援活動などする社会活動家の渡辺正治氏だった。そこの所長であるＳ・Ｕ氏らとともに一九九一年チェルノブィリ関係の調査で一緒にミンスクとキエフを訪ねていた。

　「途中に山があり、その東西に道がありますが、奥さんはどちらを通ったのでしょうね」と言われたが、そのうちに自分で調べ、経路図を途中の写真とともに送ってくださった。もっとも私がそれを実際に利用したのは、数年遅れて、その時渡辺氏はすでに亡くなっていた。私は長崎のシーボルト記念簡に所用があり、帰路広島に下車、従弟の奥さんに車で案内されて、あなたが被爆したといっていた市の中心部の安田女学院の前（の住宅地）に立った。校門をくぐりぬけて入ると、原爆死した教員と生徒の名が刻まれた慰霊碑が有り、折り鶴に覆われていた。川に向かって進むとすぐに「被爆者たちが渡りました」と記された吊り橋に遭遇して、不思議に思った。あなたは川に入り歩いて渡っているからだ。後に案内者が調べてくれて、その学校が原爆後南に五百米移動して建て替えられていると知らせてくれた。

　被爆体験の概略は知ったうえでの求婚だったが、細部にわたって知ることになったのは、

結婚後であって、それも長い期間にわたって、かつ断片の継続としてであった。夫婦になっていなかったならば、私が生涯知ることがなかった物語である。大分市での結婚式の後、別府温泉での夜、あなたは「わたしは妊娠しないと思う」と言い、私は黙し「なぜ？」とは問わなかった。やがて川を歩いて渡っていて局部から時期はずれの大量の出血があったことを知る。広島で知り大分市で再会した山田女医先生に話したところ、「わたしもその時間にそうだった」と答えたとのことだった。あなたはそのことから、妊娠する機能が破壊されたかもしれないと思うことになったようである。しかし子供は欲しかったから、予めの避妊には抵抗したのだ。

　パンツはその場で脱ぎ、川の水で洗いはき直して進んだ、と私は思いこんでいた。尋ねて確かめるまでもないことだった。ところが、である、或る時、血まみれのパンツは脱いでそのまま水中に捨てたことをあなたの口から聞いて驚いた。とすると、新しいパンツは何時どこで得たのだろう。聞く気持は起きなかった。

　「戸坂での暮らしを書いてみたら」と勧めたことがある。「しょっちゅう熱が出て、事柄の日時の前後関係がはっきりしないので、とうてい書けない」ということだった。

戸坂小学校を訪ねてみたが、後者は建て替えの際に当時の位置よりから高台に移されていた。出水のさいに避難し一時世話になった駅員官舎らしきものは残っていたが、路線そのものは廃止されていた

私はあなたに会う前すでに東京で何人かの被爆者に会っており、一九五七年の最初のソ連行も長崎の被爆者団体の代表者と行を共にしていた。しかし箱根・熱海以西には行ったことがなく、一九五九年あなたに求婚するため大分に向かう途中、下車して初めて広島を訪ね、原爆資料館に入った者である。

会社員になって二年目、アムール河口の木材積出港からの帰路、珍しく揚地が広島と決まって、船が江田島沖を通過していたとき、折り返しアムール行の電報が入り、あなたに冬物の衣類を持って広島に来るよう電報を打った。会社からの書類も必要だったのであなたが出張扱いで広島に来たものである。

　広島県では初のソ連材の外材輸入協会によるテスト輸入で宴会に呼ばれ、一泊して翌日広島駅にあなたを迎え、平和公園内の映画『ヒロシマわが愛』の舞台となったホテルに宿泊、二度目の資料館の見学をした。ウィーン友好祭のプログラムにはダッハウのナチス強制収容所跡の展示館行が組まれていて、それに誘ったときのことだ。あなたは「そんなものは見たくありません」と激し、「私は会議で、何度か広島に行きましたが、資料館には入らないのです。あれは原爆を体験しなかった人のために在るのですから！」と激し、私はショックを受けた。「女の髪で編んだテーブルクロスが有るそうです」と好奇心あらわに言ったためだった。私はあなたが原爆で髪を一度全部失ったことがあるのを忘れていたのだ。

だから私はそのあなたがどのように陳列物を見るのかが気がかりで、後ろに付いてくるあなたを何度も振り返って見たものだ。あなたは体を前かがみにし、私の足の動きを見て歩き、陳列物を見ようとはせず、顔を上げずについて来た。まるで陳列物の間から亡霊が出てくるのを、あるいはまたその中に引き込まれるのを懼れるかのようであり、面白い見ものだったと今も目に浮かぶ。公園内を逍遥し、外国人にケロイドを見せ、見料を請求したことで「原爆一号」の異名をもつことになった旧知の人物の土産物店にも立ち寄った。あなたと過ごしたただ一度の広島である。

私はあなたと結婚することによって樺太という故郷の喪失者がヒロシマに到着したのだと考えてきた。私の最初の作品『樺太の孤独』が樺太にヒロシマを探るこころみであったとすれば、第二作の『ヒロシマまでの長い道』は樺太からヒロシマへの到着を扱っている。

いずれにせよ私はヒロシマに到着している人間であると考えてきた。しかしこれが二〇一一年三・一一の福島原発事故以後、すなわちフクシマ後に修正もしくは拡張を迫られることになった。他でもなく古川和男氏によって、その著『原発安全革命』（二〇〇一年の本の増補改訂新版）および、古川が多大に依拠した米オークリッジ研究所ワインバーグ博士の『最初の核時代』(一九九四、英文書)によってある。

それらすべては一九〇五年のアインシュタインの、「物質量とエネルギーは相互の返還が可能である」とする相対性理論の提唱から始まっていた。この原理は原爆にも利用できるとともに、平和目的の発電にも利用できるものであり、一九四五年の五月、原発の開発に先立って、ワインバーグ博士は、師ウィグナーとの共著「トリウムを利用した液体燃料循環型の原子炉」のなかで、すでに「軽水炉で冷却できないと、燃料が破損し、プラント全体が放射能で汚染され、修復はきわめて困難になる」とフクシマを正確に予言する言葉を残していたという。これは一九五八年刊の原子力発電の教科書に収録され、古川和男は一九五九年、すなわち私たちのウィーン滞在の年、ロンドン留学中にこれを読み、自身この研究開発を生涯の課題とすることになっていた。

ワインバーグは米国立オークリッジ研究所所長として原発の開発に従事、また冷戦の勃発とともに要請されることになった潜水艦の核エネルギー炉の開発にも従事した。これはウランを利用した固体燃料の軽水炉だった。しかし陸上の公共用の炉では、プルトニウムその他の有害物質を産しないトリウムを良しとし、それに適した液体炉、すなわち熔融炉の開発を目指し、大きな成功を収めた。しかし核弾頭のためにプルトニウムを必要とした政軍産共同体に圧迫され、その研究は禁止に追い込まれた。このため潜水艦の軽水炉が上陸してき、それが公認の陸上の発電用原子炉となったのである。

この原子炉は普通の発電とプルトニウムの双方の取得の目的とする準軍事炉であり、このため図体は巨大と成り、操作もまた複雑で大事故は避けられなかった。ワインバーグは起こりうる過酷事故に心痛し、憂鬱症に陥り、陸上の軽水炉を「フアウストの買い物」と罵るようになった。ゲーテの最晩年の詩劇『フアウスト』の主人公が悪魔メフィストフェレスの惑わしによって行った取引に例えたのである。「悪魔の買物」と訳してもよく、事実それによる部分訳がある。鬱病は昂じ、所長職の解任の動きがおこり、ついには辞職を余儀なくされた。かくて、疑いもなく古川の助言があって、救済を求めて広島と長崎を訪ね、悟るところがあった。原子炉の世界で大統領とまで称えられながら、そこから排除された己の生涯を核エネルギー時代の最初、第一期の出来事と概括した。そして来るべき第二期が、自身が手掛けたトリウム熔融塩炉の時代となることを願いかつ信じ、一九九四年に自伝『最初の核時代』を公刊する。それは「残念なのは、私がその時代を見られないことである」と述べて結ばれている。

古川和男はワインバーグが中断せしめられた仕事を受け継ぎ、一九八五年にＦＵＪＩ（不二、富士）として理論的には完成した。残念ながらその多大な努力にもかかわらず、ワインバーグが米国で被ったと同じ運命をたどらなければならなかったのであり、フクシマの年の一二月に八十四歳で亡くなった。しかし生前に事業の発展のためにＮＰＯ法人ＩＴＥＭＳ、すなわちトリウム熔融塩国際フォーラムおよびＴＴＳ、トリウム・テック・ソリューションを発足させていて、その事業は後継者たちによって継承されている。

私はこの古川和男の事績を称え宣伝すべく、二〇一四四年に『トリウム原子炉革命』を上梓した。「古川和男・ヒロシマからの出発」を副題に記した。それはなぜだったか。古川氏の試みが『ヒロシマまでの道』の中の、私がシベリアの車中であなたの両腕から手の甲にかけての火傷の痕に気づいた箇所に関連していたからである。

「（一一月に）大分に帰りましてね」と彼女は始めたろう。

「噂を聞いてすぐに小学校の同級の男子が四人見舞いに来てくれたんです。ところがわたしの状態があんなにひどいとは思っていなかったのですね」　大分に帰った彼女の（一度髪がすっかり抜け落ちた）髪の長さは、戦後、髪を伸ばしはじめたであろう男子の友達のそれよりも短かったろう。一度はすっかりむけ落ちたというその皮膚が完全にもとの状態に戻っていたはずはなかったろう。訪ねてきた男友達はお化けのようなかつての女友だちを見たと思われる。

　「わたしを一度見るなり顔を背け、その後は互いに顔を見合わせて話し、ちらりとわたしを見てはすぐに顔を背けるのです。とうとう逃げ出すように帰って行ったのですが、その姿の可笑しかったこと」と彼女は真に可笑しそうに口に手を当てて笑ったろう。

　ど肝を抜かれるような話であり、実際彼は度肝を抜かれたのである。彼らが去った後、彼女は泣かなかったはずはないと彼は思ったろう。

フクシマの後、古川和男に誘われ、テレビ局で「著者に聴く」という古川出演の番組を聴取し、誘われて食事を共にした。友人と言う資格で出席していたので何かを話すように言われ、「妻が友人なのでして私は……」と口ごもり、古川氏に助けを求めた。すると氏は「たいへんな美人でした」と始めたのである。帰宅してそれをあなたに話し、その後に右の事実と、その二十四年後に書いた本の文とを思い出し、その男子の中に古川氏がいたのかどうかをあなたに尋ねた。「居たとも、居なかったとも言えない」という返事で、かつそれらの男子の名をひとりもあなたは挙げることが出来なかった。このことはあなたが見舞客に対し、顔を上げず俯いて対したことを意味する。あなたの話では普通に面と対したようだったのだ。私は呆きれはて、氏にはこのとき見舞客の中にいたのかどうかを質そうと思っていてその死に出会っていた。仕方なく他の人に当たって見たのだが、確実と想定される人が亡くなっていて和男氏が居たかどうかは確定できなかった。しかし噂は聴いたであろうし、また右の文は読んでいると思われた。またそれは氏のあなたについての文章からも確信された。こうして私はウラン・プルトニウム路線を忌避し、安全なトリウム路線で原発を目指した氏の原点があなたの悲惨な姿にあったと結論したのである。それが副題の意味するものである。

まことにトリウム熔融塩炉であったならば、スリーマイル島も、チェルノブィリも。そしてフクシマもなかったのである。しかし容れられず排除されたのであって、古川は著書の冒頭で「原理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きのなかで、時には不当な扱いをうけることがある」と記していた。そしてこれはドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の序文の、キリストの再来を念頭においた主人公についての言葉を想起させるものであった。「一風変わった人物、どちらかといえば奇人だということである」。「奇人こそが全体の核心を自らの内部に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風に吹き廻しで、一人残らずなぜか一時その奇人から背を向けることがある。……」

ドストエフスキーはその続きを書いてはいない。しかしその「一時」が終わり、奇人が奇妙な人ではなく奇特な人であったことを、「残りの人々」が知るに至るのである。ひとり孤立して十字架上で殺された人物はそのような形で、名誉を回復することが暗示されている。まことにこれはエピグラフにある「一粒の麦、もし地におちて死なずば、ひとつにてあらん。もし死なば、多くの実をば結ぶべし」を受けた文言なのである。

「永遠に女性的なるもの、導き手われらを高みに上らしむ」で終わる『フアウスト』はもちろん優れた著作であるが、ゲーテとは比較にならぬ苦労人だったドストエフスキーは『悪霊』で触れているように、『フアウスト』を少なからず甘い教養主義の作品と考えていて、『カラマーゾフの兄弟』ではイワンが幻視する悪魔に悪魔メフィストテレスの名を挙げて批評させている。またワインバーグはチェルノブィリと冷戦の終結は知ってはいたが、予言はしていたがフクシマを実際には知ることなく逝った。苦労の度合いも日本の古川の方が大きかったと思われた。米国ではスリーマイル以後原発の建設は禁じられたのに対し、日本はそれを奇貨として建設ラッシュに入り、今世紀にはいるや原発ルネッサンスを口にするまでに至っていたのである。悪魔の跳梁の度合いはより大きかったのだ。私はそのような観点で『トリウム原子炉革命――古川和男・ヒロシマからの出発』を執筆した。

　『ヒロシマわが愛』と『愛人』の作家デュラスは、日本の女性研究者のインタビューで、「忘却もまた記憶の一種です。その説明をするのは非常に難しいけれども」と語っていた。私には樺太の故郷の村での、混血の年長者にかかわるヨッポイマツの記憶の喪失があった。書かれなければならない樺太とはその一語に要約されるのだったが、その記憶の回復があったのは一九七〇年代、四十に近くになってのことであった。しかしその後も、ソ連に係わって生活してきていて、その国がやはり崩壊に向かいつつある、と確認されるようになるまでは、書けなかった。あなたとのことは、すでにその本のなかで紹介してあったのだけれども、そのことを含め、すべては西北大露文科に進んだからこそ成ったのだった。こうしてまことに遅まきながら書き始めることになり、雑誌連載したので活字にはなってはいるのだが、単行本はなっていない『松尾隆』を含めると八冊目ということになるのだが、系列としては理系ということになるかもしれない本を執筆して出した。

この間、勉強の過程で私は或る変容を蒙ることになった。古川和男が賞賛し、その著書の一つを翻訳している米国初代原子力委員長のリリエンソールは、邦訳されているものは全部読んだわけだが、大戦中、連合国としてソ連に肩入れしていた人物たちを、「自由がない国」であるということで冷淡だった自分と比較して非常に教えられた。すなわち同じ人物たちが、ソ連が核爆発に成功すると、ヒステリックな冷戦遂行者に変じたのであって、それに対してリリエンソールは「そんなに危険な国ではない」とたしなめ、「容共」と攻撃されたのである。その者たちが、核兵器に有用なプルトニウムをもたらすということでウラン原発（軽水炉）を押し立て、それを産しないことで安全はトリウム原発を弾圧したのであり、リリエンソールは冷戦に反対し、後者を擁護したのだった。こういう人物はソ連にはいなかったと思われた。

この体験は「アインシュタインとドストエフスキー」という、その存在を知り意識してきながら、わが手には余る問題として先送りしてきた問題に私を向かわせることになった。し　　　かしそれは人工透析の生活にはいってから三十年になろうとしていたあなたの骨髄の、造血能力に衰えがみえはじめた時期と重なることになった。

フクシマの年の年末、古川博士の葬儀に向かう私を、「わたしからも「よろしく」申し上げてください」と明るく言って送り出している。私は遺棺のお顔に手を合わせ、後ずさりしてもう一度前に進み手を合わせた。

それから二年して本が出ることになって、私は帯に、学部学科は異なるが、松尾隆教授との関係では兄弟子ということになる、元日本原水協代表理事、平和事務所代表の吉川嘉清氏から推薦文をもらった。その一部は新聞広告にも出したものだが、それを見てもあなたはいかなる感慨をも覚えないようだった。

二〇一五年近くの総合病院に入退院を繰り返しつつ、八月、盆を家で過ごすべく帰宅したが、容体が悪化して病院に戻った。八月二九日夜半に死去。八十八歳だった。長男の四歳十か月の死から数えて四十八年、私と、当時一歳に満たなかった次男にそれぞれ片手を握られながら静かに息を引き取った。出会ってから五十六年目のことだった。

**中章　アインシュタインとドストエフスキー**

調査と研究は本格的にはあなたの没年の年の初めから行われ、亡くなる頃にはほぼ終わっていて葬儀の後に執筆開始ということになり、十一月にドストエフスキーの会で報告。年末に原稿を提出、これが二〇一六年四月に、年一回の会報誌である『ドストエフスキーの広場』に前年度の報告文の一つとして掲載された。その全文をここに掲げよう。私のあなたへの思いの反映が在るからだ。

ペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』の拙訳本文は一九一二初版のものであるが、革命後の一九二二年ドストエフスキー生誕百年の記念行事で「ドストエフスキーと革命」という講演を行い、それをその年の新しい版に「（序文に代えて）」と記して冒頭に据えた。内容は『悪霊』論であり、マルクス主義の立場からこの作品を擁護したものである。そのなかに「同時代の人々は彼をほとんど理解せず、また理解できるはずもなかったが、それは彼の視力があまりにも強大で、しかるに盲人には目明きが理解できないからである」の文言がある。

知られているように、『悪霊』は雑誌連載中に編集者が「スタヴローギンの告白」の章の掲載を強く拒否したために、中断後、これを除外して継続され完結した経緯があった。ペレヴェルゼフはそれを知らずに『創造』の本体を執筆していて、一九一七年の革命成功後、自身が中心になってドストエフスキー文庫を開き、夫人宛ての手紙を編集出版、また保存されていた「スタヴローギンの告白」を初めて読み、『悪霊』の認識を深めた。また革命後の現実に触れて、ドストエフスキーが革命の否定的側面を予見していたことに驚いた。それらのことが「ドストエフスキーと革命」には反映した。しかしまさにこの論文が、後に、二十年代末にスターリン派の忌避に会い、「失脚」の原因となった。彼は三十年代以降文学界からは消え、ロシア古代文学の研究に向かい、一九六八年に没している。彼以後ソ連では文学内容に触れたマトモなドストエフスキー論は現れてはいない。

作家レオーノフ（一八九九～一九九四）はその出発当初からドストエフスキーの影響を指摘されてきた人だった。戦前に『穴熊』と『スクタレフスキー』、また戦後に『ロシアの森』（スターリン批判後に新設のレーニン賞一位を受ける）が米川正夫らによって訳されているが、これは訳者が親近を感じたが故である。しかしレオーノフは、二十年代の『泥棒』および三十年代後半（大粛清期）の戯曲『吹雪』がドストエフスキーの悪しき影響として批判され、両作は戦後の選集に収録されなかった経緯があり、チェーホフ、ゴーリキーについて優れた評論を書きながらドストエフスキーに言及するのを避けてきた。

私は一九五二年の西北大露文の入学であるが、短いマヤコーフスキーへの熱中の後、長期にわたって捉えられることになったのはこのレオーノフであった。特に強かったのは戦時下の戯曲『襲来』である。独軍が入って来る直前に刑期を終え、ロシア西部の町に帰郷した主人公フョードルは、妹の恋人にして共産党の地区代表者であるコレースニコフにパルチザンへの採用を願うが断られる。コレースニコフのパルチザン活動は独軍を恐怖させるが、負傷し医師（フョードルの父）のもとに逃げ込むが包囲されて絶体絶命である。それを、フョードルがコレースニコフの名を名乗って救い、処刑される。

この作品は論議をよび雑誌掲載が危ぶまれた。作者がクレムリンのスターリンに直接電話を入れ、スターリンの承諾を得て掲載され、その後にスターリン賞一位を得た。このことを取り上げて蔵原惟人は「スターリンと文学」でスターリンが文学を理解していたことの証左とした。しかし私は主人公の情痴事件（女を殺そうとしたが未遂）が原因で刑に服していたとする設定が疑わしかった。私はその反スターリン思想が隠された真の原因ではなかろかと思ったのである。スターリンは前年の一九五三年に死んでいたが、フルシチョフらによるスターリン批判はまだ一年先の年のことだった。私はこの疑問を闡明にすべくレオーノフの露文全部を読むことになった。

レオーノフは一九五六年以降に晴れて公認の作家となった人である。一九六〇年のボリショイ劇場のトルストイ没後五十年祭での基調報告の栄は彼に与えられており、一九六一年一月のプラウダ紙には米国での核爆弾に対するシェルター騒動を風刺する映画シナリオ『マッキンリー氏の逃亡』を発表し、好評だった。かくて作家同盟機関誌『ズナーミャ』はレオーノフにインタビューを行い、四月号にそれが「作家の仕事」の表題で掲載された。そこで彼はアインシュタインのドストエフスキー愛好について触れて述べた。「二人の偉大な人物を接近せしめたものは何か、それは思想の方向の一致、実験を敢えてする能力だったのではなかろうか？　これこそは芸術の理論家にとっての大きなテーマである」「ドストエフスキーには人間存在の複雑さを伝える力があった。彼は肉眼では補足しえない赤外線と紫外線を持っていたかのようだ。彼は在ったことだけではなく、在りえたかもしれないこと、すなわち人間関係の極端にして極限的な表現を行った。びっこ女とのスタヴローギンの結婚のごときは現実には有りえなかったのである。彼女の姿、その皮膚を想像してみたまえ、さっぱりした白地の服を着こなした貴族の坊ちゃんであるスタヴローギンが、そのような女に手を出すようなことは在りえなかったはずである。しかいドストエフスキーには、スタヴローギンの崩壊の表現として、彼ら二人の親密な関係が必要だったのであり、彼はそれを創造したのだった」。ところでアインシュタインであるが、一九〇五年の特殊相対性理論および一九一五年の一般相対性理論はソ連でも支持され、一九二二年の来日時には、ソ連科学アカデミーは名誉会員に迎え、ロシア革命を支持していたアインシュタインはこれを快諾している。しかしその後にスターリンの一国社会主義の確立があり、ソ連共産党内のユダヤ人党員への迫害があり、アインシュタインは忌避された。第二次世界大戦後、アインシュタインがラッセルと組んで行った世界政府樹立の提案、反核兵器のパグウォッシュ宣言などにはソ連は異義を唱えており、批判と反批判の応酬があった。スターリン批判後にこれが改善されたのであって、アインシュタインとドストエフスキーはパラレルの関係にあったといってよい。したがってレオーノフの発言は非常に斬新だったのである。

レオーノフは一九六二年に来日し、私は会社員になりソ連貿易部門で働いていたが、機会を得て会っている。私は寂年の疑問を述べ、氏は「改作中なのでそれを見てほしい」と答え、一九六三年にそれを読むことになった。それにより私は積年の疑問が正当であったことを知ると同時に、新たな疑問に直面した。改作版は前作よりも感銘の度合いが薄れていたのである。同様なことが、私が劇団民芸の依頼で訳した戯曲『金の馬車』の改作版でも生じていた。私はレオーノフを読むのを止めた。それはソ連文学との別離でもあった。

私は南樺太の生まれであり、ソ連占領下で一年半暮らして引き揚げている。その体験はまだ樺太に在った当時から書かなければならないと考えていて、そのために露文科などに進学していた。そして私は八十年代に入るころにはソ連の崩壊は避けられないと考えるようになり、そのような立場で長編小説『樺太よ遠く孤独な』を執筆、一九八四年に上梓した。また続いて一九八六年、一九五九年夏のウィーン平和友好フェスチバルの日本代表団で日本被団協代表だった妻との出会いから結婚に至までを『ヒロシマまでの長い道』にまとめた。ところがこの刊行は或る事情から一〇八九年にずれ込むことになった。

西北大露文科教授に松尾隆がいた。戦前は木寺黎二のペンネームで『ドストエフスキー文献考』を著し、またシェスト三巻選集の翻訳スタッフだったが、戦後はマルクス主義哲学の啓蒙家、平和運動家、学生運動の助言者として働き、一八五六年に四十九歳で亡くなっていた。その三十回忌の行事の過程で一連の遺構が発掘され、その中にドストエフスキー関連のものがあった。ペレヴェルゼフの処女論文『ドストエフスキーの創造』の未完かつ空白部の多い翻訳であったのだが、この結論に到達するまでに私は一年を要している。ようやく特定でき翻訳しなおして出版社がみすず書房に決まって、一九八九年に『ドストエフスキーの創造』を公刊した。

一九一二年、帝政ロシアの反動期のマルクス主義的ドストエフスキー論、一九三四年当時全十八章のうち断片的に三つの章が翻訳されながら、全貌が明らかにされていなかった論文を、ソ連の崩壊が迫りつつあった年に公表したのである。松尾が放棄したのは、訳書の解説に記したように、ペレヴェルゼフが「批判」されて闇に葬られていたからだった。また岡沢主任教授が、戦前自ら翻訳した論文を戦後自著に自身の論文として収録したことも関係していた。全訳して公刊する場合には、そのことに触れざるをえず、後輩としては逡巡せざるをえなかったのである。

私の妻は大分市の生まれ育ちであるが、たまたま広島市に滞在していて爆心地から一・三キロ地点で被爆、救出されている。長子がファロー四兆症という重症の心臓障害をもって生まれ四歳十カ月で逝くということがあったが、当人は普通に健康だった。これが一九八四年からがんのために連続して両乳房を失い、片方の腎臓にもがんが発見されて一九八五年から人工透析の生活に入った。また血圧の関係で一時一人では通院できなくなり、国外出張の多い私のサラリーマン生活にも支障が生じた。以後私を支え励ましてくれたのは、微笑んで立つ長子の励ましの言葉だった。こうして私は『微笑の沈黙』（一九九六）を書いた。

もっとも「微笑の沈黙」は松尾隆も同じだった。私は教授のドストエフスキーを知る没年最後のただ一人の学生だったが、ペレヴェルゼフの名はまったく聞いていないのである。もしも聞いていたならば私はその書と次作の『ゴーゴリの創造』は六十年代の初めには訳しており、ロシア文学者になっていた。伝達が成されなかったために、私の人生は現にあるようなものになった。教授は昭和十年代の『西北大文学』誌でも同時代の日本文学の評論家としても活躍しており、その紹介と評価を、私は一九八八～二〇〇一年に制作発行された『西北大・一九五〇年・史料と証言』全六冊に連載して行った。

チェーホフは一八九〇年委サハリンを訪ね、帰国後『サハリン島』を著したが、そのなかで「サハリンの処女探検お権利は疑いもなく日本人委属し、日本人が最初にサハリンを領有したのである」と記している。シーボルトの『日本』に依拠したものであることは疑いなかったが、二〇〇二年になってその露訳を調べていて、帝政政府の検閲で日本人の業績が削除され、地図の製作者名まで改ざんされていることを発見した。つまりチェーホフはそれに気づき独語原書に当たって執筆していたのである。この結果日露関係史の全部が闡明できて二〇〇三年に『日露領土紛争の根源』、またペレヴェルゼフの翻訳との関連で二〇〇八年に『ドストエフスキーとは何か』を上梓。後書の最終章でアインシュタインに言及、彼がイワン・カラマーゾフの非ユークリッド幾何学に言及していることに触れた。そうこうしているうちに二〇一一年にフクシマが起こったのである。

大分市は瀬戸内海に面しており、少し海に突き出た土地に佐賀関と呼ばれるところがあるそこに日本興業という会社の精錬所があり、その所長古川氏は大分市中島町に家族を住まわせていた。わが妻の生家とは斜め向かいであり、家族同士の付き合いがあり、長男の和男氏とは同年生まれ、中島小学校では同期だった。（ついでながらこの学校の先輩に村山富市元総理がおり、その兄弟とも彼女は懇意だった）。古川家は戦後数年して大分県を去り京都に移り、わが妻は一家のその後の消息を知らなかった。ところが長い別離の後、一九八七年になって弟の雅章氏が拙宅を訪ねて見え、京大の化学科に進んだ長兄の和男氏がトリウム熔融塩炉なる原子炉の研究に従事していることを聞いた。現行のウラン固体燃料炉（軽水炉）とは著しく異なって副産物として有害なプルトニウムを産しない、事故に際しても安全なものであるということだった。また一九九九年に雅章氏に案内されるようにして当の和男氏が来客。その二年後の二〇〇一年には、それまで国内外の専門誌に論文を発表してきた氏の、初めての一般読者を対象とした啓蒙書『「原発」革命』が文春新書の一冊として世に出、妻は贈呈されていたが、私は開いてみようとはしなかった。所属する市民平和運動の団体、平和事務所の一員として、チェルノブィリを訪ね、またバルト三国の被ばく者と医師の広島・長崎招致に従事していたにもかかわらず、だった。もっとも妻のほうは和男氏を支持していて、フクシマ後、増補改訂版の『原発安全革命』の新聞広告が出たときには、歓声を上げて買い求めてきた。私も気になっていたので、それを取り上げて読み、のめり込むことになった。

著者である古川和男氏とはこの年三度お会いし、語り合った。当時すでにがんに冒されていて一二月に他界、私は氏の業績について著作を目指すことになり、三年を要し、未刊の『松尾隆』まで含めると八冊目となる本『トリウム原子炉革命――　古川和男・ヒロシマからの出発』を著した。私はこの過程でアインシュタインとドストエフスキーを同時に対比して考える体験をした。

特殊相対性理論から出てきた学的結論に物質のエネルギーへの転化があり、その量は質量と光の二乗の積に等しい。すなわちE=mc2の発見である。これに基づきジョリオ・キュリーが一九三九年に、ラジウムを用いて核分裂とその連鎖反応によるエネルギー取得に成功。第二次世界大戦が始まり、ナチス・ドイツが原爆を開発しようすることを怖れた二人の亡命核物理学者、すなわちウィグナーとジラードが、やはり米国に亡命中だったプリンストン高等学術研究所のアインシュタインに頼り、その署名になる原爆製造を求めるルーズベルト大統領あての書簡が作成される。テネシー州の荒野の一角オークリッジに研究所が作られ、ウィグナーがその初代所長になり原爆が製作され、西部のニューメキシコ州の砂漠で実験される。この時目標としていたドイツはすでに降伏、日本のみがまだ抗戦していて、アインシュタインは反対だったのだが、日本に投下された。

原爆に使われた原理は発電にも利用できるものであって、ウィグナーは、それはそれまでの工学的なものとはまったく異なって化学にラントとなるべきだと予言、所長を弟子のワインバーグに譲り、このワインバーグが熔融塩炉の基礎を築いた。また使用物質は有害なプルトニウム（長崎に使用）その他の放射性廃物を産生するウランではなく、無害かつ世界で多量に産する（したがって安価な）トリウムが選ばれていた。ところがまさにこの長所が、冷戦に利益を見出す政産軍複合体の忌避するところとなったのであり、米国においては弾圧され陰謀をもって葬られたのである。

その研究は日本人古川和男によって引き継がれ継続され、ついに一九八〇年ＦＵＪＩ（不二、富士）として完成される。大きな関心を惹き起こしたが、米国におけると同じ理由によって、日本の核武装を予定している勢力によって隠微に葬られた。平和的かつすべてにおいて優れた原発が陽の目をみなかったのであって、古川和男は『原発安全革命』のなかで己の業績について「人間社会のさまざまな動きの中で、ときには不当な扱いを受けることがある」と嘆いた。

この言葉は『カラマーゾフの兄弟』の序文の「奇人」についての定義を想起させた。すなわち「奇人こそが時によると全体の核心を自らの内部に蔵し、逆に残りの人々が、ある風の吹き廻しによって、ひとり残らずなぜかその奇人に背を向けるといった場合がある」云々のキリストを念頭に置いた文言である。古川和男が講演で人類と世界の救済を訴えていただけにそうであった。旧ソ連のアインシュタイン学者クズネツォフは、ドストエフスキーについて「簡単に規定することのできない、ある雰囲気を通じて影響を及ぼしてゆく」と述べている。まことに『カラマーゾフ』の「奇人」は古川和男にぴったりだった。こうして私は『トリウム原子炉革命――古川和男・ヒロシマからの出発』を完成したのであるが、その後に課題となったのは、その邦訳があることを知りながら、読まずに過ごしてきたこのクズネツォフ（一九〇三～？）の『アインシュタインとドストエフスキー』であった。

クズネツォフには大小取り混ぜて四冊の著書があるが、ソ連での公刊の順に記すと次のようである。

1. 『アインシュタイン』一九六二。邦訳（上下二巻）一九七二。

全三十章の大著、八番目（数詞は振られていない）の章に『ドストエフスキーとモーツァルト』の章がある。邦訳は第三版による、三版を重ねる。

1. 『アインシュタインについての試論』一九六五　露文、未訳

刊行年は①よりも遅いがすべて①以前に執筆のもの。五十年代末から六一年までの間に諸雑誌に発表された六編を集めたもの。これらを基礎に大著である①が執筆されたのである。ちなみに第一編は「アインシュタインの世界観と相対性理論」、第二編は「エピクロスとルクレツィー、ガリレオとアリオスト、アインシュタインとドストエフスキーについての覚書」というもので、このなかで初めてアインシュタインのドストエフスキーに言及した書簡の文言が紹介されている。したがって先に掲げたレオーノフの一九六一年の言葉はもちろん、一九六五年刊のバフチンの『ドストエフスキーの詩学』の「結び」の章の最後でのアインシュタインについての言及は、クズネツォフのこの最初期の論文委負うていると見なされる。すなわち同時期に刊行が開始されたアインシュタイン露訳全集の訳者にして三人の編集者の一人だったクズネツォフこそがパイオニアであり、ケドロフの『詩的宇宙』（一九八九）もまた然りである。

1. 『アインシュタイン　生涯、死、不滅』一九七六　露文お最大の著、未訳
2. の全三十章は各章に題辞があり、表題を有するものであるが、全体の通しの番号が

無い。これは相対性理論の業績が、アインシュタインの世界観、哲学、人格と不可分と著者が考えたためであって、それなりの成果を挙げているのであるが、評伝と業績が混濁した印象を与えかねなかった。個々それぞれの主題では②のほうがすっきりした形を成している。この書の「序文」には、「物理学の未来との関係」について加筆する必要から、構成をまったく変えることになったと述べられており、増補改訂とはいえない新しい本とみなされる。すなわち先の本では全三十章だったものを「生涯」の編に十九章、「死」の編に三章、「不滅」の編に四章、合計二十六章にまとめて記述した。ただしこれに加えて別に「パラレル（対比）」と題した部を設け。七つの章を収めた。表題は全部が「アインシュタインと〇〇〇〇」といった具合に〇〇〇〇に対比される人物を収めたものである。その人物とはアリストテレス、デカルト、ファラディ、マッハ、ボーア、ドストエフスキー、モーツァルトの七人である。もちろんこれらの人物たちは①の『アインシュタイン』にも有ったものだった。しかし努めて本文から外し、これに収めたのである。もっとも『アインシュタイン』においてもっとも頻繁かつ多大に登場しているのは一位にスピノザ、続いてニュートンだった。この二人を除外しては、評伝は書けなかった。このため二人は本文であるところの「生涯、死、不滅」の中に収められて、ここには登場していない。

　クズネツォフのアインシュタインへの敬愛は比類のないもので、「死」「不滅」の章名は『アインシュタイン』にもあったものだった。しかしこの新しい本、著者が最終版と考えていただろう版においては、その思いはもっと昂じ、人類の救済者、新しい宗教の創始者もしくは教祖の地位にまで高められている。それをもっとも強く現しているのが、「生涯」の最初の章の表題である。なんとそれは新たにラテン語で「Ecce　Homo　(この人を見よ)」と記されているのである！

『アインシュタイン』において一つの章に収められていたドストエフスキーとモーツァルトが分離独立せしめられ、それぞれ別な論文にされていて量的にも倍以上になっていることが注目される。加えて著者はこの二つについて「読者に格別な教養を要求する章である」とことわっている。読者に物理系の人々が多いであろうことを予想してのものであろうか。ともに非常に魅力のある章であって、この二つだけでも邦訳し一緒に出したいという欲望にかられる。双方ともに日本では愛好者が多く、また双方について著作がある日本の批評家が想起され、ともにこの批評家の弱点を明るみにする内容のものであるだけに、なおさらそうなのである。しかしその内容が本文と固く結びついていてこれだけを分離するのが不可能で残念である。世界中の多くの言語に翻訳されており、全文の邦訳が望まれる。

　「ドストエフスキー」についてだけ触れると、これまで全く言及してこなかったキェルケゴールとサルトルへのドストエフスキー把握への批判的言及が見られる。すでに『アインシュタイン』に強くみられているが、また控えめにしか表していないが、クズネツォフはマルクス主義者であり、アインシュタインとドストエフスキーの架橋の試みの基礎にあるのはレーニンの『唯物論と経験批判論』と『哲学ノート』である。それらに有るマッハとカントの観念論への批判が、アインシュタインのそれと一致していることの確認が、彼にこの対比の論文を書かせたのである。

1. 『アインシュタインとドストエフスキー　十九世紀の主たる倫理的・美学的問題と

現代物理学との関係にかんする研究』１９７５年、英文より重訳

　一九八五年ロンドンで③と同年に出版、②よりも小著。③の「アインシュタインとドストエフスキー」よりも量的に小さく、内容も相当に違う。問題は③と比較してどちらが先に執筆されたかということである。私は内容を比較して、④は③の後に書かれたと考える。量的には小さいが、これが一九五七年頃に初出と推定される著者の「アインシュタインとドストエフスキー」の合計三編の到達点とみなされる。

　　その理由は、それまでの三つの「アインシュタインとドストエフスキー」においては、前者が主、後者が従の関係にあったものが、対等の関係に進み出ているからである。例えば④では高らかに宣言されているのだ。「ドストエフスキーをアインシュタインの目を通して見、アインシュタインをとドストエフスキーの目を通して見るというということに仕事を絞ってきた。このようにすることによって、二人の人間の或る特徴がくっきりと浮き彫りにされてくる。われわれの仕事はいまや、ドストエフスキーの芸術的仕事の内容とアインシュタインの科学的仕事の内容を並列的に描き、それ以後におけるその発展を比較し、現代の科学と現代の生活における、そして可能なかぎり未来にまで及ぶ、その進歩の線を追求してゆくことである」（邦訳書28頁）。このような決然たる態度表明は④以前には無かったのである。

　　バフチンへの控えめながらの批判的コメント（同31頁）があるが、継承しているとみられるペレヴェルゼフへの言及が無いのは、その復権がまだ先のゴルバチョフ時代に入る直前の一九八二年のことで、この時期にはまだ「解禁」されていなかったからである。

　　アインシュタインがドストエフスキー関連で残したのは書簡のなかの渺たる二、三の言及だけで、別に論文やエッセイが有るわけではない。レオーノフであれば「自分の小説と戯曲がドストエフスキー論なのだ」と言ったであろう。彼にとって最大の関心事は物理学の領域の問題だった。その書簡の一つが「ドストエフスキーはどんな思想家より多くのものを、すなわちガウスよりも多くのものを私に与えてくれる」なのである。しかし相対性理論は非ユークリッド幾何学の成立なしには有りえず、またガウスが同郷ともいうべき南ドイツ出身の大数学者であり、アインシュタインが曲率の計算にその数式を利用したと伝えられるリーマンの師匠筋の非ユークリッド幾何学者であることを思うと、この言葉は非常に重いのである。そして世界にあまたいるアインシュタイン学者・研究者のなかでクズネツォフただ一人がこの問題に錘鉛を下した。それも科学史家としての出発点からそうだったのである。それはいかなる観点からであったか。

　　物理学と文学という異なったジャンルの間で共通な何かが起こったのである。もっともそうしたことは人類の文化の歴史において繰り返し見られてきた、とクズネツォフは主張する。古代ギリシャに原子（アトム）の名称の発明者であり、唯物論の祖と目され、アインシュタインがその人に同時代人を見出していたエピクロスがいる。その人物を賞賛して長詩を捧げた詩人にローマのルクレツイがいた。またその長詩に励まされた物理学者にガリレイがいて、またそのガリレイを理解して称えたアリオストの文学が存在した。私はクズネツォフの最初期の論文集②所載の論文のひとつについて述べている。その最後の方に、述べたように、「アインシュタインとドストエフスキー」が置かれているのだが、その結び近くで彼は言う。

　　「思うに、宇宙的かつ道徳的調和の探求の天才的芸術的擁護である文学（ドストエフスキーを指すーー引用者）に関する水が浸透するような綿密な研究が、アインシュタインにとって非常に重要かつ必要だったのである。それはまことに巨大なしみ入るような力を帯びた研究、ジャンルの境界をいとも容易に通り抜ける研究だったのだ」。そして締めとして次のように述べられる。「文化の歴史が可能なのは、歴史的改革の諸主体を貫き通して定義しうる、何らかの同一の基層の存在が有るからである。変化の概念は、変化しつつあるものを定義しなければ意義を失う。文化の歴史においては、遠く古代ギリシャの初めから、若干の共通する定義と特質が見出される。それらは変化するが、文化の歴史を連続する過程として、歴史的変化にも関わらず同一性を内包するものとして語ることを可能にさせるのである」。つまり大事なのは、異なったジャンルの基底に存するものの省察なのだというのである。エピクロスにとって物理学と倫理学は同じものだったのだ。

　　いわんやアインシュタインとドストエフスキーのように所属する文化のジャンルを代表する存在でありながら、同時にそれを超えているような存在については、ジャンル内だけの研究では不十分なのであって、互いに異なったジャンルから見る必要があるのである。クズネツォフのこの観点はますます発達して最後の英語版において絶頂に達している。もっともこの邦訳のある最後の小著を理解するためには、未訳のものを含めてクズネツォフの全部を、それも繰り返して読まなければならないのであるが。

　　アインシュタインは一七世紀のオランダの思想家スピノザに深く学んだ無神論者・唯物論者であり、絶対的権威を否定する民主主義者であり、クズネツォフは全作を通じてそのことを強調している。まだ若かった時分から冗談めかして口にしていた「神とは気体上の脊椎動物である」は、それをよく現す言葉として有名だった。宗教はキリスト教も、自身が属するユダヤ教も嫌いだった。「唯物論思想に真に帰依している科学者だけが真に宗教的である」（「わが世界像」）。

　　彼は一九〇五年の(1)特殊相対性理論

　　　(a)運動する物体の長さ……縮む（光速を超えると長さが虚数になる）。

(b)運動する物体での時間……遅れる（光速を超えると時間が虚数となる）。

(c)速度の加法……速度の単純和よりも小さくなる（光速を上限とする）。

(d)運動する物体の質量……重くなる（光速に達すると質量が無限大になる）。

(e)運動する物体のエネルギー……運動エネルギーのほかに静止エネルギーをもつ。

　および一九一五年の(2)一般相対性理論

　　　(a)重力場では光は曲進する。

(b)重力場では時間が遅れる。

(c)重力場では高速は遅くなる。

(d)質量をもつ物体が運動すると、重力波が発生する。重力波は高速で伝わる。

　によって世界的に有名になった。特に一八一九年のイギリス人による日食観測により(2)の(a)が証明されたことが決定的だった。

　　それは第一次世界大戦の終了による平和の時代の到来、またロシア革命が世界を揺るがせた時代でもあった。ロマン・ロランの反戦運動に加担していたアインシュタインはロシア革命とレーニン、新生のソ連に対しても好意的だった。一九二二年日本に招聘されているが、当時の日本にもアインシュタインとレーニンを同列に受け止める雰囲気が存在した（金子務『アインシュタイン・ショックーー大正日本を揺るがした四十三日』参照）。広範な日本人が率直に歓迎しており、その後昭和に入るとともに戦争に向かった狂気の日本人とは別民族であるかのようである。日本には非常に好ましい印象を抱いて帰国しているが、その彼が係わりをなしとはしない二発の原爆が広島・長崎に投下されて第二次世界大戦は終了した。

　　一九五四年に米水爆実験による三度目の核被害があり、これを契機に原水爆禁止の国民権運動が起こる日ソ国交回回復宣言の翌一九五七年ソ連は日本原水協の使節団（私が加わっていた）を迎え、首相がクレムリンで謁見する。同時期に世界青年学生平和友好フェスチバルが行われ、日本代表団の長崎の被爆者永田尚子のモスクワ・マネージナヤ広場でのスピーチはその姿とともに大きく報じられた。私はクズネツォフのこの時期、つまり最初期の論文にこの日本の反映を見る。「アインシュタインにおいては物理学の解決は道徳問題の解決と結びついていた。科学の結論は人々の生活に如何に影響を及ぼすか？　科学の進歩はヒロシマの人々に如何に償うか？　学問の進歩と人々の安全と幸せの調和の条件とは如何なるものか？」こうしてこの思想は大著『アインシュタイン』に引き継がれて「原子爆弾の悲劇」の章が書かれることになった。そしてヒロシマは最後の④の書でも繰り返されているのである。注目されるのは、これがドストエフスキーにおける調和の希求と同一平面で把握されていることである。

④の第一章の表題でクズネツォフはドストエフスキーの文学を、レオーノフに呼

応して「実験的リアリズム（の文学）」と命名して掲げた。しかしそれが調和を目指したものであることは明らかにされているが、実験の細部はかならずしも明瞭ではない。私が補足するとこういうことになる。

　全作品の中心に位置するのは小市民であって、社会での地位からくる精神的特徴は、上層への憧れと仮装への転落への恐怖であり、この二極のあいだでの動揺である。貧しく圧迫されているが、それからの出口を求めつつ、それが見出されずもがいている。その過程が極端にして、しばしば残忍、苛酷な方法で実験的に描かれている。第二作の表題にある（二重体および二重人、分身）の語がその特徴をよく伝えている。彼ら二重人は極端な場合には、二極分裂をきたして発狂し、己の幻影を見るようになり、精神病院に収容されるか、他者の庇護にはいる。それとは異なり、社会に反逆する我意の者は犯罪者になって収監され（『死の家の記録』）、忍耐して生きる温順な者（原型は『弱い心』）は神を信じる宗教狂人か僧職者になる。後の二者は生きてはいても死んでいるのと同然であり、語り手をつとめる二重人は「生きている人はいるのか！」と痛切に叫ばざるをえない。「我々はとっくの昔に生きることを止めてしまった先祖から、死んだまま生まれて来たのだ」（『地下からの手記』）。「野に生きている人はいるのか？―とロシアの勇者は叫ぶ。勇者ではないが、私も叫ぶ。しかし応答はまったく無い……」（『おとなしい女』）。「生きている人」とは意思と意識が調和した人であり、ペレヴェルゼフの考えでは、ドストエフスキーの時代にロシアには存在しなかったプロレタリアートである。

　『地下からの手記』は、誰もが指摘するように、それまでの文学活動の作家自身いよる哲学的総括であるが、意思と意識の分裂と相克が中心テーマであったことが表明されている。それを克服しての「生きている人」、すなわち調和的人間への到達が志向されている。したがって現状をよしとする「地下万歳！」を叫んだ直後に「ここまできて、まだ嘘をつこうというにか！　嘘というのは、いちばん良いのはけして地下ではなく、ぼくが渇望していながら、けして見出せない何か別なものだということを、二二が四ほどにはっきりと知っているからだ！　地下なんかくそくらえ！」と反転することになる。「何か別なもの」――それは調和であり、処女作以来の課題だったわけだが、この作品に至って初めて明確に哲学的に定義された。以後これを目指す極端な実験が『カラマーゾフの兄弟』に至るまで、手をかえ品をかえて延々と継続されることになった。

　その作中には貴族地主といった上層の人々も登場する。しかし彼らは精神（内部）において小市民であり、上辺に異なった衣装をきせられただけの仮装人間である。つまり上層の人間としてはきわめて例外的で畜種な人々である。ムィシキン、スタヴローギン、ヴェルシーロフなどがそうである。彼らがいかに本物の貴族地主と異なるかを知るためには、ツルゲーネフやトルストイなど正真正銘の貴族地主階級出身の作家たちが書いたそれらの人物と比較してみればよい。興味深く面白い人物たちではあるが、その人工性は免れえず、上首尾に描くためにドストエフスキーは作中に語り手を配置しなければならなかった。「私」の場合があり、三人称の人物の場合もあるが、いずれにせよドストエフスキーの独走、革命といってよい手法であった。そしてこれによってペレヴェルゼフのいう「強大な視力」、レオーノフが言った「赤外線、紫外線」等の普通の肉眼では見えない世界が開示されたのである。またそれによって、埴谷雄高やジラールが述べたように、後代である二十世紀が超ええなかった高峰となった。

　アインシュタインにおいては絶対的空間また絶対的時間は存在しない。それらはともに相対的であり、また空間なしの時間はなく、その逆もまた同様である。世界は空間の三つの点（もしくは線）と時間からなる四次元のものとして、それらが無数に共存しているものとして存在している。つまりそれ（ら）は肉眼では見えず、心眼に依らねばならない。クズネツォフ派アインシュタインとドストエフスキーを結びつけるものをではなく、環および心理的なものとして説明している。私の見るところでは、アインシュタインは四次元の心眼でドストエフスキーを読んだのであり、その文学に相対性理論を必要としている精神を見出したのであり、己が鼓舞されるのを感じたのである。

その同時代人のフランス人に相対性理論を「時間と空間のアマルガム」と非難し、一書を著したベルグソンがいた。アインシュタインは「時間があって空間がない」とその片手落ちを批判した。要するにベルグソンは肉眼で氏かものが見えない観念論者だったのである。問題はこの人物をたいへんな哲学者と勘違いし、ドストエフスキーを執筆した日本の批評家がいることである。クズネツォフはこの人物を知らなかったはずだが、彼が描き出すドストエフスキーはこの日本人とはおよそかけ離れており、それ自体がベルグソン批判、アインシュタイン擁護となっている。

　アインシュタインのモーツァルト愛好を研究しながら、クズネツォフはモーツァルトが自身の創造の瞬間（に起こったこと）を説明できない、と語っていたことを知り、アインシュタインの物理学での同様な発言（文章として残っている）とを結びつけた。また彼は、プーシキンが自作『オネーギン』について「タチヤーナがどうして（貴族と）結婚したのか、私には分からない」と語ったことに注目した。芸術家も物理学者も実験の過程で当初は想定していなかった結果に到達することがある。こうして彼はエンゲルスのバルザック論、レーニンのトルストイ論にも示唆されたであろうが、芸術家がしばしば意図に反した成就をしめすことに着目しつつ、「真の調和、真の実存」について、「ドストエフスキーはそれをわれわれに、アリョーシャ・カラマーゾフやゾシマの公認の正教のうちに見出せようとしたのだが、彼の詩学は、彼の描写の能力の全重量を天秤の受け皿の反対の受け皿に投じてしまったのである」（訳書79～80頁）と結論している。すなわちイワン・カラマーゾフの問いかけこそが、名うての無神論者、唯物論者だったアインシュタインの心を動かしたので、間違ってもゾシマやアレクセイであったはずはないというのである。

　クズネツォフが④を著した一九七五年当時米ソの核武装競争はまだまっ盛りで、核弾頭に最適なプルトニウムを副産物として産出することで米ソはともに原発にはウラン軽水炉を選んでいた。トリウム熔融塩炉は逆にプルトニウムを産しないことでともに斥けられていた。したがって④にはスリーマイル（一九七九）、チェルノブィリ（一九八六）はともに反映されていない。私は『樺太よ遠く孤独な』（一九八四）でソ連の崩壊を予想していた者であるが、そして崩壊はまことに起こるべくして起こったのであるが、チェルノブィリはそれを促進したと見る。レオーノフもクズネツォフも生涯の最後にそれを見たはずなのだが、このころはまだ予想していない。

　アインシュタインとラッセルが提唱し、日本からも湯川秀樹が加わって発足した反核兵器のパグウォッシュ会議は、二〇一五年一〇月五十四か国が参加してその第五一回会議を長崎で一週間にわたっておこなった。そのポスター「核兵器に使われる恐れがある世界の核物質データ」によると長崎で使われた分離プルトニウム（外に広島の高濃縮ウランがある）だけでその保有量はロシアが一七八・〇トン、英一〇七・二、米八九・三と核兵器保有国が続き、四位になんと日本の五七・一が登場している。ちなみに中国はすでにトリウム熔融塩炉に着手しているが、わずか一・八トンであり、日本の蓄積を、核武装を目指しているものとして警戒している。

　フクシマ原発事故のうちの一基はこのプルトニウムを使用しており、現行の原発を続けるかぎり、プルトニウムの産出は止まず、他の核廃棄物質とともに世界各国が地中に埋めつつある。日本も青森県六ケ所村にその施設を建設している。地中三百メートルの場所にガラスで防御して治め、はるかに後代の人類に渡すのだそうである。この状況を一語で表す言葉として私が思いつくのは「地球はその表皮から中心まで人間の涙でびしょ濡れになっている」である。

　これはイワンの言葉であり、クズネツォフがドストエフスキーの中心の思想として繰り返して引用しているものである。ドストエフスキーは今日の状況まで洞察していたはずはないのだが、その「実験的リアリズム」の方法はかかる言語表現にまで到達していたのである。そしてその後の二十世紀の作家でこれほどすごい言葉を記した人は皆無であり、あまたのドストエフスキー論者のなかでクズネツォフ一人だけがこれを取り上げた。

1. を繙く人は冒頭の「はしがき」の章に「彼（（故王）は完全な意味で人間だっ

た」という『ハムレット』による題辞を見て驚く。クズネツォフはこの父王の位置にスピノザを、ハムレットの位置にアインシュタインを置く。二世紀に及ぶ衰退（「この世の関節ははずれたわい」）の後に、若きアインシュタインは己がスピノザの調和を復活せしめる運命を担っていることを自覚した（「ああ、なんという因果か、おれがそれを正す運命に生まれて来たなんて！」）。①の後半「相対論、量子、統一場理論」の章のなかでクズネツォフは言う。「調和の理想はスピノザの世界、互いに作用しあう物体の相互的、相対的な運動が起こる統一的な世界である。アインシュタインはこの古典の理想を復活し、一七世紀に発見された相対性原理を一九世紀に発見された新しい現象に拡張した。「この世の調和（関節）」は復活された。しかし最初に復活されたのは、慣性運動についてのものだった（特殊相対性理論）。きわめて大きい知的緊張の結果、アインシュタインは世界像から絶対的な加速運動を取り除くことができた（一般相対性理論）。しかしそれ以上進むことはできなかった」。「科学のなかには、電力場と重力場のなかに、世界の理想的調和に反する相違が残っていた。他方では、素粒子の運動の中に、世界の理想的調和の最初の図式に収まらないような特性が見出された。この図式から脱落したニュートン力学ばかりでなく、調和を復活させたアインシュタインの力学も、位置と速度が初期条件と相互間の相互作用で定まる粒子の連続的運動から出発する。しかし二十年代には、粒子の位置と速度が、一般的にいって、次のどの瞬間にも、限りない精度をもって決定されるものではないことが明らかになったのである」。

　こうして没年まで三十年におよぶ統一場の理論の探求が始まるのであるが、それは普通の意味では実を結ばなかった。アインシュタインは告白する、「重力理論（一般相対性理論の別名――引用者）が完成したときから四十年が経過した（二〇一五年現在では百年ということになるこのーー同）。この四十年はただ一つの努力――重力理論を一般化し、物理学全体の基礎となる能力をもった場の理論を創りだそうという努力――に完全に捧げられた。同じ目的のために努力した人は沢山いる。現れて私に希望を抱かせたものの多くを私は放棄しなければならなかった。しかし最近の十年で、私は自然で、希望のもてるように思われる理論が得られた。しかし私は、この理論を物理学にとって貴重だと見なすかどうかという質問に答えることができない。この不確実さはすべて非線型場の理論に不可避な打ち克ちがたい数学的困難と関連している」。そして困難を縷々説明して最後にレッシングの言葉を引用している、「真理を探し求めることは、真理を持っていることよりも素晴らしい」と。

　クズネツォフはこれを受けて言う。「科学はその発展の各段階で、発展の内的な力、遺産として次の時代に伝えられる問題を組み入れる。その時代にはしばしば認められないもので、次の時代に明らかになる矛盾、現在は存在しない証明を将来に持っている仮設、これがその時代の科学的理論を次にくる科学の発展に結びつける結び目である」。「統一場の理論は科学のなかに非常に強力な傾向を持ち込んだ。それは理論物理学を相対論と量子論のアイデアの総合へ、種々異なり、今はまだ関連がなく、ときには互いに矛盾しあい異なっている場にかんする諸観念を総合へと押しやった。この意味で、統一場の理論は科学の主流のなかにあった」。アインシュタインが示した「真理を求める努力」は豊饒な未来を約束している、と彼は説くのである。

　幼少期に新旧聖書の荒唐無稽に愛想をつかし、スピノザに学んで無神論者として生き、晩年にはプリンストンの自宅にはガンジーの肖像画を飾っていた人だった。「神」の語は「自然」の雅号だった。そのアインシュタインが、大天才となって後、人生の後半での学的苦闘のなかで弱音ともとられかねない言葉を残している。「神がサイコロ遊びをするとは思えない」はまだしもであって、統一場の理論に関連して「今度も道に迷ってしまった」と嘆き、「神は狡猾である。しかし悪意はない」を繰り返し、「そうはいっても神もいくらかは悪意があるかもしれないじゃないか」と陽気にではあったが嘆息をもらしたとも伝えられている。

「私はいま『カラマーゾフの兄弟』を読んでいます。これはいままで手にしたなかでもっとも素晴らしい本です」云々の手紙が書かれたのはこの時期のことで、前後に統一場の理論の苦労とベルリンでのナチズムの圧迫の訴えが挟まれた文言なのである。すなわちアインシュタインは、神の有無をめぐってのイワン・カラマーゾフの苦しい探求に他人事ではないものを覚えたのだった。

『悪霊』のキリ―ロフにおいて神は存在しないと結論した人物を描き切ったドストエフスキーにとって、問題は神の子にして人、つまりは神人であるキリストにあった。これについてのドストエフスキーの結論は、もっとも若く、したがってもっとも未来に接近している少年クラーソトキンである、というのが『ドストエフスキーとは

何か』において私が記した結論だった。「キリスト教なんていうものは、下層階級を奴隷の状態に押し込めておくために、富裕な上流階級にほうししてきただけじゃありませんか。もし彼が現代に生きていたら、さっそく革命家の仲間にはいって、めざましく活動したに違いありません」。クズネツォフはこれには言及していないが、アインシュタインはここにドストエフスキーの衷心の思想を見たと信じている。

　原発はその建設に多額の資金を必要としてきた。フクシマによって危険が証明されたからといって止めるわけにはゆかないのは、廃炉のためにはもっと金が要るからである。銀行筋もすでに融資した金の回収が必要である。したがってその先に第二第三のフクシマがあろうとも原発を続ける以外にないーー経済産業界のこの思惑が安倍内閣を誕生せしめた。己の資本主義的な利益のためなら文明を消滅せしめてもよいという思想が存在しており、世界は危機に瀕している。古川和男は地球の救済を訴えていた。

　差しあたってプルトニウム増産の道を立ち、核武装と核戦争への道を閉ざさなければならない。いったいどうすればよいか。

　古川和男博士の理想の継承者である(株)トリウム・テック・ソリューションは現存するウランReactor(炉)内に小型のトリウムReactorを設置することによって、Reactor内でプルトニウムを消去するR in R の技術を提案している。そしてこれさえも容易に受け入れない日本を見限り、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）の機関であるノルウェーのハルデン原子炉と契約を結びその実験政製作の作業に入っている。日本とは異なって核武装を望まずプルトニウムの処理に苦しんでいる諸国が支持してくれており、私たちは R in Rが日本に輸入されて利用されることを願いつつ、現存するプルトニウムをすべて消去し、すべての核兵器を消滅させようとしている。その先に安全にして経済的、かつ民主主義的なトリウム熔融塩炉の全世界的展開があると信じて。

　「すべての道はローマに通じている」という格言があるが、一九四五年八月六日および同九日以降ではーーすべての道はヒロシマに通じている。クズネツォフ氏はもちろん、アインシュタインもドストエフスキーも異存はあるまい。まことにこれこそが、「アインシュタインとドストエフスキー」という巨大なテーマの今日における展開なのである。

２０１５年12月31日執筆、『ドストエフスキーの広場』第26号所載　２０１６年４月発行。

**後章　トリウム熔融塩炉に向かって**

旧姓でいえば辛島和子だったひとよ、わが妻よ

　あなたが亡くなって墓に収め一周忌が過ぎたころのことである。静岡県焼津に住む小野田という人から書信を受け取った。あなたとの出会いであった一九五九年のウィーン平和友好祭で全学連代表の団員でありチェコのプラハ大に留学した小野田勇の兄にあたるひとからのものだった。顔は忘れているはずだが、あなたも彼には会っている。そして何よりもあの旅の全貌を記した私の『ヒロシマまでの長い道』には、大学での後輩として出て来る人物である。思いがけない人からの便りであり、数度にわたるメールのやりとりの結果次のような事実が判明した。

　父が戦死した母子家庭で、弟は西北大露文科に進んだが、一九五九年に「金のかからない留学だ」と言い残して、国際学連のルートで留学した、と母から聞いていた。当時自分は名古屋に就職していて詳しくは知らなかった。しかしある時期から数年おきに弟が来日し、その都度知らせて来たので会ったが、常に外国人と同伴していて、ゆっくりと話し合うことができなかった。自分の関心事はどういう経緯での留学だったのかということで、それを知るべく質したが、けして答えず、そうこうしているうちに本年初めにプラハで死去した。国際学連を通じての留学と母から聞いていたので、たまたま二〇〇八年に同学連の副委員長だった石井保夫氏の『わが青春の国際学連』が出ており、ネットで検索すると先生（私、瀬川修のこと）の長文の書評が目に留まった。また貴ＨＰから露文科で先輩であることを知り、弟をご存じではないかと思い、お尋ねするのである、ということだった。

　戦後学生運動が起こり、東大を中心とする官学連と西北大を中心とする私学連が一九四三年に合併して全日本学生自治会総連合（全学連）が誕生する。これが、直ちにあたかも当然のことのように加盟した国際学生団体に、ソ連の息がかかった本部をチェコのプラハに置く国際学連というものがあった。その頌歌の一番はーー

　　　　学生の歌声に若き友よ手を伸べよ／輝く太陽、青空を再び戦火で乱すな／

　　　　われらの友情は原爆あれど絶たれず／闘志は火と燃え平和のために闘わん／

　　　　団結かたくわが行く手を守れ

　歌詞も曲もロシア人になるもので、「原爆あれど絶たれず」とあるのは、その時期ソ連がまだ原爆実験に成功していなかったことを示した。しかい原爆所有後も変更されず、日本学生運動では愛称されていた。（関西ではそれほどでもなく、一九五一年の天皇の京大行幸の際には学生たちは日本製の「平和の歌」で迎えている）。

　世界青年学生平和友好祭はこの団体と、規模ではもっと大きい世界民主青年連合（ブタペスト）の共催で、隔年、社会主義国の首都を開催地として行われてきたもので、世界平和評議会（パリ）の会合に出席した大山郁夫は来賓として招かれて一九五三年のブカレストに出席しており、これが最初の日本人の参加だったはずである。

一九五九年のウィーンは、フルシチョフの「異なった社会体制の平和共存」の思想に基づき、初めて社会主義圏の外のＮＡＴＯに加盟していない中立国オーストリアに開催市を持ったものだった。

　時は移り、一九六七年ソ連軍のチェコ制圧により、国際学連は消滅し、石井はプラハを去り、西ベルリンの自由大学で教鞭をとり帰国していたことは、その著書に記されていた。しかし小野田勇は、チェコ女性と結婚していたのであろうか、ずっとプラハに留まって、東アジア関係の貿易期間もしくは企業で働いていたようだった。

　私は、その兄なる人には弟氏を知っていること、また作品『ヒロシマまでの長い道』』に一か所、固有名詞なしで出ていることを知らせた。また「金がかからぬ留学」だったはずはないこと、それも本には明瞭に記してあるので見られたい、と伝えた。その箇所とは次のようなものである。

　留学は彼ひとりの問題ではなかった。団の全学連グループには彼以外に、東ドイツとチェコへの二人の留学予定者がいた。空路で行けばいいものを彼同様に団に加わってきていたのである。ただしこの中で共産党が神経をとがらしていたのは名前の知られている彼だけだった。まことに日ソ協会の（共産党員の）Ｈ氏がいうように彼および彼のグループがしようとしていることは規約違反なのだった。それゆえに彼は団とともに帰る（帰国する）だろう。だがそのためには（国際学連の）Ｉ書記その他の関係者にそのことを打ち合え、了解をえておく必要があった。（以下、中略）

　（彼女と別れて男子宿舎に向かうと）建物の入り口では、打ち合わせを終えて戻った者たちと彼は鉢合わせた。そのひとりが血相を変えて彼に食ってかかった。こんな大事な時にどこに行っていたのかいうものだった。彼は返事をせず、自分のベッドに向かい、腰を下ろした。ふと見るとスーツケースがなかった。驚いていると、「気がつきましたか」とチェコへの留学予定者が言った。その話すところはこうだった。明朝の離団にあたって（日共系の）民青同盟が実力をもって阻止するかもしれないので、予定者の荷物を全部今日の午後にホテルのＩ書記の部屋に運んだというのだった。あまつさえその際に自分がやると民青の連中に疑われるので（日本から同行してきた）スジョーノに口をきいてもらって同じ建物の（同国人の）インドネシア人たちにやってもらったというのだった。（最終日の大行事だった）「太平洋沿岸諸国集会」に彼が出席していた間にこういうことがなされていたのだった。（一二二～三頁）

　こうしてあの夏、ウキーンで私は一度はあなたと別れ、団を離れてブタペスト経緯湯でプラーハに向かったのだ。そしてそこから空路、列車で東進する団を追うことになった。

小野田兄は最後に、留学の経緯にこだわる理由を明かしてきた。それは弟には出身の静岡高校での女友だちで文通していたひとがおり、「あなたは自分史を書こうとしているそうですが、僕には書けません。なぜならば僕の人生は「裏切りに続く裏切りの連続で、とうてい書けないものだからです」という内容の手紙を見せられた。それで弟がけして語らなかった留学の経緯に問題があったのではなかろうか、と疑うことになったからだというのである。

私は念のために、外務省に入りプラハ勤務の長い露文科の後輩に質してみた。「プラハには日本人はまだ非常に少ない時期でしたから、よく会ってビールを飲んだ仲です」とのことだったが、留学の経緯については語らず、私の名も口にしなかったとのことだった。そうこうするうちに母親の遺品のなから、石井保夫に対して送った問い合わせに対する返信と思われるものが出て来たと連絡があった。とすれば経緯は石井に問い合わせればよいのであった。いわんや石井は東大医学部では先輩であるブント書記長島成郎によって、その著『ブンド私記』（１９９９）の中ではでは「国際学連に派遣した」と明記されている人だからである。

そしてついでながら共産党との対決を強調したこの書においては、原水協と平和委員会は「日共寄り」と切りすてられており、私は主観的にはこちらに属していた。またあなたは第四回の東京での原水禁の世界大会でブンド全学連とは論争した仲だった。

　また島書には西北大のブンド派の代表者として露文科で二級後輩の片山由紀夫の名がしばしば登場している。私が子言葉を交わしたことのない人物で、小野田の留学に係わったのは、島によりトロッキズムの理論家と賞賛されているこの片山であるはずなのだが、ずいぶん前から「行方不明」と伝えられており、死去している模様であった。参考までにそのことも伝えておいた。

すでに『トリウム原子炉革命』の執筆が『ヒロシマまでの長い道』とその続編『微笑の沈黙』なしには起こりもせず、また成しえなかったものなのである。すなわちあなたとの縁で私が古川氏を知っただけでは不十分だったのであって、本では女主人公が大分市で一時時よく知られた女性が女主人公になっており、そのため大分市の新聞に報じられて、古川家の家人が知りところとなった。かくて和男氏も読み、おそらく拙宅に来ることになったはずなのである。また私のほうもそれらの作品の延長として、古川氏とその仕事をとらえることができたのである。つまりあなたについて書いていたので、フクシマ後の現在に繋がったのである

　自分の一九五九年の体験と生き様を一九八六年になって書き、そして書き上げたのである。しかしそれはだれに読んでもらうためだったろう。それは先ずだれよりも作品の冒頭に登場する「大学の学生運動の先輩」であり「原水禁運動の団格で要職」にある人物だった。名前は伏せられているが、松尾隆教授との関係では兄弟子ということになる吉田嘉清氏だった。氏に対して「彼」と三人称化されている私は、出国にあたって、「モスクワへの留学を目指して行くこと」を述べ、「その実現にあずかって力あった二人の全学連ＯＢの名」を告げていた。二人はともに原水禁運動とはかかわりがあった学生運動出身者であり、吉田氏もよく知る人たちだった。

　それから長い年月が経ち、私はかつて書いた自著を再読しながら、小野田勇の「裏切り」を視野に入れつつ作品を補足しようとしている。

　その二年前の一九五七年七月だった。原水協の訪ソ使節団の五人の団員各氏は、羽田空港ロビーで吉田嘉清の司会の下、新聞社のフラッシュを浴びつつ一人ひとり抱負を述べた。すべて年配者で、ただひとりに十代前半の若者だった私もまた最後に己のそれを述べた。それからゲートをくぐっていったのだが、その入り口にはレーニン平和賞が噂されていた安川理事長夫人の田鶴子さん、全学連幹部で東大のＫとＭが立っていて「しっかりやってきてちょうだい」、「がんばって来い」と私の手を握った。吉田氏が駆けて来て、電報を手渡した。書記長の高野をはじめとする西北大の友人たちからのものだった。私の青春のもっとも輝かしい一瞬のことだが、作品では省略されている。

　私は本の中で「それはすべきではなかった。しかしせざるをえなかった、そして、して良かったのである」と回想されることになった旅であったことを記している、つまり複雑に屈折した出来事だったので、書くことには何度も失敗し、そうこうするうちに初源である樺太の復活、その甦りがあって、それを書ききることをえた。ところがまだ本が出ないうちに、あなたが二度目の乳がんでついに両乳房を失った。検査の過程で腎臓にがんが発見され、片方だけでは生きられないことが明らかになって、年末に人工透析の生活に入った。加えて一年後には転移が疑われることになった。それらの諸事件の結果として書きうるものになった旅物語である。誤診であることが明らかになり、「命拾い」をして退院してきたあなたはその時の心境を告白している。「空なる心境にはなれなかったわよ。無、虚無だったわ」。

　古川和男氏の場合も思いがけなかったが、焼津からの小野田兄の問い合わせも同様だったのであって、私は全面的に再読して、結びに置かれた、しかし長く忘れていたあなたのこの言葉を見出して今日感慨に耽るのである。

　まことに本の主題は表題に掲げたようにヒロシマであり、あなただった。時代背景としては、ブント共産主義者同盟成立の翌年、六〇年安保反対闘争の前年である。しかしそれはまさに背景として描かれればよいことだった。小野田勇の「語りえない裏切り」もまたそれに属していた。すなわち友好祭の団には「全員一致して帰国する」という約束事があり、それを冒し偽って離団し、留学を果たしたのだったのである。一方私がそのことを書いている、書きえているということは、それを目指して出獄したのだったが、それを断念放棄して帰国したからである。そして年月を要したとはいえ本に記し、その兄の問い合わせに対しても、「どうぞ本を入手して見てください」と頁のナンバーを記して答えることができたことである。あの旅はあなたが居てくれて私は助かったのだ。

　年数がかかっただけではなく、思いがけなくも、松尾隆のドストエフスキー関連遺稿（ペレヴェルゼフ）の発見とその処理のため、発表が一〇八九年と三年遅れにずれこんだのだが、ブントの裏面史に光を当てたものとして、その先駆性も評価されたいものである。安保国会の突入にしても、島が「四、五人は死ぬかもしれない」と語っていたという風説がある。いずれにせよ一人の女子学生でも痛ましいのに、三、四人も死んだらどんあことになったのだろう。

　その題名から想起されるのは、それに先立つ安藤仁兵衛の『日本共産党私記』であるが、私に関係なしとはしない島成郎の『ブント私記』が出たのは、一九九九年である。私に対して十年遅れだったことでもあり、私は本屋で立ち読みしただけで購入しなかった。ところが『西北大・一九五〇年・史料と証言』製作時に収集した資料を、求められて大学の資料研究センターに収めることになり、老衰した吉田氏に代わり、保管先の吉田家で私がその処理をおこなった。その際に書き込みのある島書を見出し持参、しばらくぶりで目をとした。次に一文が小野田勇にも関係がありそうで注目された。

ブント書記長としての私の活動は多岐にわたらざるをえなくなったが、正直な話、最も苦労したのが金集めであった。闘争が思いがけない規模に一挙に膨張したため、闘争資金も十倍、二十倍も要求される。（略）金にまつわることは裏方によって行われるため「正史」には残らないのが常で（略）…　ただブント書記長として私が果たした最大の貢献はこの非公式の金つくりにあったことだけは証言しておこう。（略）私たちの「刑法犯」の犠牲になりながら愚痴ひとついわずに許してくれた方々におそまきながら感謝とお詫びを著すしだいである。（１０５頁）

ブントの幹部は概して短命で、島はこの翌年に、また中枢ではなかったらしいＫはその前年に亡くなっている。Ｍだけが存命で政治評論家として活動し、最近も共産党否定の文章を創価学会の雑誌に発表している。

あの団で初めて会ったのはあなただけではなかった。そのうちには『ヒロシマ』にも『微笑の沈黙』にも私たちの親しい友人として登場している当時は物理学生連合の会長にして全学連代表、後に高名な物理学者になった人がいる。大衆的には「火の玉」の解明で知られた学者だ。私とあなた、また彼と彼が好きだった女子大生の四人は、すでにソ連を横断する列車の中で親しく、ウィーンでは、彼の言葉によれば「実の兄弟姉妹のような関係」になっており、それは帰国、団の解散後も続き、今日に至っている。

物理学者はあなたの葬儀には海外にあって、「これが被爆者か」と驚いた初対面のあなたについて回想し、三〇年におよぶ人工透析に触れて「大変だったろうと思い、涙に暮れています」という長文のメールを送ってくれた。また帰国後には花輪をもって焼香にきてくれた。彼はＭには断固たる否定者である、それもなんとあの旅のシベリアの車中で話し、今も繰りかえしている批判なのである！　彼自身ごく近年までかなり長く共産党員だった人である、

多くの副次的事柄を省略排除もしくは簡潔な記述にとどめ、もっぱらあなたに捧げられた作品であり、それなりに完結している。したがって書き直す必要はないのではなかろうか。レオーノフの場合とは異なった私がしなければならないのは今日ただいまの問題、あなたに導かれて到達・開眼した古川トリウム熔融塩炉ＦＵＪＩについてであると言われなければならない。それこそがその後の『微笑の沈黙』を経ての私の到着であるからだ。いわんやこの核エネルギーの問題はあの六〇年安保前年の年にはすでに発生していたのであり、古川学は六〇年安保が何であったかだけではなく、日本と世界の戦後が何であったかを明らかにするものだからである。

人生では時として、短い時間帯に非常に大きな諸事件が重なり合って起こり、その後の人生がそれについて考えるためだけのものだけになる、といった時間帯というものがある。私の場合は一九五九年夏のウィーン平和友好祭の旅がそれであった。一九八六年にやっと書き終えられ、しかし一九八九年になって公刊した第二作が主題とした諸事件であって、表題にヒロシマが入るものである。それから二十五年たって、副題にではあるが、やはりヒロシマが入る作品を著すことになった。

この間私には次の仕事を何にしようか思案した時期がある。ペレヴェルゼフの次作『ゴーゴリの創造』の翻訳を手掛け、結局『ヒロシマまでの長い道』の続編としての小説『微笑の沈黙』に取り掛かかった。大分市のあなたの父上没後に母上を迎えて住むべく入手した持ち家だったが、それを放棄し、透析クリニックに歩いて行ける場所に転居することになった、その苦難の日々の物語で、一九九五年の公刊である。それを書き終えた直後に、所属する市民平和運動の団体、平和事務所の機関紙≪ピース・ピァ≫に寄稿した文章があることに思いあたった。そしてこれが、両作の理解に資し、いま何をなすべきかを指示するので、それをここに掲げることにする。

**ヒロシマとは何か**（１９９４・11）

ヒロシマについて書かれている思想的、文学的な文献はすでに多大である。しかしながらそのなかからもっとも重要にしてかつ根源的なものを一つだけ選ぶとすれば、それは大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』（一九六三―四）でもなければ井伏鱒二の『黒い雨』（一九六五―四）でもない。それは日本人によって書かれたものではない。それはベトナム生まれのフランスの女流マルグリット・デュラス（一九一四～）の映画のためのシナリオ『ヒロシマわが愛』なのである。

彼女はアウシェビッツを描いた優れた記録映画『夜と霧』の映画監督レネに従ってヒロシマを主題としたシナリオを書くべく一九五八年に来日した。

かくてヒロシマに滞在し、原爆資料館には三度足を運び、原爆病院を訪ね、『原爆の子』を始めとする関連するすべてのフィルムと資料を見た。その結果後に彼女が記しているところによれば、「ヒロシマについて語るということは、それについて語ることは不可能である」という結論に到達した。

彼女は「原爆を悲惨として描くことは日本人にまかせよう」と考え、広島における一組の男女の行きずりの恋の物語を作った。平和を主題とした映画の撮影のために来広したフランス人女優が、その仕事が終わり、明日は帰国するという日の前日にヒロシマの日本人男性と性的に結ばれるという物語であった。

映画は最初の情事が行われた翌朝のホテルの一室から始まる。ヒロシマの男性は彼女に広島に留まってくれるよう頼む。せめてもう一日、というわけだった。しかし二人はそれぞれ配偶者のいる人々なのである。

　フランス人女性が広島で恋におちたのは、原爆を知ったことの衝撃のためである。彼女はヒロシマで原爆を見た（知った）と思う。しかし原爆を見る（知る）ことは不可能なのである。それを見知っているものから見るならば、旅行者のヒロシマ理解などというものは底の浅いものであって、デュラスは「君は何も見なかった」という声を広島の虚空に聴かないではおれなかった。そして作品の女性はその声に引き留められ、その言葉の意味を知るべく、日本人の男性を受けいれたのである。

　大江健三郎は『ノート』のなかで「広島は人類全体のもっとも鋭く露出した傷のようなものである」と述べているが、デュラスはそれよりも六年前にまさにそのように実感し、それを表現したのだった。

一〇六四年に大江がそのように記したのは、原爆の災害がまさにそのようなものであったがためである。しかし彼が『ノート』を書くためにはその事実だけでは不十分だったのである。彼が告白し、今日では非常によく知られているように、このとき同時に彼の最初の子息が脳に障害をもって生まれていて、彼がそのことに驚愕し、打ちのめされていて、彼がその悲運を引き受けて闘う必要に迫られていたからであった。そのことが被爆者の理解を深めたのであり、彼はその「個人的体験」から広島を把握し、『ノート』を書きえたのだった。

それと同様にデュラスは女主人公の広島への理解と共感の根底にあったものとして、女性のフランスでの過去を明らかにする。戦時下で十八歳であった彼女は占領軍のドイツ兵と恋におち、情事にふけった。そして「解放」後にドイツ兵は射殺され、彼女は髪を刈られ、町中を引きずりまわされ、故郷の町にはおれなくなって、パリに送り出された。その到着の朝、新聞おトップ記事に広島への原爆投下が報じられていたのだった。

広島で彼女は己が過去の傷痕を思い出す。そして常にヒロシマの痛みとともに生きることによって、個人的な傷を忘却に委ねようと決意し、またそれが可能となったことを知るのだった。

デュラスがまた大江がそうであるように、私はヒロシマもしくは長崎の生まれ育ちではない。私は樺太に生まれ育ち、ソ連占領下で暮らし、十五歳の年に引き揚げた。大学ではロシア文学科に進んだ。師事した先生に平和運動家だった人がおり、その縁で一九五七年に日本原水協の訪ソ使節団委加わることになり、このときに初めて被爆者である人々に出会った。

『ヒロシマわが愛』という作品の存在を知ったのは、その二年後ブタペストにおいてだった。国際学連の英文の機関誌で岡田英治とエマニエル・リヴァのスチール写真の載った紹介記事を読んだのであった。私はその二週間後に東京の小さな映画館で、『二十四時間の情事』の訳名で封切られていたその映画を見て感銘をうけた。私はその翌日に西下し、初めて原爆資料館を訪ね、大分市に至り、現在の家内に求婚したのだった。彼女はヒロシマで一・三キロ地点で被爆しており、この時期大分市に住み、県被団協の事務局長をしていた。私たちは平和運動にかかわってこの年ヨーロッパへの旅を共にしていた。

結婚後一九六二年に最初の子が生まれたが、その子は心臓に欠陥があった。ファロー四兆症の二つを有する重症のものであり、満四歳になった時点での手術が予定されていた。そのような状態で商社でソ連貿易の担当者として勤務しつつ私は大江の一連のヒロシマにかかわるルポルタージュを読むことになった。一九六三年に雑誌『世界』で読み、翌年岩波新書に収められて読んだ。その小説作品はそれ以前から読んでおり、その後も多く読んできている。そして今日しばらくぶりで『ノート』を読みなおした。そしてこの作家が出発以来マルクス主義者ではないことを繰り返して表明してきたことにについて考えざるをえなかった。

大江とは異なってデュラスはマルクス主義を標榜する人である。彼女は戦中のレジスタンスからフランス共産党に入り、一九五〇年にスターリン主義に抗して除名されている。以来彼女は共産党とソ連にきびしく対決してきた。共産党のマルクス主義にたいしては「すでに死体硬直を起こしている」とまで言い切っていた。ところがそれを予見していた観のあるソ連の崩壊が現実に生じて後には、一転してマルクス主義擁護の姿勢を示している。彼女はいまや死語と化した感のあるプロレタリアートという言葉を生きいきと語っている今日では稀なる作家のひとりなのである。最近のインタビューで彼女は述べている。「私は七年間共産党員でした。魂はいまでも共産主義者です」「共産主義のうちで成功したものは何ひとつありません。全体的な殺人のようなものでした…　現在それが不可能だということはみんな知っています。でも共産主義の思想は、その夢はいまもここにあります」。

大江は共産党員だったことはなく、マルクス主義者か実存主義者かということでいえは、実存主義者として出発した。そしてそれは国際的にはスターリン批判があり、日本でもとくに学生運動のなかでそれに呼応する動きがあった年に彼は登場しており、一九五八年には記している。「ぼくが全学連の指導者に会いたいと考え始めたのはこの事件（一九五八年の日共本部でのこと）が契機となった。それにぼくも三十万の学生の一人として全学連に属している。そこでぼくは全学連の委員長と委員、二人とも共産党から除名されたという点で、勇敢に身をもって全学連の中央執行委員会の独自性を主張した二人に会ったのである」「香山健一氏と森田実氏はじつにすばらしい青年であった。僕は彼らとおなじ学校の学生であることを誇りにしていいと思う」「これは明らかに予測できることであるが、十年後日本の革新政党のリード・オフ・マンは全学連お執行委員会で育った鋭い頭と逞しい行動力の若者たちに握られるであろう」（「叫ぶ全学連とふるえる学生」、雑誌『文芸春秋』）。大江はこの文章をその後の評論集に収録していないが、まさにそれゆえに注目されねばならない。

大江は「ふるえる学生」の立場でこの文章を書いた。そしてそれは後に『ヒロシマ・ノート』に連なり、反核の論客になってゆく立場でもあった。そしてここで思い出されるのは、この時期「叫ぶ全学連」（つまりブンド共産同）の「反ソ・反スターリン主義」を支持していた人に吉本龍明がいたことであって、この評論家は八十年代に入って反核に異論を唱えて論陣をはることになった。（以下、先の章に記述した文章と重複するので大幅に削除）

大江健三郎はまことに賢明かつ幸運にも左翼運動に加担しないですんだ。その文学的成功はもちろん才能によるが、また多大にそのことにも負っているのである。しかしマルクス主義者であった人に師事し、共産党に属したことのある私の場合には、そのことを視野の外に置いて、己のヒロシマを語ることはできなかった。なぜならば私は一九五九年に共産党からの離党を決意すると同時に被爆者の家内との結婚を決意していたからである。それが書けるようになるためには、私は先輩の吉田嘉清が共産遠淵を追われるのを待たねばならなかった。

大江は『ノート』の結びにおいて≪被爆者の同志≫であるよりほかに正気な人間として生きようはない」「正統的な原爆後の日本人とみなす人々に連帯したい」と記している。私は結婚して五年してこれを見たのであるが、我が意をえたと思ったものだった。しかし結婚の結果私の人生で何が生じ、また人生がどのようなものになったかを私は知っている。一九八四年以来、わけても一九八八年以来私は彼女のおかげで苦難の生活をよぎなくされて生きてきた。それがもし原爆のためであるとするならば（もちろんそれを証明する手だてはない）、私は原爆が何であるかを十分に知った。なにしろ彼女には二十回は死んでもらいたいと思って生きてきたのである。

どうにか持ちこたえることができたのは、私に先天的な病異変をもって生まれ、四歳十か月で逝った子があったからである。私はその子に命じられ励まされて、彼女を救ったのだった。そのことに思い当たり、夫婦の二十余年を記すことになり、二年を要して最近私は『微笑の沈黙』六八七枚を書き終えた。

この先は一九五六年に四十九歳で逝った松尾隆教授について書こうと考えている。戦後精力的に平和運動に従事し、原水爆禁止運動の前史を作った人だった。その運動の成立は教授の晩年の出来事だったが、それを「日本の（パリ・）コミューンですのう」と生地の長崎県島原の言葉で語り、それに多大の期待を寄せていた。

島原半島の南端の高来町の真宗の寺の出身である。現在は甥の血筋にあたる人が住職であり、南国的な植物の茂る広い庭の一角にはその人によって建立された立派な親鸞の銅像が立っている。そしてそこからは一八三七～八年にキリシタンがたてこもり、最後は玉砕して果てた原城跡の岡が望まれるのである。また寺の裏山は今日では公園になっているが、日本最初のセミナリオが置かれた場所だということだった。一帯は老若男女すべてが乱によって死に絶え、乱後にはまったくの無人の血となったところである。つまり現在の住人はすべて乱後に移住してきた人の子孫なのである。真蔵寺は近くの柳川立花藩から出ていた。

幕府は仏教の場合でも一つの宗派が強くなるのを警戒し、各宗派の寺を一つずつ置いたという。それらの寺の僧侶たちは毎年乱の終焉の日には集まって合同で城址跡で読経を行っている。

当時好んで移住したと思ったものはいなかった。かくて幕府は西日本の諸藩に人を送るよう命じ、諸藩は囚人を送ったと伝えられている。土地の人たちは、寺の住職一族以外は囚人お子孫であると認識している。たとえば半島一帯は九州では例外的に素麺の生産が盛んであるが、それは讃岐の小豆島からの移住者が伝えたものとのことだった。（重複するゆえに後略）

かつて書いた「ヒロシマとは何か」を再読することになったのは、あなた、辛島和子との出会いが、時期的に完全にデュラス文学との出会いと重なっていることを確認するためでもあった。あなたがあの稀有のフランス女流に導いたのであり、そしてそのあなたが、自身ではまったく意図しないで、夫の私を、幼馴染の古川和男氏に、そのトリウム熔融塩炉に導き、私がそれに関連して本を書くことになり、そしてそれが、それ以前に書いた（および訳した）本同様に、それなりの影響をもつことになった。そしてそれから四年たって、歓迎すべき新しい動きが出て来たのであって、私はそれについてあなたに報告したい。

私はすでに古川雅章から和男氏の研究について知らされ、チェルノブィリにも行って来ていた。またこれとの関連で反・脱原発の動きが強まり、それとの接触もあった。しかしヒロシマについて考えつつ、原発との関連をつきつめて考えることはしなかった。すくなくとも十分ではなかった。私が現行の原発に真に目覚めるためにはフクシマを待たねばならなかった。

もっとも福島原発は、すでに久しく住む集合住宅の隣人が、リタイアしていたとはいえそこの勤務者であり、天皇の訪問の際には説明者のひとりだったそうで、あなたはその夫人と親しく、私にとっても身近な存在だった。しかし古川兄弟の訪問をうけていたことの意味は大きく、フクシマ後に一読してただちにその驚嘆かつ感激すべき価値を知った。こうしてすぐにお会いしたい旨手紙を差し上げたのである。たまたま民放の「著者に聴く」という番組に出演が決まっていて、誘われてそれを局で傍聴することになった。控室でお会いすると「ここまで書いてくれるとは（もはや言うことはない）」という感謝の言葉とともに、雑誌論文の増す刷りを手渡された。「安全な原発はなぜ潰されたのか」という表題のもので、執筆者は同番組の司会者、雑誌「文芸春秋」の元編集長堤堯氏だった。購入はもちろん、私がページを開いてみたこともない右寄りの雑誌『正論』がその掲載誌だった。

著者への堤の惚れ込みは大変なもので、堤はこの後すぐに追いかけるように大磯の古川宅にカメラを持ち込み、冒頭で「なんとかしてこれを実現させて差し上げたい」と宣言してロングインタビューを行った。そこで古川は数々の貴重な証言を行っている。一九八〇年加速器熔融塩蔵増殖炉ＡＭＳＢの発明により、自民党にトリウム利用促進議員懇話会（会長：二回進、会員一〇八名）が発足しており、この際、米オークリッジ研究所所長ワインバーグ博士は総理大臣中曽根康弘に親書を送っているのだが、握り潰されていること。そのも「失礼」が無念とともに語られている。「家族をはじめとした多くの人々の励ましと支持のもとに進められてきた研究、また啓蒙活動であった」が、「たった一人（だけ）の時もありました」とも述懐されている。

私は堤にも感服し多大に刺激される。彼に負けまいと励み、途中で、要請されて『日露領土紛争の根源』の著者として同じくこの人主催の「著者に聴く」の番組に出演したりしながら、二〇一三年末には初稿を完成する。そして、古川『原発安全革命』の発売元である、堤の古巣の文芸春秋社から出してもらうべく堤に相談、彼のアドバイスに従って同社の担当者に送ったのであるが、なぜか出版には至らなかった。堤に会って質すと、「原爆にせよ原発にせよ、放射線による被害は誇張されている」ということだった。そしてその後。堤の番組には『それでも原発は止められない』といった原発擁護の著者の番組が組まれるようになり、私は彼の変節を確信した。その後古川雅章と和男子息の和郎両氏との番組が土壇場でキャンセルされている。そして最も重要なのは、「この原発であれば、チェルノブイリもフクシマもなかった」と帯に記して発売した古川本を同社が廃刊（？）にしたことである。どこかからの圧力がかかったとしか思われない激変だった。

フクシマ後日本原水協の初期の勤務者だった武藤一羊はその著書『潜在的核保有と戦後国家』に記している。「一九五七年、政権に就いた早々、岸（信介）は参議院で、「自衛権の範囲内で核保有は可能だ」とし、衆議院でも「核兵器という名前がつくだけでみなが憲法違反だというが、そうした憲法解釈は正しくない」とした、一九六〇年の安保改定で日本を米国の覇権戦略の自発的参加者に組み込んだ岸信介は、改憲を政治的使命としながらも、現行憲法のもとでも自衛のための核兵器は保有しうるとする驚くべき憲法解釈を導入した首相となった。この立場は以後歴代の自民党政府によって引き継がれ、繰り返し再確認されている。しかしそれらは原子力産業とは切り離された言語空間に位置づけられてきた。実態と名分は別々に用意され、いつでも合体できるように並べておかれることになったのである」（94頁）。武藤はこの後、『戦後レジームと憲法平和主義』での「安倍極右政権」批判に向かう。

古川和男は自らが立つ位置を、エネルギー問題における第三の道と呼んでいた。すなわち右手に現行のウラン・プルトニウム軽水炉の原発路線があり、左にそれに反対する太陽光発電を主とする各種の再生可能エネルギーの路線がある。原発の発足当初、ウラン派とトリウム派の抗争があったことが忘れられて久しく、原発派も反原発派も、対象とする原発がウラン軽水炉だけとみなしていることでは一致している。フクシマ後これが訂正されるかと期待されたが、国際社会でのトリウム路線の評価の高まりとは逆行して、日本国内では変わらなかった。一

存在しているのは両派の対立であり、フクシマ直後では後者のほうが優勢となった。にもかかわらずウラン軽水炉の再稼働が進んでいるのは、原発問題を隠蔽して選挙に勝った自民党によって安倍内閣がつくられたからである。そして岸を継承する安倍晋三によって、憲法書改正と原発再稼働はセットで進められている。

その安倍政権の近年顕在化している、もはや腐臭を放つまでになっている腐敗の原因はどこに在るのか。それは突然表面化したのではなく、長期にわたる蓄積の結果である。内心の不安を押し隠しつつ、「安全だ」「安全だ」と自他を欺きつつ、四十五基ものウラン軽水炉を建設し、二〇〇五年頃からは「原発ルネッサンス」を口にするに至っていた勢力が強固に存在したためなのである。この腐敗は日本社会全体にまん延しないではいなかった。それが近年、「取り戻そう、日本」の合言葉の下、政権の下で膿となって現れているのである。

原発推進を目的とする国家機関、原子力委員会で委員長代理をつとめながら、他方でパグオッシ運動に参加してきた人に鈴木達治郎氏（ 一九五一～）がいる。フクシマで衝撃をうけ、自己批判しつつ民主党政権下で長崎大に新設された核兵器廃絶研究センターの教授となった。こうしてこれまで二度広島で行われてきた同会議の国際会議を、二〇一五年初めて長崎で開催することとなる。一時なりを潜めた原発派が盛り返してきていると観察していてその近著『核兵器と原発―日本がかかえる「核」のジレンマ』（二〇一七）では、冒頭で「三・一一に逆戻りしているのではないか、という危機感」を表明した。

鈴木は「脱原発か否か」の「二極対立」について述べる。しかしこの対立する二つの勢力が、原発を現行のウラン軽水炉を念頭においていて、他にはいかなる原発も存在しないという認識では共通していることを語ろうとしない。彼は原子力が「ジキルとハイド」の「二面性をもった技術」であることを指摘する。それは現行のウラン原発については当てはまるが、トリウム熔融塩炉については当てはまらないことを、フクシマ以前においてはともかく、以後には知ったはずである。しかしそのことを著書においても語っていない。

古川和男に日本国内に早くからの支持者がいなかったわけではなく、拙当該書はそのいくつかを紹介した。しかし執筆当時はその存在を知らず、最近になって知った重要人物に元朝日論説委員の科学ジャーナリスト、飯沼和正氏（一九三二～）がいる。トリウム熔融塩原子炉関連の最初の執筆は一九七七年『金属』という専門誌の「原子力発電：トリウム・サイクルの検討を」というものであって、そこには古川の名はまだ無い。彼が加速器熔融塩増殖炉ＡＭＳＢ発明したのは一九七七年、続いてその単純小型密閉式ＦＵＪＩの発明に至ったのは一九八五年であり、二〇〇一年に『「原発」革命』が出て話題となった。「原発」と括弧で括られている原発は、現行のウラン・プルトニウム原発を指しており、それを革命的に変え、それにとって代わる新たな原発の提示を目的とした書である。

二〇〇九年に米議会に「トリウム原子力法案」が提出されて、六月飯沼は社会民主党の機関誌『社会民主』に、東芝で福島原発の設計に従事してきつつ、当時すでに古川和男の筆頭の後継者となっていた吉岡律夫（現ＩＴＭＳＦ名誉会長）と連名で「「ウラン」から「トリウム」への政策転換か!?」を発表。七月にそれらを要約するエッセイ「核兵器の廃絶をめざす「トリウム原子力」の研究」を出身の京都大学新聞に寄稿している。拙著と完全に一致する主張が展開されており、心強く貴重だと思われるので左に紹介させていただく。

**トリウム原子力　飯沼和正**

「トリウム原子力」とは現行の「ウラン核燃料」とは別系統の独立した原子力（発電）技術である。核爆弾の原料であるプルトニウムの産生とは無縁か、もしくはその減量に大きく役立つ技術である。だがそれは久しく政治的に〝埋め殺し〟にされてきた。それを今、京都の若手研究者たちは気付いて、叫び声を挙げ始めている。（略）

　米オバマ新政権の側は独自にその技術の重要性に気がついている。昨秋、上院にはすでに「トリウム原子力法案」が提出。その一方でこの四月には旧来のウラン原子力法にもとづく重要施策、「ＧＮＥＰ」計画の「断念」が明らかにされている。

　研究の自由が公認されている大学で、今こそ「トリウム原子力」への本格的な取り組みを始めるべきではないか。そのことを深くせつに望みたい。

　現行の原発技術体制はウラン系核燃料によって立っている。しかしこのウラン系「核燃料サイクルは必ずプルトニウム（核爆弾の原料物質）の産生が伴う。というよりはプルトニウムの産生と利用が大前提として成り立っているのが、外ならぬ現行の（軽水炉による）原発技術なのである。

　この産生したプルトニウムを**未だ完成していない仮定の「増殖炉」**で、燃料として利用する。それを燃やして消化しさらに発電する。このような**仮定に立った理論「核燃料サイクル」でもって現行の原発体制は構築されている。**

　ところがこの理論が、今、崩れようとしている。この「核燃料サイクル」にとって最重要で、かつ不可欠な一環である「増殖炉」の実現が、世界でも日本でも破たんしかかっているからだ。その開発はすでに頓挫している。それが事態の現況なのである。

　にもかかわらず、思慮浅き、日本のリーダーたちや、そして最近までの米国のリーダーたちは、（ウラン）原発こそが地球温暖化防止の〝決め手〟だなどと、巨費を注ぎ込んできた。

　確かに、原発は炭酸ガスこそ放出はしない。しかし「増殖炉」なき現行のウラン系核燃料サイクルでは、今後、プルトニウムのヤマが世界各国に厳然として残るのである。日本だけでも、すでに今、70トン程度のプルトニウムを保有している。ちなみにヒロシマ・ナガサキ級の原爆が必要として原料物質は、プルトニウムであれば、せいぜい８ ～10キログラムであった。

　「トリウム原子力」の最終的な姿は「熔融塩発電炉」方式だと目されている。この方式ならば、理論的にプルトニウムは全く産生しない。しかしこの〝本命〟にたどりつくまでには、少なくとも10年の開発期間を要するであろう（古川和男博士）。

　他方、そこに至るまでの〝ツナギ〟として、より実現容易な技術もすでに提示されている。トリウムとプルトニウムの混合燃料（棒）を新たにつくり、それを現用の発電炉（軽水炉）に装入する。いわゆる「プルサーマル」方式の〝トリウム〟版である（豊田正敏・東京電力元原子力本部長）。

　オバマ新政権に代わった米国では、すでにこの「トリウム原子力」への製作転換の兆しが見えかかっている。08年10月、上院へ民主・共和党の議員が共同提案として　<Thorium Energy Independence and Security Act of 088>(「トリウム原子力法案」と略称)を提出、行政当局との折衝に入っている（<Nuclear News>誌四月号）。

　その折衝の結果か？　米エネルギー省（ＤＯＥ）はこれまで進めてきた<ＧＮＥＰ>計画の「断念」を最近明らかにしている（朝日新聞４月21日付朝刊一面トップ）。<ＧＮＥＰ>計画とは、ウラン核燃料サイクルを完結すべく、ブッシュ前政権が推し進めていた要（かなめ）の計画だった。

　前出の「トリウム原子力法案」は一九五四年に制定された現行法<Atomic Energy Act

>を大きく改変するものだ。というよりは「ウラン原子力」を対象にした現行法体制に対して、これとは独立的な<Independence>なものとして「トリウム原子力」を対象とする新しい法的枠組みを打ち出すものーとみられる。

　この法案は今後、五年間の予算として二五〇億円（＄二五〇million）が盛り込まれている。

　もともと世界でも数の少ない「トリウム」派ではあるが、何故か、そこには京都の大学の人脈が目立つのである。主流の権威を〝何ぞ必ずしも〟と疑う、反骨・在野の気風のせいかもしれない。

　まず最初に、日本でこの火をともしたのが、京都・京大の出であった故・西堀栄三郎博士だ。彼は最初の南極越冬隊から帰国して間もなく、（旧）日本原子力研究所理事の時期に、この「トリウム原子力構想」を打ち出している。一九六〇年頃だった。〝世界最初の原爆被災国・日本こそ、これに取り組むべき。経済性・安全性も高い≫―と。

　彼は京大理学部の助教授を経て、若くして民間に転出。敗戦後も、原研理事として、ごく短い期間を除けば、生涯、在野の技術者だった。在野の〝大御所〟であった。最後は京都の「名誉市民」にも選ばれている。

この西堀を継承したのが古川和男（現82歳）。彼は当時原研の主任研究員（後に東海大教授）だった。二人は原研にあって、孤立無援に近かった。

　古川は、米国での「熔融塩炉」実験の成果を横目に踏まえながら、これをトリウム系燃料に特化。「発電炉」として理論的にほぼ完成（「ＦＵＪＩ構想」）する。これは海外からも将来の有望候補と目されている。（02年には文春新書『「原発」革命』）として公刊。その要約形である論文が佐藤栄作記念国連大学協賛財団の「核拡散防止への実効ある提言」の懸賞募集で最優秀賞を受けている）。

　幸いなことに、このような知的命脈は今日の京都にも引き継がれている。実験系の常置講座こそ未整備ではあるが、大学の内外には、「トリウム」に心を寄せる若手の研究者が〝トグロ〟を巻いて、出番を待っている。

　だからこそ、京都の大学で本格的な取り組みをーと望みたいのである。それは、広島・長崎の、核兵器廃絶を待望する市民たちとも手を組んで。

飯沼和正氏の正論は、ミニコミ誌紙に発表されていたために私の眼にとまらず、私の古河

支持の執筆に影響を与えなかった。フクシマ後に現れた書物で私が影響を受けたものといえば、その年の末に出版された安富歩氏の『原発危機と東大話法―傍観者の論理・欺瞞の言語』というものである。

私はすでに古川学の信奉者になっていたから、この人がトリウム熔融塩原子炉についてはまったく知らずに執筆していることの欠陥は自明だった。しかし東大内でも群を抜く予算を獲得し、原発ムラの中核を担っていた東大原子力学科出身者の「話法（語法）」への批判は峻烈・的確であって多大に教えられた。古川和男とその支持者たちはトリウム熔融塩炉を取り上げてもらうべく原子力委員会には何度も働きかけ常に拒否されてきたのだが、その委員長の近藤駿介の自分を体制の「外部」と規定したフクシマ後の国会での答弁を批判していたからである。私はこれに刺激されて、もっと突っ込んでこの委員会の陰湿な古川拒否を告発した。

　そしてそれから六年以上たって、安富書を再読して委員長代理の鈴木達治郎の「原子力委員会は、安全性について責任を負っていない」という発言、また「私は推進派の世界では『反対派の仲間』、反原発派の世界では『温厚な推進派』と呼ばれている」とする「傍観者性」が批判されているのを見て、今日の鈴木氏の理解に資するものを見出した。鈴木氏はフクシマ直後のこの年には「我々の仕事は原子力の推進であって、安全ではない」などとも発言していたとのことである。その後に変化してようやく今日の原発反対論者に成っていると観察される。

「ウラン・プルトニウム」路線と「トリウム」路線は異なった世界観・文明観に属しており、両者に共通するものは何もない。前者は誤った路線、後者に属するワインバーグの言葉で言えば悪魔の路線であり、後者の天使の、すなわち人間的な路線とは対立する、

地球の表面で膨大な熱が生み出される放射性元素はウランとトリウムである。ウラン同位体のうち235を濃縮し三から五％の配合物をつくり、それが通常の原子炉の核燃料として用いられる。またこれを二〇％以上にすると核兵器に使用できる。原子爆弾を製造するにあたって重要なのは、連鎖反応をする核分裂反応を引き起こすべく、費用がかかりむずかしい濃縮をウランに施すことである。

核分裂性元素とは、エネルギーの低い中性子の照射により衝撃を与えられると、その原子核がバラバラに割れる元素のことである。トリウムを代表するのは233であるが、これには核分裂性は無い。しかし原子炉の炉心で中性子の衝突を受けると、トリウム233に変わった後、続いてウラン233に変換する。これは、名称は同じだが、天然のウラン235とはまったく性質を異にする。

両者の最大の特徴は、天然のウランが燃焼（核爆発）に際して核兵器にきわめて有用なプルトニウムを産生うるのに対し、後者がそれをまったく産生しないことである。このためまず米国で後者が葬られ、これを継承発展させ、理論的に完成した古川和男のトリウム熔融塩原子炉も、日本では受け入れられなかった。

二〇〇九年の飯沼和正は「原爆材料を産むウラン系を長男坊だとすれば、それを産まぬトリウム系はあとから遅れてやってきた次男坊であった」としている。また米科学ジャーナリスト、Ｒ・マーチンのフクシマ後の著作では言われている、「トリウムはまるで、ウランのあらゆる反応や性質と相補的な特徴、つまり対照的な特徴を備えているようである。陰と陽、男性と女性である。華々しくて威張り散らす兄のウランとは対照的な――みずからを消費するにあたり、もっと落ち着いてゆっくりとしている妹のようなものかもしれない」と。

≪物質系の無秩序の度合いを数量化したもの≫と辞書に説明されるエントロピーの学者に槌田敦という方がおり、その一九七〇年代からの原発批判の仕事を私は評価する。『原発安楽死のすすめ』（１９９２）にしても、またフクシマ後の『原子力に未来はなかった』（２０１１）にしても教えられるものがあった。しかしすでに表題に現れているように、原発が現行のウラン・プルトニウム路線のそれでのみ捉えられていて、トリウムがまったく視角から脱落している。またその結果として、原発については何ごとかを語りえてはいても、それと対を成す核兵器廃絶については何も語れずにいる。「死ね！」と言っただけでは死なぬものを、「安楽死」させることができるのは、トリウム熔融塩炉の技術だけである

「トリウムのアインシュタイン」の異名を有するといわれる米ベンチャー企業主の一人、ドーヴェルニュは言う。「トリウムは何らかの目的があって地上に遣わされた。神とか何とかと呼ぶ超越的な力が天上に存在するとして、もしそれがこの惑星に知的な存在をお創りになったとしたら，地球をお見捨てにならないだろう。私はエネルギーにもとづく何らかを創造した創り主の存在を信じている。そしてトリウムは造物主による究極の創造物だ」。

プルトニウムは「ダイナマイトと青酸カリをひとまとめにしたような爆発物であり毒物である。人類社会に対する危険度の激しさ、広がり、そして時間の長さを考慮すれば、前二社を合わせて一千倍か一万倍したくらいの代物であろう」（飯沼和正）。したがってこれを産生する軽水炉にはもともと未来はなかったのであり、自滅する炉だったのであり、フクシマはそれを証明したのだった

原発の導入に際し、予想されるその危険に恐怖し、強い逡巡を表明した東京電力の担当者にまだ若かった豊田正敏氏がいた。宮仕えの身なので仕方なくその仕事に従事、ついには「安全」と信ずるに慣れ、全原発技術者の教科書的著作の執筆者にして編集者代表と成り、また東電の原発技術本部長にして副社長の一人と成る。しかしその際にも高速増殖炉「もんじゅ」の継続には異議を唱えていた開明的な人だった。

原発が産生するプルトニウムは、使った以上のプルトニウムが増殖される魔法のような高速増殖炉で使用されるはずだった。その不可能性を古川和男はとうに見抜いていて、西欧中世の錬金術に擬して記していた。「水銀を金に変えられますか？　中世の化学者の願いに反してそれは不可能だが、逆に金を水銀に変えるのは簡単なのである。原発の炉心に金を一年間入れておくと、約半分は水銀になってしまうのである。神様はお茶目な方らしい」。

原発ムラの大部分が不安を醸成するものとして反発したのとは反対に、豊田氏はきく耳をもっていたようであり、望んで古川に会っている。しかし「原発はすでに安全と成った」と言って、古川から「馬鹿」呼ばわりされたと聞く。拙書で私はそのように記した。

フクシマ後、氏は慚愧する。トリウム熔融塩炉が良いことは知っていたので、現行炉へのトリウムの導入を提唱する。私は、ＮＨＫのインタビューで氏が古川の名を挙げずにその学を賞賛しているのを知り、拙著では豊田氏の案を肯定的に紹介した。そして拙著の公刊後、二〇一五年三月一五日の朝日新聞に同氏の更なる提案、「トリウム炉の採用提案を」を読むことになった。

　　「プルサーマルの代わりにプルトニウムにトリウムを混ぜた混合燃料を軽水炉で燃やす「トリウム軽水炉」を採用するのである。この炉で生成されるのはウラン２３３で核拡散上も問題がない。燃料をプルサーマルの倍長く燃やせ、経済的にも有利だ。高レベル廃棄物の発生量も飛躍的に少なく、安価な直接処分が可能となる。良いことずくめの原子炉だと確信する」。

　朝日新聞はわが国の「核燃料サイクル政策について」いくども社説を掲げているが、ま

ことに遺憾なことに、この優れた豊田提案を取り上げようとはしない。

古川書に従い、結論するとこうなる。

世界を支配してきたウラン軽水炉はその一部が誤っていたのではなく、体系として全面的に誤っていた。それはその発明者であるワインバーグが悔恨をこめて指摘し、ついには憂鬱症に陥ったことからも明らかなように、悪魔からの買い物であった。

誤りの第一は、核分裂という物質の変化を扱うプラントであるべきなのに、それまでの発電の通念にしたがって「火力発電所の原理」に基づき、核燃料体（反応物質プラス媒体）が固体で密封していることである。これを液体、米オークリッジ研究所（ワインバーグ所長）の「芸術品」と賞賛される研究成果、熔融塩炉に変えねばならない。それが成されていなかったために、福島では爆発が起こったのだった。

第二は、核燃料として、ウランを排除し、それとは異なって、プルトニウムその他の放射性物質を産生せず、また資源量において豊富な（したがって安価な）トリウムに代えることである。これを熔融塩炉で用いれば、安全は全面的に保証され、運転がきわめて簡単になる。核兵器に役立つだけのプルトニウムを産生しないことで、核軍縮に貢献し、またその処理に苦しむことがない。ウラン軽水炉の現状は、この産生物の蓄積により、核戦争によって消費するか未来の世代に残すかのいずれかを選ばなければならなくなっている。トリウム熔融塩原子炉はそれらを消滅すことが出来る。ＴＴＳはその国際特許を古川和男から継承している。

第三に、運転の難しさと危険性が原因で、ウラン軽水炉は城塞のように大型化され、かつ過疎地域に建設されることになった。トリウム熔融塩炉に代えるならばこれを小型化し、電力使用地に建設し、ステーションによって管理できる。送電距離の短縮（ゼロも可能）により、料金は安くなる。公共性が保証され、国民大衆にとって親しみやすいものとなる。

しかしながら悪魔に教唆されたかのように、安全神話を振りまき、最後には「原発ルネッサンス」を高唱し、全国に建設した原発は五十四基を数えた。その資産価値は総額で五十一兆円に達するという。その大半が稼働できずにいるのであり、労働組合までが再稼働を求めている以上、彼らの救済のためにも、豊田案の実行が望まれる。これにより軽水炉に勤務してきた人々はトリウムに慣れることができ、全面的なトリウム熔融塩炉への移行が可能になるだろう。

また原発を軽水炉のみと見なし反対してきた人々も、トリウムが無害であるだけではなく、プルトニウムを消去することを知り、トリウム熔融塩炉の支持者に転じてくれるだろう。その多くは善意の再生可能エネルギーの支持者であるが、古川は、核分裂によるエネルギー取得は、アインシュタインの発見になる自然な営みである、と説いてきた。すなわち、かつて地上には自然な核分裂が起こっていたことが在り、その跡もアフリカで発見されている。加えてワインバーグの発目になる熔融塩は「核燃料を溶かし込む核反応媒体・反応熱を運び出す熱輸送媒体・藩王生成物を処理する化学処理媒体」の三機能のすべてを果たすという。またそれは、地球にほどよい熱をもたらしている地下のマグマと科学的内容が近似しているともいう。すなわちどこから見ても自然の摂理に適った人間的な炉なのである。

早大教授松尾隆は古在由重、宮本顯治と昵懇の日共党員だった。この党は一九五〇年のコミンフォルム批判に際し分裂したのだったが、ともに統一会派と自称した派に属し、宮本は先に復党し、第六回全国協議会を用意し、党の統一を実現した。古在氏、松尾隆もこれに従い、その指導下にあった吉田嘉清ら学生運動出身者も同様だった。松尾はその二年後に死去、大隈紹講堂で行われた平和葬の名の葬儀では古在・宮本両氏は注目すべき葬辞を読んでいる。

それから三十年して松尾の三十回忌があって、司会は吉田、冒頭の挨拶は古在氏だったが、宮本氏は招かれなかった。その二年前の原水協の分裂の余波のためである。「松尾が存命だったならばどのような立場をとったろうか」が隠れたテーマであり、それは同時に発行された文集『松尾隆』にも顕われていた。そしてさらに十五年たって、東大国際派（統一会派）の『一九会文集』と踵を接するようにし、相互に交流しながら『早稲田・一九五〇年・史料と証言』全六冊の発行が始まった。私の「松尾隆」は唯一の連載評論だったがその結びで、私は記した。

「その生家の庭からはキリシタン殉教の地、原城跡が見える。教授の西欧への憧憬の根底にはこれがあった。しかしその人は背後に親鸞お和算を聞いていた人だった。そして西欧に深くのめり込み、西欧と世界に発信するものがないことを残念委思っていたと思われる。仏教には歴史哲学が欠落しているのである。ビキニ以降の原水爆禁止の運動に禁忌雀躍しておられたが、それは**この運動において日本人が史上初めて己を人類の名で語り始めたからだった。**

相克として存在していたマルクス（その他）とドストエフスキー（その他）は、また西欧Þ日本は、ヒロシマ・ナガサキを考える過程で、相互に熔解するのを教授は感じていたのではなかろうか。人**類の歴史はヒロシマ・ナガサキをもってその前史を終え、その前史をおえ、私たちが生きている現在は、「ヒロシマ後」と呼ばれるに相応しい時代である**。ビキニ後の原水爆禁止運動の高揚に遭遇して、「この運動は日本の（パリ）コミューンですのう」と島原言葉で語っていたとき、教授はコミューン（共産）主義をも新しくとらえなおすヒロシマ黙示録、その哲学の樹立ともいうべきものを目指していたのである」（一九九九年一二月）

五回に及んだ連載は小田切秀雄さんが毎号褒めて葉書をくださっていたものであったが、遅れて二〇〇五年に原水協理事長だった草野信男さんを偲ぶ会で会ったとき、この部分を激賞してくれた友人に池山重朗氏がいた。一九六四年ソ連お原爆実験再開に端を発し、日本原水虚が分裂した際、原水協を去って原水禁国民会議の発足に尽くし、二〇〇七年に亡くなるまでその中心にあった理論家だった。彼の激賞の対象となったのは、太字でしめした箇所であると思われ、そこが彼のヒロシマ・ナガサキと共通するからだった。

原子力の平和利用の美名での日本への原発輸出の試み、対応する日本側からの積極的需要の試みは、一九五〇年代、原水禁運動の発生ときびすを接するように起こった事象であり、米国は一九五六年に広島の原爆資料館で原子力平和利用展覧会を強行した。その後原発が建設されるようになり、それが平和目的であるということで、被爆者たちを含む日本の原水禁運動は全体としてこれを受け入れている。しかし釈然としなかった人々は少数だったがいたのであり、原爆で隻眼になっていた日本被団協初代会長の森滝市郎氏がその代表格だったと伝えられている。また非被爆者では、ソ連の実験再開を擁護したことで日共を離党し原水禁を擁立した池山重朗だった。そして池山は一九七九年スリーマイル島事故を契機に核兵器廃絶と原発反対を理論的に結び付け、これに支えられて森滝を理事長とする原水禁はそれを運動方針とした。池山は二〇〇七年に亡くなったが、その方針は堅持されていて、フクシマ後原水禁は迅速に福島県で世界大会を開催しえた。対するに原発を容認していた原水協はあわてて反原発を掲げることから始めなければならなかった。

しかしながらフクシマ後に再刊された池山著『原爆・原発―核絶対否定の理論と運動』を見るとき、もっとも優れた理論家・活動家だった池山にしてなお古川トリウム熔融塩炉についての認識が皆無であったことに気づく。それは副題にすでに現れている。彼にしてそうであり、他の類似の論者については言うまでもない。

対するに古川和男はどうであったかといえば、原水禁・核廃絶の運動の外側で生きながら、古川書の最終の第十章は「核兵器完全廃絶への道」と題されている。そこでは己の科学技術上の研究が「世界に冠たる平和憲法を持つ日本人の責務」の遂行である、と宣言されている。池山や私たちの運動とは切れていたのは、無関心のためではなく、疑いもなく専門領域で多忙だったためであり、また私たちの側が、ウラン軽水炉以外に原発は存在しないと思い込んでいたためなのである。

核兵器廃絶がかならずしも原発反対ではなく、原発反対が必ずしも核兵器廃絶を目指していない、という状況がフクシマ以前の日本には存在していた。風力と太陽光だけでやってゆけると考えるひとは決して多くはなく、人々は現行のウラン軽水炉が危険であり、かつ原発派それ以外に無いこんでいるので反原発なのである。

核兵器は使用されてはならず廃絶されねばならない。またそのためにはプルトニウムを産生するウラン原発は廃絶されねばならない。それに代わって太陽光と水力で十分かといえば、食料を輸入に頼っている国であり、平地は農地として使用されるのが望ましく、自然災害の防止のためにも森林は維持されなければならない。プルトニウムを産生しない核エネルギー炉が核兵器の廃絶と安全なエネルギーを提供するのである。これが陽の目をみなかったのは、米国でーーソ連においても同様だったが――冷戦派が核弾頭用にプルトニウムを必要としたからである。

安全で経済的なトリウム原発は、プルトニウムの消滅によって、核兵器の廃絶と一体化する。すなわち双方は同一の問題の表と裏の関係にある。またそれは現行の平和憲法を擁護し、これを改変しようとする勢力と対決する。古川のＦＵＪＩはそのような炉である。

拙当該書では冒頭で紹介しているが、豊田正敏氏はまだフクシマ以前の二〇一〇年「良いことずくめのトリウム発電炉」を提案、フクシマ後の二〇一三年のＮＨＫ取材班『原発メルトダウンへの道』では、二〇一八年七月の日米原子力協定の改訂を見据え、米側からのプルトニウム蓄積批判に備え「先手をとってトリウム発電の併用に日本は踏み切るべきです」と提案していた。その後の四年間に日本は高速増殖炉「もんじゅ」を止めざるをえなくなり、にプルトニウムは使用の当てはまったく無くなった。それはその後にも増大し、分離ずみのものだけで七四トン、廃物の状態で一〇〇トンに達すると言われている。六ケ所村の再処理工場が動かず、使用目的が不明のまま、再稼働された軽水炉ら毎日さらに追加されている。こうして六月九日の日本経済新聞は米政府から厳しい問い合わせがあったことを報ずることになった。「先手をとって」という豊田氏の提案は顧みられることなく、「心配」は的中したのである。

伝えられるところによると、日本政府は「上限をもうけて」米側の要求に応ずるのだそうである。何のための「上限」なのだろう。「日本の核武装のためである」とは口が裂けても言えぬ以上、どのように説明するのだろう。たとえ核兵器に利用しなくとも、盗難にあい、粉末化され精神錯乱者によって東京都心委散布されれば、大参事が起こるのである。逆にトリウム熔融塩炉で燃やすならば簡単に消滅するのである。

ともあれプルトニウム削減の実は示さざるをえず、それは述べたようにＴＴＳが所有する古川和男と三田地紘史発明の特許「液体核燃料を用いたプルトニウム消滅核反応炉」（二〇〇二）に頼る以外にないであろう。事態の展開が注目される。

ウラン軽水炉の頑迷な擁護者たちはよく知っているのだが、一度その体内にトリウム熔融塩炉を取り込むならば、それが「よいことずくめ」のものであるために、ウラン・プルトニウム路線は崩壊し、トリウム熔融塩炉路線がとって変わるのは必然の成り行きなのである。私はそれがまさに始まろうとしている観察する。日本社会の隅々にまで及ぶ巨大な変化が起ころうとしており、今日私たちはトリウム熔融塩炉革命の前夜にいると認識されるのである

古川和男氏の事業は、生前に立ち上げていたＩＴＭＳＦとＴＴＳによって継承発展せしめられており、私は前者の会員、後者の株主である。その中心にある人々からは、本の構想執筆の段階で多大にお世話になった。

吉岡律夫理博は、東芝で福島原発の数基の設計に係わった人で、早くからその欠陥に気づき古川門下に入った人である。事故に責任ありと感じているようで、フクシマ関連の東芝幹部の訴訟では、告訴側の証人になって出廷している。この人からはワインバーグについて多大に教えられた。その著、『最初の核時代』の白眉は一九九一年の広島・長崎行の所産である「ヒロシマの聖化」の章である。オークリッジ研究所にあって原爆製造にかかわったこの人は、ユダヤ、キリスト、イスラムの、いずれも共通の唯一絶対神の宗教にそれぞれに有る絶対的禁忌のいずれに照らしても、許されざる悪として原爆を把握した。

そして平和公園の梵鐘の音色に深く心動かされたのであって、その制作斉を特定し、大きさ重量ともに三倍の同じ鐘を発注した。元軍人らによる反対意見があり、しばらく同市の庁舎の中に留め置かれたが、やがて外に出され、≪International Friendship≫の名で市の公園に据えられた。 その広義と狭義のそれぞれの意味についてはすでに述べた。

その「良いこと尽くめ」の値打ちが国際的にも明らかになって二〇一七年一〇月ＩＡＥＡ（国際原子力機関）はパリでトリウム熔融塩炉に特定した国際会議を行った。米国を始めとし世界ではでは、高名なビル・ゲーツノ会社をはじめとし、その実現を目指すベンチャー企業が二十社以上も輩出している。各国政府もまた公的資金を提供している。もっとも進んでいる中国では試験炉が建設されており、二〇二〇年には臨界に達し、二〇三〇年には世界初の商業炉として稼働する。これらの国際的動向に刺激されて、ＩＴＭＳＦは二〇一七年九月プルトニウム原発の被災都市長崎でフォーラムを行った。古川トリウム熔融塩炉ＦＵＪＩが目指すのが核兵器の廃絶と安全な核エネルギー炉の提供であり、それはプルトニウムの排除と消滅に帰着する。その主張を、場所を長崎に選んで全国に発信せんがためだった。

冒頭木下幹康理事長が古川和男初代理事長の業績を紹介したのは当然として、続いてその著書が被爆者によって霊感を与えられ、かつまたその究極的願いに沿って執筆されていることを明らかにしたものとして、拙著をスライドで紹介してくれた。その裏表紙には木下氏撮影になるオークリッジ公園の日本の鐘が印刷され、帯には、結果として我々を結びつけた人である吉田嘉清氏の、古川家とあなたの縁にも触れた推薦の辞が記された本である。

長崎は冒頭に述べたように第二回の原水禁止世界大会が行われ、会期の最終日に日本被団協の結成宣言が出されたところである。あなたは登壇し、被爆者女性として何ごとかを話している。新聞社撮影のその大型の写真があり、私はあなたの葬儀では、会場の入り口に最初の一枚として置いた。

往路と復路に観光したモスクワやキエフについては言わなかったが、ウィーンについて、結婚当初のことだったが、「あまり齢をとらないうちにもう一度連れて行ってね」と言っていた。しかしその願いは叶わなかった。原因はかかって一九八四年から始り、二〇一六年まで続き、死によって終わった週に三日の人工透析にあった。この間あなたが首都圏より遠くに出向いたのは、大分県の二度と、北海道十勝のわが家の一度きりで、すべて行き先で透析をうけながらの法要と葬儀のためだった。ウィーンはフィルハーモニーの来日公演で済まされた。それと美術館と能楽堂だったね。もっともそれもまだ歩けるうちのことだったけれども。

あなたと出会い結婚しなくても私は樺太について、ということはチェーホフについてということになるが、書かざるをえずまた書いただろう。また大学は露文科などに進み、ドストエフスキー学者にしてマルクス主義者だった松尾隆教授という人に師事したのだったから、ドストエフスキーについて、マルクス主義の立場から書いただろう。現に在ったしまた在るようにね。もっともそれらさえもあなたの良人であり、ひとりの遺児をふくも子たちの父親として書いている。しかしあなた無しには絶対に有りえなかったものとして、古川氏関連の本がある。あなたが在って、古川和男という稀有の人との出会が起こったのであり、遅れてフクシマ後になったが、その人に係わって書くことになった。それももともとの専門からはかなり離れた領域に踏み込んでのことだった。

トリウム熔融塩炉――それがその名称だが、それをもしも知らなかったならば、私がどうなっていたか、どういう状態のなっていたか、と思うと慄然とする。私はありふれた反原発論者に留まっていたはずなのだ。

述べて来たように、古川学は出発が米国だった研究である。しかし熔融塩という媒体の発明に留まって、弾圧により中止せしめられ先に進めなかった。本に記したように、研究は日本人古川和男によって引き継がれ、理論的には一九八五年にＦＵＪＩとして完成した。しかしその実現を目指して設立されたＴＴＳはＲinＲの海外での試験を行っているが、資金難で行き詰まっている。

吉川律夫と木下幹康は国際的なトリウム熔融塩炉の教科書（米出版社、２０１７）の衷心的執筆者であり、日本は理論的には世界の先頭に位置しているのであるが、日本国内での実現は阻まれている。

世界の先頭を早いスピードで走っているのが、国家企業である中国上海の応用物理研究所（ＳＩＮＡＰ）であり、その炉型の基礎は日本のＦＵＪＩのものである。そもそも日本ではいまだに邦訳が出ていないワインバーグの名著『最初の核世紀』の中国訳は一九九六年に出ているのである。国家による取り組みの差は歴然としている。二

その総リーダーの徐洪傑氏をＩＴＭＳＦは二度セミナーに招いているが、二〇一六年の講演では、トリウム熔融塩炉が容れられていない日本の状態を「気の毒だ」と評していた。ＦＵＪＩの祖国でありながら、その祖国からは排除されているからである。日本は二〇一八年六月のトリウム熔融塩炉促進総会にも氏を招いており、私は聴講したが、事業の順調な進捗状況を語っており、他の諸国の講演者との相違には甚だしいものがあった。中国の場合は、核エネルギー炉に取り掛かるのが遅れたために、またウランを産しないために、ウラン軽水炉ではなく、トリウム熔融塩を選択し、日本を追い越してはるかに先に進み出たと見える。

日本は既存のウラン軽水炉の再稼働に執着し、その勢力の一部は、廃棄物の処理に役立つので熔融塩炉の採用に傾いている。それはトリウムにとっては最良の媒体ではあるが、ウランをも使用できるからである。しかし日本お核武装に備えて定量のプルトニウムを確保したいために、トリウムには背を向けている。すなわちトリウム熔融塩炉の全体は受け入れようとはしていない。トリウム熔融塩炉は核兵器の廃絶を目指す炉でもあるのである。

ワインバーグ＆古川の理想は中国において実現された。この影響はすでに顕われており、疑いもなく今後増大し続けるであろう。また日米原子力協定の終焉にともない米側からのプルトニウム削減の圧力は強化されるであろう。わが国の既存の「核燃料サイクル」は崩壊に向かっている。

その旧姓で呼ぶならば辛島和子であったひとよ、わが妻になり、二人の子の母親になったひとよ。古川和男さんに宛てた年賀状で「あなたは日本と世界にとって大切な方です。どうか名が生きなさって初志を実現してください」とあなたは書き送っていた。

対するに古川さんは敗戦時には熊本の五高に在籍していて、勤労動員と栄養不足で病院に収容され、空襲警報のサイレンが鳴っても自力では防空後に避難できずにベッドに伏せていたと記している。当時南九州一帯では、米軍の日本本土後略は宮崎県の日向海岸への上陸から始まると噂されていて、その際の死は覚悟されていた。徹底抗戦、一億玉砕の日本政府が無条件降伏を決断したのは、原爆が投下されたからであって、そのことを氏は「あなたたち被爆者の儀税によって」云々とあなたに書き送っている。かくて戦後、原発研究を志しながらウラン（広島）とプルトニウム（長崎）は排除し、トリウムを選んだ。すでにガンに冒されていた没年の講演では、それによって「地球と人類を救いましょう」と切実に訴えていた。その声が耳を離れない。古川学は「優れたものは、すべて稀であるとともに困難なのである」という、あなたの兄正道さんもまた書き留めていたスピノザの言葉を想起させるものがある。

一九五九年八月十日、十日間におよぶ平和友好フェスチバルの最終日、日本代表団主催の太平洋沿岸諸国集会「太平洋を非核の海に」が行われた。冒頭あなたが挨拶に立ち、英独露語に通訳されたが、それはナホトカ以来、途中の主要駅で、そしてもちろんウィーンでは連日、一日に何回も繰り返し行われてきたあなたの挨拶の最後のものだった。往路とは異なって、帰路のソ連ではしなくてすんだのである。

その日の夕べ、薄暮のウィーン市庁舎前の広場での閉会式。米国から東欧に亡命中だった黒人歌手ポール・ロブソンがベートーヴェン第九交響曲の「歓喜の歌」を歌った。

　　歓喜！　歓喜！

　　歓喜、美しき神々の火花、

　　楽園の乙女、

　　われら火の酒に酔い、

　　天なる汝（おんみ）の聖殿に踏み入る。

　　世の習わしの、厳しくわけ隔つるを、

　　敢えて汝が魔力は結びつける。

　　汝が優しき羽交（はがい）の下（もと）、

　　すべての人々は兄弟となる。

　　躍動する生命力をわがものとなしたる者は、

　　ひとりの友の友とならん。

　　ひとりの気高き女性をかち得た者は、

　　和して歓呼の声を挙げよ！

その両側には各国代表団から選ばれた女性たちが並んだのだったが、がその最も近い場所には、和服姿のあなたの端麗な、そして永遠に輝く姿があった。

**完**

**２０１８・７・２５**